

日本ルワンダ学生会議
第 8 回本会議
活動報告書

2012 年 8 月 17 日～8 月 31 日

はじめに

『日本ルワンダ学生会議 第8回本会議』の報告書をお手にとって頂き、ありがとうございます。この報告書を通じて、日本ルワンダ学生会議のこの夏の活動を皆様に報告できることを非常に嬉しく思います。

今回の本会議では、日本にルワンダ側メンバーを4人招待し、東京だけでなく神奈川、岩手、栃木に足を運び、2週間の活動を行いました。今回は初めて本会議に参加するメンバーも多く、慣れない環境の中、ルワンダ人メンバーに日本のことを知ってもらいたいという一心で一生懸命企画を練ってきました。

私たちは、各企画を通じて体験し、議論し、寝食を共にする中で、お互いの文化を知り、国について考え、将来に思いを馳せました。本会議を通して、お互い大きな気づきや学びを得られたことを確信しています。

この報告書が、日本とルワンダ、そして世界について視野を広げていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、企画の実現にご協力いただきました皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

2012年 10月
日本ルワンダ学生会議
メンバー一同

日本ルワンダ学生会議 第8回本会議

日本招致報告書

<目次>

はじめに.....	4
-----------	---

【序章】

日本側代表挨拶.....	9
ルワンダ側代表挨拶.....	10
関係者挨拶.....	11
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	12
ルワンダ共和国基礎情報.....	15

【第一章】第8回本会議 事業概要

日本ルワンダ学生会議 第8回本会議 概要・目的.....	21
日本ルワンダ学生会議 第8回本会議 スケジュール.....	22

【第二章】日本招致活動報告

イベント企画

ダンスコンサート.....	24
---------------	----

岩手企画

アイスブレイキング.....	28
事前学習.....	29
被災地訪問.....	32
リフレクション.....	39
学生会議.....	41
ダンスコンサート.....	43

栃木企画

交流会.....	50
足尾.....	52
益子.....	56

【第三章】 学生会議、グループワーク報告

日本における食の変化.....	61
日本企業 UNIQLO は貧困層に貢献できるのか.....	62
日本の医療制度とその問題.....	65
私たちはなぜ英語を学ぶのか.....	66
日本の農業.....	69
足尾銅山ー公害問題ー.....	74
TRADITIONAL DANCE AS A TOOL OF WELCOMING TOURISTS.....	75
民主主義と選挙.....	76
How Rwanda Has Been Reconstructed.....	79
被災建造物の保存・観光地化の是非について.....	80
日本における子どもの貧困と教育格差.....	82

【第四章】 参加者感想

岩井 天音 国際基督教大学教養学部 4 年.....	87
岩垣 梨花 早稲田大学人間科学部 1 年.....	88
大山 剛弘 早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻 修士 1 年.....	90
片岡 美月 早稲田大学文化構想学部 3 年.....	93
久保 唯香 早稲田大学文化構想学部 3 年.....	94
小坂 弘奈 フェリス女学院大学 2 年.....	95
小池 志歩 群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部 2 年.....	96
品川 正之介 早稲田大学教育学部 3 年.....	97
島村 志保子 日本大学法学部 1 年.....	98
白川 千尋 専修大学法学部 2 年.....	100
谷川 琴乃 早稲田大学政治経済学部 2 年.....	101
永井 陽右 早稲田大学教育学部 2 年.....	102
中山 康平 早稲田大学国際教養学部 4 年.....	103
藤田 康宏 早稲田大学政治経済学部 2 年.....	104
藤本 丈史 早稲田大学政治経済学部 3 年.....	106
松本 万里子 立命館大学経済学部 2 年.....	107
丸茂 思織 日本大学法学部 1 年.....	108
宮本 寛紀 横浜市立大学国際総合科学部 3 年.....	110

【第五章】 付録

コラム

ホームステイ	26
ルワンダンと駆け抜けたあの夏の日	48
停電の夜	59
Let's Lecture!	64
JRYC 的国際貿易取引	73
ルワンダンは今日も踊る	78
乙女なルワンダンガール…?	85
ムリガンデ大使の深イイ話	112
メディア掲載	114
後援・助成団体様・ご協力頂いた方々	119
写真館	121
おわりに	123

序章

日本側代表挨拶.....	9
ルワンダ側代表挨拶.....	10
関係者挨拶.....	11
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	12
ルワンダ共和国基礎情報.....	15

日本側代表挨拶

日本ルワンダ学生会議副代表で、今回の第 8 回本会議の事業責任者を務めさせていただきました横浜市立大学国際総合科学部 3 年、宮本寛紀と申します。

当団体は、2008 年度より通算して 8 回の本会議を開催してきました。そのうち、日本人学生メンバーがルワンダへ渡航しての本会議は 4 回、ルワンダ人学生を日本に招致しての本会議が 4 回。初めは、ルワンダへ渡航するのみであったルワンダ・プロジェクト（“日本ルワンダ学生会議”と名称を変更する前）の頃から考えてみると、着々と経験を積んでいる学生団体となっており誇りに思います。また、過去 3 回の日本招致事業では、冬に開催していたのですが、今回は初めての夏開催となりました。第 7 回本会議が昨年度の冬に開催され、こちらも日本招致での本会議だったのですが、1 年も経たないままに再度ルワンダ人学生を日本に招致することが出来、大変嬉しく思います。やはり、日本とルワンダでは地理的に遠いということもあり、実際に両国の学生メンバー同士が顔を合わせて活動の出来る重要な本会議を継続的に実施出来ていることに、メンバー共々のモチベーションの高さや、いかに周りで支えてくださる皆様によって成り立っているのかを感じ、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の日本招致事業では、東京・横浜・岩手・栃木を訪問し、各地で様々な企画を遂行しました。それぞれの企画詳細についてはこの報告書に記されておりますので、ここでは割愛させていただきます。岩手の被災地を訪問する企画や、栃木での地域の衰退について考える企画、横浜で開催したダンスコンサートなど、それぞれ企画準備段階から多くの議論を重ね、日本人学生メンバーにとってもルワンダ人学生メンバーにとってもいかに有意義なものにするか、「日本ルワンダ学生会議」だからこそ出来ることとはなんなのかなど、本当に多くのことを考えさせられました。当団体と、そして一緒に活動するメンバーと真正面から向き合うことができたと思っております。また、今回の本会議を経て多くの課題も浮き彫りになってきました。これを糧に、より一層、成長・進化をしていければいいと思います。

最後になりましたが、当事業の開催にあたりご協力いただいたすべての方に感謝の意を表します。ありがとうございました。今後もメンバー一同、精進し活動に取り組んでいきますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

日本ルワンダ学生会議 副代表
宮本寛紀

ルワンダ側代表挨拶

第8回本会議は前回の第7回本会議同様、文化交流と相互理解に焦点をあてたものとなったのだが、この本会議は文化交流という点において例年とは大きく違っていた。なぜなら私たちは横浜・岩手・栃木という多くの場所でコンサートを実施したからである。

この本会議は私たちが17日に成田空港に降り立ったときから始まった。

私たちは神奈川県横浜市や東北に位置する岩手県など、日本の多くの場所に訪れた。岩手企画では岩手大学の素晴らしい学生たちと意見を共有することができた。また私たちは戸羽太氏が市長を務める陸前高田市に訪れ、津波によって経済基盤や人々の命が奪われたことを学んだ。その後訪れた栃木では、我々ルワンダの学生が日本の文化について大いに学ぶことができた。

またこれらの企画のなかでは、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行い、それに対する議論を展開した。

本会議はとても短く感じたが、とてもしっかり計画されていた。また、沢山の新しいメンバーが企画担当などをしっかりこなしている姿を見て驚かされた。2月に日本人メンバーがルワンダに来るのが楽しみだし、それに向けた準備を入念に行いたい。次回の本会議も良いものにしたいと思う。

ルワンダ国立大学
Eugene MAZIMPAKA

関係者挨拶

2011年3月11日、東日本大震災が起こり、津波被害、原発事故等の未曾有の複合災害となった。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）もまた、この未曾有の大災害に対して何をできるか、早稲田大学教職員による WAVOC 運営委員会でも議論が交わされた。その時の意見の一つが「日本がこのような状況になったのだから、海外プロジェクトは全面的に凍結し、震災復興支援に WAVOC は一丸となって注力していこう」というものであった。その方向に議論が流れていった時に、私はその意見に全面的に反対した。「日本がかつてない大災害で大変なのはその通りである。しかしながら、資源もなく食料自給率も低い日本は、世界の国々、人々の支持と共感がなければ国際社会で生き残れない。むしろこのような時だからこそ WAVOC は海外プロジェクトも継続し、いま日本がどうなっているかを世界に発信するべきだ。」と。その後の各プロジェクトの代表者との会議を経て、海外プロジェクトも継続となった。

JRYC はその年の夏はルワンダで、冬には日本で日本とルワンダの学生会議を行った。当然ながらそこでも地震、津波、原子力発電については議論に上がった。日本人はルワンダのことをほとんど知らないが、ルワンダの人々はテレビのニュースはインターネットで地震や津波、原発事故のことをよく知っているのだ。

そして2012年夏、ルワンダの大学生が日本人学生と共に被災地である岩手県の土を踏んだ。ルワンダは地震がほとんど起きることはない、海もないから津波もない、原発もないから放射能の恐怖もない。そのような国の学生が、不安な気持ちを乗り越えて日本に来たのである。

この夏、JRYC は様々な困難に直面した。早稲田大学や岩手大学との調整、ルワンダ学生を招へいするための資金調達の問題などだ。しかし JRYC メンバーたちは、あきらめることなく、ルワンダから4人の学生を招へいし、全日程を終えることができた。

この報告書にはそんな背景や苦難が事細かく書かれることはないかもしれないが、この報告書を手取る方々には、行間から少しでも「そんなことがあったんだな」と汲み取ってもらいたいと思う。

小峯茂嗣

WAVOC 客員准教授

日本ルワンダ学生会議団体紹介

<略歴>

2005年10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年9月	ルワンダにて第1回本会議を開催
2009年3月	団体名をルワンダ・プロジェクトから日本ルワンダ学生会議に改称
同年9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
同年12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
同年8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
同年12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
同年12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年8月	日本にて第8回本会議を開催

<主な活動内容>

- ・ルワンダへの渡航
- ・日本への招致
- ・週1回の定期ミーティングの開催
- ・勉強会
- ・講演会の開催
- ・報告会の開催
- ・各種イベントへの参加

<構成人数> (2012年10月現在)

日本側メンバー 22名 (関東19名、関西3名)

ルワンダ側メンバー 30名

<活動理念>

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかつただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again’に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはず

です。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまった。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

<団体理念の継承>

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保する。ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を

取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

<公認>

- ・ 駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・ アフリカ平和再建委員会（ARC） 小峯茂嗣
- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

<連絡先>

メールアドレス：japan.rwanda@gmail.com

ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>

ルワンダ共和国基礎情報

(外務省ホームページより引用 2012年3月現在)

正式名称：ルワンダ共和国 (Republic of Rwanda)

一般事情

<「千の丘の国」と呼ばれる自然豊かな内陸国>

1.面積

2.63 万平方キロメートル

2.人口

1,030 万人 (2010 年、UNFPA)

3.首都

キガリ

4.言語

キニアルワンダ語、英語、仏語

5.宗教

カトリック 57%、プロテスタント 26%、アドヴェンティスト 11%、イスラム教 4.6%等

6.略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961 年	王政に関する国民投票 (共和制樹立を承認) 議会在カイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター (ハビヤリマナ少将が大統領就任)
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺」発生 (~1994 年 6 月)
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) が全土を完全制圧、新政権樹立 (ビジムング大統領、カガメ副大統領就任)
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)

2008年9月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2010年8月	カガメ大統領再選

政治体制・内政

1.政体

共和制

2.元首

ポール・カガメ大統領

3.議会

上院（26 議席）、下院（80 議席）

4.政府

(1) 首相 ピエール・ダミアン・ハバムレミ（Rt. Hon. Pierre Damien HABUMUREMYI）

(2) 外相 ルイズ・ムシキワボ（Hon. Louise MUSHIKIWABO）

5.内政

1962年の独立以前より、フツ族（全人口の85%）とツチ族（同14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年6月までの3ヶ月間に犠牲者は80～100万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年9、10月の上院・下院議員選挙及び2008年9月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

外交・国防

1.外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持、現在は、経済開発のため先進諸国との協力を重点を置く。東アフリカ共同体（EAC）及び東南部アフリカ共同市場（COMESA）メンバー。コモンウェルス加盟（2009年11月）。

2.軍事力

- (1) 予算 7,600 万ドル（2009年）
- (2) 兵役 志願制
- (3) 兵力 3万3,000人（2009年）

経済

1.主要産業

農業（コーヒー、茶等）

2.GDP

56.3 億ドル（2010年）

3.一人当たり GNI

520 ドル（2010年）

4.経済成長率

7.5%（2010年）

5.物価上昇率

2.1%（2010年）

6.総貿易額

- (1) 輸出 193 百万ドル（2009年）
- (2) 輸入 961 百万ドル（2009年）

7.主要貿易品目

- (1) 輸出 コーヒー、茶、錫
- (2) 輸入 資本財、半加工品、エネルギー財、消費財

8.主要貿易相手国

- (1) 輸出 ケニア、コンゴ民主共和国、タイ、中国（2009年）
- (2) 輸入 ケニア、ウガンダ、中国、アラブ首長国連邦

9.通貨

ルワンダ・フラン

10.為替レート

1 ドル=598 ルワンダ・フラン

11.経済概況

- (1) 農林漁業が GDP の 40%以上、労働人口の 90%を占め、多くの農民が小

規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶（輸出収入の 60%）であり、高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で、内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

(2) 1980 年代は、構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが、内戦勃発以降はマイナス成長、特に 1994 年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後、農業生産の堅実な回復（1998 年には内戦前の水準を回復）、ドナー国からの援助、健全な経済政策により 1999 年までに GDP は内戦前の水準に回復した。

(3) ルワンダ政府は、1996 年に「公共投資計画」を、2000 年に 20 年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002 年には「貧困削減戦略文書完全版（F-PRSP）」を、また、2007 年には、第 2 次世代 PRSP となる経済開発貧困削減戦略（EDPRS）を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000 年 12 月には、拡大 HIPC イニシアティブの決定時点に達し、2005 年 4 月に完了時点に到達している。

(4) カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、グッドガバナンスの模範国として世銀等からの評価も高い。

経済協力

<二国間援助の本格再開>

1.日本の援助実績

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| (1) 有償資金協力（2009 年度まで、EN ベース） | 46.49 億円 |
| (2) 無償資金協力（2009 年度まで、EN ベース） | 342.45 億円 |
| (3) 技術協力実績（2009 年度まで、JICA ベース） | 58.44 億円 |

2.主要援助国（2008 年）

- (1) 米 (2) 英 (3) ベルギー (4) オランダ (5) スペイン

二国間関係

<極めて親日的>

1.政治関係

(1) 日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。

(2) 1994 年 4~6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9~12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ 等に約 400 名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

2.経済関係（対日貿易）

- (1) 貿易額

輸出 4,700 万円 (2010 年)

輸入 5.8 億円 (2010 年)

(2) 主要品目

輸出 コーヒー、バッグ類

輸入 自動車、二輪、機械

3.文化関係

国営テレビ局に対し番組ソフトを供与。

4.在留邦人数

82 人 (2010 年 10 月現在)

5.在日当該国人数

21 人 (2010 年)

第一章

日本ルワンダ学生会議 第8回本会議

事業全体概要

日本ルワンダ学生会議	第8回本会議	概要・目的	21
日本ルワンダ学生会議	第8回本会議	スケジュール	22

第 8 回本会議 概要・目的

【開催日程・場所】

日程：2012年8月17日～2012年8月31日

場所：神奈川県・岩手県・栃木県・東京都

【事業概要】

日本ルワンダ学生会議ルワンダ側メンバー4名を日本に招致する。岩手県では東日本大震災から約1年半を経た被災地を訪れて現状を確認し、震災後の日本社会の変化や地域社会の活動事例について学ぶ。また、虐殺後の復興をその身に経験してきたルワンダの学生の視点を交えて、震災復興について考える。栃木県では、日本の農業の在り方と経済発展との農業の関係性について学習する。狭い国土に山がちな地形という日本とルワンダの共通点を踏まえ、農業国であるルワンダの発展について考える。また、ルワンダやその文化を日本の一般市民に幅広く紹介することを目的としてダンスイベントを開催する。

【事業目的】

- ① 日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介することで、両国についての深い理解を得る。また、これは両国の学生が自国について再認識し、理解を深めることでもある。
- ② 日本とルワンダの学生が2週間の共同生活をするすることで、友情を育み、信頼・協力関係を構築する。豊かな人間関係を築くことによって、相互理解の第一歩とする。
- ③ お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
- ④ 当団体内部間での交流だけではなく、ルワンダ人学生によるコンサートなどを行うことにより、日本の幅広い層を対象とした文化交流を実現する。
- ⑤ 事業終了後の報告書・ドキュメンタリー映像の作成、報告会の開催を通して日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。また、ルワンダ側メンバーも事後活動を行い、ルワンダにおける日本への理解を促す。

第8回本会議全体スケジュール

【全体スケジュール】

実施日	事業内容	実施地
8月17日	ルワンダメンバー、日本到着	成田空港
18日	学生会議	
19日	高校イベント企画	神奈川
20日	学生会議、移動	
21日	岩手大学生との交流会	岩手
22日	現地活動の事前学習	
23日	陸前高田被災地視察、インタビュー	
24日	振り返り、休息	
25日	学生会議	
26日	ルワンダダンスコンサート	
27日	栃木県へ移動、宇都宮大学交流会	栃木
28日	足尾銅山跡地見学	
29日	益子町にて農業体験	
30日	学生会議	東京
31日	ルワンダメンバー帰国	

第二章

日本招致活動報告

イベント企画

ダンスコンサート	24
----------	----

岩手企画

アイスブレイキング	28
事前学習	29
被災地訪問	32
リフレクション	39
学生会議	41
ダンスコンサート	43

栃木企画

交流会	50
足尾	52
益子	56

イベント企画

ルワンダと 学べるお祭り

～アフリカダンスコンサート～

担当者：小坂弘奈

協力者：横浜アーツフェスティバル実行委員会後援

Dance Dance

Dance@YOKOHAMA2012 参イベント

横浜市文化観光局後援

駐日ルワンダ大使館公認

港北公会堂スタッフの皆様

【スケジュール】

17:00	港北公会堂到着、打ち合わせ、
17:45	開場
18:00	挨拶、ルワンダメンバープレゼン
18:30	横浜商業高校生プレゼン
19:00	多摩美術大学 発表
19:25	ルワンダメンバー発表
19:50	ルワンダダンスレクチャー
20:45	企画終了

企画目的

現在、多くの日本人がルワンダ＝大虐殺があった国、または虐殺が起きている国だと認識しているのが現実である。しかし、日本ルワンダ学生会議メンバーとしてルワンダ人と交流していく中で、我々はルワンダの美しい自然、彼らの人柄など虐殺のイメージとは異なるルワンダを知った。本企画を通してより多くの人々に虐殺以外のルワンダの一面を知ってもらうことが目的である。また、アフリカ開発会議を翌年 2013 年に控えた横浜でこの企画を行うことで、参加者のアフリカへの関心を高めることも狙いのひとつである。

企画概要

日時：2012年8月19日（日）

場所：港北公会堂

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
横浜市立横浜商業高 GLOCAL-Y
部員
多摩美術大学ジャンベ部員

活動報告

コンサート当日の私たちの一日は午前
に予定されていた学生会議からはじまった。
学生会議が終わり午後からはコンサートの
リハーサルに移る。リハーサルは某メン
バー宅附属施設で行った。小さいスペースな
がらも参加者全員が集まること出来、本
番前の貴重な時間を共有した。そして迎え
た本番、プログラムは順調に進み我々にと
って初の試みであるダンスレクチャーも成
功し、参加者のほぼ全員が立ち上がりル
ワンダダンスを踊っているという嬉しい光
景を見ることができた。参加して下さった
方々、ご協力下さった方々には本当に感謝
である。



感想

担当者

私がリーダーとして企画した今回のコン
サートを終え振り返ると、反省することば
かりであった。その反省したことは全体感
想のページに述べてあるのでそちらを見て
いただくと嬉しい。反省ばかりしても仕
方がないのでポジティブな感想を述べよう。
今回私にとっては2度目のルワンダダンス

であったが、素直な感想としては、前回よ
りも格段とパワーアップしていた。実は企
画の打ち合わせでメールのやり取りをして
いる段階から彼らのダンスに対する意気込
みを感じていた。何か月も前から彼らはこ
の日のためにダンス練習を重ねついに迎え
た本番で素晴らしいパフォーマンスを見せて
くれたのだ。不安でいっぱいだった私に、
企画終了後の彼らは満足した様子で得意げ
な顔を見せてくれた。レクチャーの後、来
場のみなさんが楽しそう踊っているのを見
て、音楽に疎い私も音楽で世界は繋がるの
だな、と思ったのである。

(JRYC 小坂弘奈)

参加者

日本とルワンダの文化交流はとても素
晴らしいものだった。観客もダンスに加わ
ってくれて、私達の文化に興味をもってく
れたことがわかった。日本人メンバーから、
今まで来日したメンバーと比べてダンスが
素晴らしかったと聞いて、とても嬉しくな
った。

(Cynthia)

コラム「ホームステイ」



8月18日、翌日の横浜コンサートに備えてルワンダンは横浜の私の実家に宿泊した。ユジーンにとっては二度目のごりん家(小坂)宿泊となったのだが、家に着く前から「お母さんは元気になっているのか」としきりに聞いてきた。どうやらユジーンは私のお母さんが好きらしい。去年のホームステイを思い出した。去年は2人のルワンダ男子がホームステイをした。家の前に着くと日本語でのあいさつを必死に練習し、「オジャマシマス、オジャマシマス」とやけに腰が低くておもしろかったのだが今年のユジーンはまるで、我が家に帰ってきたかのように我が物顔でのしの上がりこんできた。まあ、いいか。と思いながらみんなそれぞれ好きなことをし始め、私は翌日に控えたコンサートの来場者に配るプチギフト作りをルワンダんに手伝ってもらった。プチギフトはルワンダティーと彼らの直筆のメッセージを添えたもので手分けして作った。

当初、5人暮らしの狭い私の家に4人もルワンダンを泊めるのは厳しいのではないかと考えていたが、なんとか全員の寝る場所を確保することができ、一安心していた。そんなことを考えていると、ユジーンからいきなり玄関の外に呼び出された。今夜は星がきれいだとか、素敵な夜景だとか(自宅の前はマンションと道路)言い始め、私は「なんだ、もしかして、こ、こ、告白か!？」と自意識過剰な思い込みをして勝手にどきどきしていると、なんと持っていたコップの水を私の頭にかけてやったのだ! 啞然としていると、他のルワンダンも出てきて HAPPY BIRTHDAY! と歌い始めた。わたくし事ではあります、翌日19日は20歳の誕生日。どうせ、コンサートで忙しくてみんな忘れちゃうよ…と実は少し拗ねていたのだが、ルワンダンにキニアルワンダ語で歌ってもらうという素敵な前夜祭になり、とても嬉しかった。また来年も泊まりにおいて、ルワンダン!

(小坂弘奈)

I w a t e

岩手企画

【スケジュール】

実施日	活動	場所
8/21 (火)	アイス ブレイキング	岩手大学
8/22 (水)	被災地 事前学習	岩手大学
8/23 (木)	陸前高田訪問	陸前高田市 市街と 沿岸地域
8/24 (金)	前日の活動 振り返り	アイーナ (い わて県民情 報交流セン ター)
8/25 (土)	学生会議	アイーナ
8/26 (日)	ダンスコンサー ト	クロス テラス盛岡



陸前高田市庁舎前でダンスを披露するルワンダ学生

活動内容

東北の震災復興をテーマに、岩手大学・ルワンダ国立大学・そして関東圏の学生と異なる背景を持つ学生が、被災地・陸前高田を訪問する。その後、現地での体験を元に今後の東北復興や国家発展について議論・発信する。またルワンダでは平和の象徴である伝統ダンスを取り上げたコンサートを盛岡市街中心部で行い、幅広い文化交流も促進する。

企画全体目的

1. 東日本大震災を題材に、国や自治体の復興は岩手・ルワンダ・関東圏の三者三様の視点からどのような方針のもと実現されるべきか議論し、参加した大学生が将来の日本やルワンダ、世界各地の発展や復興に複眼的な視点を持って携わる素養を身につける場とすること。
2. ルワンダ虐殺・東日本大震災など異なる経験や背景を持っていても、そこから共通項を見つけ出して教訓を共有し相互理解を目指す、視野の広さを育むこと。

〈ルワンダ人学生の参加について〉

ルワンダは、1994年の大虐殺から僅か20年弱で驚異的な復興と経済発展の軌道に乗

った国である。今回ルワンダから招く学生は、植民統治下以前から民族を問わず共有されてきたダンスを通じて、紛争により発生した亀裂を克服しようと活動する学生である。彼らは、震災により多くの人命や経済的な損失を被った東北地方の復興について、自らの復興体験から共通項を見出だし、「力になりたい」というメッセージを震災直後から伝えている。そのような彼らと日本人が、復興経験や平和への想いを再確認・発信することが、本企画最大の独自性である。

アイス ブレイキング

担当者：小坂弘奈



企画概要

日時：8月21日（火）

場所：岩手大学第二体育館

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
岩手大学メンバー

企画目的

翌日22日から5日間にわたる岩手大学メンバーとの共同企画の前日に、日本ルワンダ学生会議メンバーと、岩手大学メンバーの親睦を深めるための交流企画。岩手大学第二体育館でのレクレーションの後、大学付近を流れる河原でバーベキューを楽しむ。

活動報告

岩手大学体育館で行われたアイスブレイキングは、21日の昼食後13時から始まった。プログラムは自己紹介を兼ねたキャッチボール、二人三脚、バレーボールと続き、終了後大学付近を流れる夕顔瀬橋河原でバーベキューをした。

企画の最初に行った体育館に大きな円を作りキャッチボールをしながらメンバーの名前を覚えるゲームでは、日本ルワンダ学生会議メンバー、岩手大学メンバーが早速仲良くなることができた。初対面の人が集まり、5日間も交流し互いの意見を交換するというのはなかなか難しいが、このアイスブレイキングのおかげでメンバーが本音を言い合える関係になれたと思っている。

感想

担当者

ルワンダ人にとってはじめての経験となった二人三脚リレーでは苦戦するペアと息ぴったりペアが雲泥の差を見せ、見ていても面白かった。バレーボールは2チームに分かれ何試合か行った後、ルワンダ人対日本人の戦いになり、ルワンダメンバーが急に本気の顔を見せ驚いた。河原でのバーベキュー、全員が協力して準備しやっとなりついたお肉の味は格別に美味である。

後半、ルワンダメンバーのテンションが最高潮になると、彼らはやはり踊りだした。ある日本人メンバーがプラスチックの箱をジャンベ（ルワンダンが使う打楽器）のように叩くとリズムに合わせルワンダダンスコンサートのはじまりだ。日本人メンバーも混じり、とても楽しい思い出になった。
(JRYC 小坂弘奈)

私は本企画初日のアイスブレイキング担当だった。朝から” Be my friend!!” Tシャツを着て気合満々で望んだ。まずアイスブレイキングの最初に、自己紹介も兼ねた「名前覚えボール渡しゲーム」というのを行った。この小学生がやるようなゲームを、みんな最初は「え～なにそれ」みたいな微妙な反応をしていたが意外と結構真面目にゲームを行ってくれたのでよかった。その後2チーム対抗での二人三脚、ドッジボール、バレーボールを行った。二人三脚では足を結ぶヒモが切れたり、バレーボールではいきなり日本vsルワンダの試合が始まったりと色々ハプニング等が起こって大変だったが、全体的に最初よりも打ち解けた雰囲気になることができたので、アイスブレイキングの意義は達成できたと思う。

その後のBBQは準備が大変だった。クーラーボックス等の荷物の運搬で人手が足りなかったところにたくさんの方が率先して手伝ってくれたためとてもありがたかった。みんな代わる代わる焼く係りを買ってでくれたことにも感謝したい。みんなおいしいお肉やら野菜やらお菓子やらを食べ、お酒やコーラを飲みながら、初日のアイスブレイキングBBQを楽しんでいたように見えた。ルワンダンが急にダンスを始め、そ

れに日本人学生も続いて歌ったり踊ったりと、近所の人に通報されるほどの盛り上がりだった。

ところどころ段取り不足で時間通り進まず大変な部分もあったが、ルワンダ、関東、岩手の学生がお互い打ち解けられるきっかけを作るお手伝いできてよかった。

(岩手大学 菅原優衣)

参加者

岩手大学の学生はその日どうやって仲よくなったのか分からないくらい気さくな人達で、すぐに仲良くなれた。岩手大学メンバーである、洞井・紫苑・佐藤・剛宏・優海・慧矢・壮平・麻菜・鈴木・優衣のことを決して忘れない。

(Eugene & Rosy 白川訳)

事前学習

担当者：白川千尋

企画概要

日時：2012年8月22日（水）

場所：岩手大学教室

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

(ルワンダ人4人、日本人11人)

岩手大学メンバー10人

協力者：岩手大学

企画目的

この事前学習では岩手企画が本格的に始まる前に、岩手企画について、岩手県の紹介、震災当時の状況そしてルワンダの紹介、ジェノサイドが起きたときの状況を、JRYC

日本人メンバー、岩手大学の学生、ルワンダの学生全員で共有し、岩手県・ルワンダの基礎知識をみにつける。

また 23 日の陸前高田市の戸羽太市長訪問前に戸羽市長に関する知識をみにつけ、戸羽市長に対する質問を考え準備することで、講演会を実りのあるものにし、岩手企画のテーマである「地域社会の復興と国の発展」を考える一つの参考とする。

活動報告

1. 岩手企画について

岩手企画の概要、テーマ、題材、活動内容、なぜ首都圏に住む学生・ルワンダの学生・岩手の学生でなければいけないのか、岩手企画の目標のプレゼンテーションを行った。

(JRYC 白川千尋)

2. 岩手県と東日本大震災

岩手県が日本のどこに位置しているか、岩手県の由来、食べ物、伝統工芸品などといった文化を紹介した。また、発表者が経験した震災当時の状況、東日本大震災がもたらした被害を発表した。

(岩手大学 福士優海)

3. ルワンダ・ジェノサイドについて

ルワンダの紹介、ルワンダ政府の国づくりについて、またジェノサイドがなぜ起こったのか、その後のツチとフツの和解について発表した。

(JRYC Eugene Magzimpaka)

4. 戸羽市長に関するプレゼンテーション

戸羽市長は震災の起きる一ヶ月前に陸前

高田市の市長になったことや戸羽市長自身も震災の被害者であることなどを発表した。

(JRYC 大山剛弘)

◆ 戸羽市長に対する質問を考える

戸羽市長に関するプレゼンテーションをふまえ、4 つのグループに分かれて質問を考えた。「震災で犠牲者をだした家族に対するサポートや震災孤児に対するサポートについてどう考えているか」、「なぜ東京と被災地とでは復興に大きな差があるのか」など。主に復興への市の対応に関する質問が多かった。

感想

担当者

岩手企画のテーマは震災復興ではなく「地域社会の復興と国の発展」である。あくまでも震災復興は題材であるが、被災地である岩手県の人々と直接話し、自分の目で現場を見ることで、テーマに縛られない大きな枠組みとしての“復興”を考えることができたのではないかな。

一番印象的だったことは、ルワンダ人にとって 1994 年に起きたジェノサイドから今日に至るまでの地域の復興、和解といったプロセスと、3.11 のような震災からの復興プロセスは全く違うものであり、ケースが違うと言ったことだ。「ジェノサイドは人災であり、日本で起きたことは震災である」と。確かにケースと復興へのプロセスは違うものかもしれない。しかしルワンダ人が心のケア、特に子供のメンタルを気にかけていたのを聞いて“心の復興”といったものを大事にしているのだなと思った。

(JRYC 白川千尋)

うだるような暑さの中、岩手大学で今回の企画の幕開けとなる事前学習が行われました。岩手大学側のメンバーである私にとって、このような機会は初めてであったため事前学習が始まった直後は戸惑うことも多々ありました。しかし今回の企画の概要やジェノサイド震災に関するプレゼンテーションやディスカッションを通して事前学習の目的である、ルワンダ、東京、岩手の学生のそれぞれの視点を重ね合わせるという目的を果たせたと私は感じました。今まで東京や他国の学生と意見を交換し共有する機会をあまり持ったことがなかったので事前学習をはじめとする今回の企画は私にとってよい経験となり、出会えた全てのメンバーから多くの刺激をうけることができました。

(岩手大学 佐藤綾乃)

参加者

昨年の3月11日、私の地元である岩手県沿岸の山田町も東日本大震災により多くの人命や経済的な損失を被った。その際に、地域や国を越えて多くの方々に支援を頂いた。このプロジェクトに参加したのは、震災にもう一度向き合い自分の中で整理したいという想いと、地域・国を越えて相互に理解し互いの発展や復興に携わることは可能か、可能であるとすれば自分には何ができるかを自分なりに考えて答えを出したい、という想いがあったためだ。プロジェクトの中で、私は被災地活動の企画と事前学習という形での震災に関するプレゼンテーションをする機会を頂いた。事前学習、被災地訪問という流れを少しでも震災時の状況

や人々の想いを汲み取ってもらえる形にしたいという想いから、改めてしっかりと震災に向き合わなければならなくなった。しかし周囲のサポートもあり、無理をせず自分は非被災地の人々に何を伝えたいのか、またどのように伝えればよいのかを考えることができたように思う。

プロジェクトに参加する前の私は、被災地の人間の想いや状況を想像することを要求する一方、本当にわかってくれるのか、外の人に何がわかるのか、という拒絶の気持ちもあった。しかし企画を通して、お互いにすべてを理解することはできなくても、相手の立場に立って考えること、そこで起こったことを忘れずに、これから先も想いを馳せることは可能であるように感じた。また、何よりこのような機会を通して、辛抱強く相手の話を聞き理解しようと努めてくれる多くの優しい友に出会えたことはひとつの大きな成果であったように思う。相手と友になり互いに理解しようと努めることが、地域を越えた相互理解を可能にするために自分にできることのひとつではないだろうか。

(岩手大学 福士優海)

被災地訪問

担当者：丸茂思織

【スケジュール】

9:00~10:00	陸前高田市庁舎訪問
(以降 2 グループ別行動) B グループの場合	
10:15~10:30	箱根山
10:30~11:00	左官大工伝承館
11:30~12:30	りくカフェ
12:40~13:40	未来商店街
13:40~15:40	旧陸前高田市役所・一本松
16:00~18:00	陸前高田出発
18:00	解散

企画概要

日時：2012年8月23日（火）

場所：岩手県陸前高田市

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
(ルワンダ人4人、日本人13人)
岩手大学メンバー10人

協力者：陸前高田市長戸羽太氏
陸前高田市庁舎職員の方々
左官大工伝承館職員武蔵様
りくカフェスタッフの皆様
未来商店街スタッフの皆様
ガイド新沼岳志様



陸前高田市庁舎前にて

企画目的

東日本大震災による地震・津波の多大な被害を受けた陸前高田市に実際に足を運び直接現地の方のお話を伺うことで、津波・震災に対する理解を深め、より学生同士の議論を有意義なものにする。

活動報告

23日に実施した被災地訪問は、参加人数の都合上A・B二組に分かれての活動となった。また、ルート・時間は違えどA・Bグループが訪れた場所についてはほぼ同じである。

■陸前高田市庁舎訪問

この度はありがたくも、陸前高田市長戸羽太氏のお話を直々に伺う機会を設けて頂くことができた。

市長のお話

お話の前半は、東日本大震災によって陸前高田市が大きな被害を受けたことや、その中でも子供たちが一番の被害者であり“子供たちが夢をあきらめないでこれから生き続けられるにはどうすればよいか”ということが市長に課せられた一つの大きな課題であること、また対応の遅い政府への怒りの声等…深刻で心が痛む、厳しい現状を中心にお話して頂いた。

対して後半は、市長が掲げる8年復興計画や、そのひとつの柱である“「世界に誇れる美しい街」の創造”について等、陸前高田市の未来を感じさせるお話が中心であった。

私自身聴いていて心が痛むお話も勿論数多くあったが、それ以上に陸前高田市の未来に思いを寄せ、力強く復興計画について

話される戸羽市長の姿がとても印象的であった。

意見交換会

Q. 先ほどのお話の中で、陸前高田市に対して人々が無関心であるとおっしゃっていましたが、無関心はなぜ起こると思いますか？

A. 震災が起きてから1年を過ぎると、福島の原因が注目を集めていることもあり、特別なトピックがない限りなかなかメディアに取り上げられなくなっていました。ただこの地域で頑張っている人がいるということを知り、国民に意識し、応援してもらいたいのです。応援しているというその気持ちをわたしたちに伝えてくれることで、被災者も安心することができるのです。(戸羽市長)

Q. 子供たちのサポートはどうなっているのですか。(Rosette)

A. 震災・津波で親を失った孤児は親戚に預けられたり、孤児院に入れられたりしています。そんななか、一番難しいのは心のケアです。実際に地震を体験し、津波に追いかけられ、家族・友人を亡くすというような経験をしているわけなので、ふつうの心のケアでは不十分だと思います。(戸羽市長)

Q. 先ほどのお話の中で、もし東日本大震災が東京や大阪で起こっていたら1年半もほうっておくことはしないと仰っていましたが、同じ日本なのになぜこんなにも対応が違うのですか。(Eugene)

A. 陸前高田市は田舎であり、ほうっておいても日本の経済に大きく影響しません。政府は遅くとも結果的に復興すればいいだろう程度に考えているのではないのでしょうか。

(戸羽市長)

Q. 日本政府はそれでもサポートをしようとはしているのですか？(Eugene)

A. 勿論そうです。しかし政府のサポートはとてものんびりしています。今回の地震は1000年に一度といわれていますが、1000年に一度しか起こらないことに対して今までの通常のやり方、通常のルール、通常法律でやっているから対応できていないのです。1000年に一度のルールを作るべきだと思います。(戸羽市長)

Q. ルワンダでも1994年にジェノサイドが起りましたが、現在では復興が進んでいます。先程市長の8年復興計画のお話を聞いてルワンダでも生かしたいと思ったので、もうすこし詳しくお話を伺いたいです。

(Valens)

A&Q. 日本の場合は、復興を進めるにも地域住民の合意が勿論必要で、我々が勝手に決められるものではありません。お互いが同じベクトルを向くことから始まっていくと考えると、やはり8年くらい時間がかかります。そんななか、目標をきちんと決めることがとても大切だと思います。しかしなにしる我々も初めての体験なので、むしろルワンダの方にいろいろ教えてほしいくらいです。(戸羽市長)

A. ルワンダではジェノサイドが起こった時、復興に対するひとりひとりの意識がとても高く、皆やる気に満ちていました。私たちは1ドルキャンペーンというものを実施し、ひとりひとりから1ドルを集め、みんなで何かをしようという運動を行いました。このような、ひとりひとりの気持ちが一番大切だと思います。(Valens)

A. 本当にその通りだと思います。陸前高田市が完全に復興するには実際 20 年程かかります。20 年後というと今小学生の子供が大人になっているわけなので、年配の方の意見を聞くだけでなく、それ以上に「どういった街に住みたいか」等、若い人の意見を取り入れていくことが大切だと思います。(戸羽市長)



戸羽市長のお話を熱心に聴くメンバー

Q. 日本政府と仲が悪いと伺いましたが、日本政府と仲が悪い状態でどのように復興を進めていくのですか。(Cynthia)

A. 日本政府と仲が悪いわけではなく、一方的に嫌われているだけです。表面的には喧嘩をしていると言っても政府は裏でフォローしているから大丈夫です。でも多くのことを我慢している陸前高田市民の気持ちや、自分が正しいと思うことは、政府と喧嘩しようともこれからも主張し続けていきます。(戸羽市長)

以上の白熱した議論からも分かるように、地震・津波とはなかなか縁のないルワンダメンバーも熱心に戸羽市長のお話を聴き、陸前高田市と日本の未来について真剣に考えていた。また、ジェノサイドを乗り越えた彼らだからこそ、市長に伝えることができる復興についてのアドバイスもあり、意見交換会はとても有意義なものとなった。

Q. 東日本大震災はメディアを通して世界中の人に目撃され、十分ではないにしろ理解され応援をうけたということが言えると思います。そこで一過性の共感を越えた共有は国や地域を超えてできると思いますか。またもし可能であるならば、私たちには何ができますか。(福士)

A. 私がある友人に教えてもらったことは、友達になることが一番の近道であるということです。例えば私が具合が悪くしたら友達は心配をしてくれるし、もし私が困っていたら相談に乗ってくれる…それが友達というものです。これは世界にも通用することなので、皆さんもぜひいろんな人たちと繋がってほしいと思います。(戸羽市長)

■箱根山



長い階段を上った先にある箱根山展望台からは、三陸のリアス式海岸を一望することができた。また津波の被害を直に受け、一時的に陸路が寸断されたことで有名な広田半島もここから見る事ができた。こうして現地実際に足を運ぶことで、海とあまりなじみのないルワンダメンバーの津波や地震に対するより深い理解に繋がったの

ではないだろうか。

前日の事前学習で津波の映像を見たにも関わらず、写真に写っている穏やかな海が人の命をも奪う脅威になりうるということを理解するのは、正直日本人の私でも難しいと感じた。

■左官大工伝承館

陸前高田市を襲った津波について中心にお話を伺うつもりでお邪魔させて頂いた伝承館では、震災についてだけでなく、日本古来の文化にもふれることができ、ルワンダメンバーにも貴重な時間となった。

武蔵さんのお話

伝承館の語りべをされている武蔵さんからは、震災・津波のお話は勿論のこと、私たちが今後生かすことのできるメッセージ性の強いお話を数多くして頂いた。武蔵さんが伝えたいと仰っていた3つのこと…駐車場に車を停めるときは、エンジンをかけてすぐ発進できるような状況にしておくこと、警報が出たら大切なものをもってすぐ非難すること、携帯電話が使えない状況時の家族との連絡の取り方を確認しておくこと…は、どれもとても大切な教訓であった。

質疑応答

Q. この家はなんのために使われているのですか。(Eugene)

A. ここは神社や船を造った気仙大工という大工集団のの発祥の地です。それを後世に伝えるために伝承館があります。(武蔵さん)

Q. 武蔵さんはここに住んでいるのですか。(Eugene)

A. 住んではいませんが、手入れ次第では

100年でも200年でも使うことができる、後世に受け継がれていく家であるということは知って頂きたいです。

Q. 東日本大震災経験後、生活や日々への思いはどう変わりましたか？(Cynthia)

A. 家族の大切さというものを身を以て感じました。それが一番伝えたいことです。主人が沿岸にいて一時とても危ない状況にあり、亡くなったのではないかと思っていた時もありました。震災直後2週間は感情が麻痺していて、家に帰って布団に寝たときに主人が隣にいることが初めは信じられませんでした。(武蔵さん)

Q. 津波で家を失った人との気持ちの差は感じましたか。(片岡)

A. 私は避難民であって被災者ではありません。同じ陸前高田に住んでいる人でも、家が残っている人と家を失った人の溝はどうしてもできてしまいました。食べ物を買に行くにしろ、ガソリンを手に入れるにしろ、同じ地区にいるにも関わらず、家のある人となない人で距離ができてしまいました。例えば、救援物資等が届いたときに私たち(被災者でない避難民)も貰いに行きたかったのですが、すべてを流された人々からすれば「お宅は家あるからいいじゃない」というような状況だったのです。(武蔵さん)



阪神淡路大震災で大きな被害を受けた兵庫県神戸市から分灯された「希望の灯り」。武蔵さんは偶然にも、ちょうどここで地震を経験したそうだ。

武蔵さんのお話を一通り聴き終わった後、Cynthia が日本語で「ありがとうございます」と言っていたことがとても印象的だった。

■りくカフェ



りくカフェは陸前高田市の地域住民が市民の憩いの場をつくることを目指して造ったコミュニティカフェである。ここではご家族を亡くされたスタッフの方に、津波・震災の恐ろしさについて写真を用いながらお話頂いた。

悲しい話を伺ったにも関わらず、カフェの雰囲気はとても明るいもので、そこに被災地に住む方々の力強さを感じた。

■未来商店街



昼食は未来商店街の一角にある

Bricks.808 でおいしいオーガニックフードを頂いた。未来商店街とは震災によって店を失った店主が集まり経営している商店街のことであるが、多くの人々が集まり活気に満ち溢れている場所であった。

■旧陸前高田市役所・一本松

新沼岳志さんのガイドのもと、津波の多大な被害を受け今だ瓦礫撤去作業の続く旧陸前高田市役所周辺を訪れた。

新沼さんは、沿岸地域がいかに大きな被害を受けたのか、また避難所生活をしてきた人々がいかに苦しい生活を強いられていたのか、実際に被災建造物を回りながらお話して下さった。その中で、多くの魂が眠る被災建造物に土足で上がり込む人や、またその前でふざけたポーズをして写真撮りたがるマナーの悪い政治家もいるという話が特に印象的であった。



献花をするルワンダメンバー

感想

担当者

私は被災地活動の企画にあたって、被災地の人間として、少しでも震災時の状況や人々の想いを感じていただけるような形にしたいという想いがあった。多くの命が失われたことが感じられるような場所では、どんな言葉もどんな受け取り方も何かに拒絶されるように感じることもある。しかし、被災地を訪れて感じるその拒絶の中でしか触れられない現実が確かにあると私は思う。実際に現地の現状を目の当たりにし、現地の方々の話を聞き、参加した方々が少しでも何か感じていただけたのであれば嬉しく思う。

このたびの大震災では他人の生活を思いやる心、人と人との絆、地域と地域の絆がいかにか大切なものであるかということを確認させられた。この企画はその繋がり大切さというものを改めて強く感じさせてくれるものだった。たくさんの人とつながって、自らも相手のよき友になり、お互いにすべてを理解することはできなくても相手の立場に立って考えること、そこで起こったことを忘れずこれから先も思いを馳せることを大切にしたい。また、最後に企

画にあたって、お忙しい中協力して下さいました多くの方々に感謝の意を表したい。

(岩手大学 福士優海)

まずは私の本企画への関わり方について反省を述べたいと思う。被災地訪問企画担当にも関わらず、たかが関東の人間に何ができるのか、外部の人間がやすやすと踏み込んでよいものなのか等の不安から、岩手大学の当企画メンバーと積極的にコミットできなかった点は大きく反省したい。また今回は「ルワンダ人の理解を助ける」立場でありながら、目にするものにその都度自分がショックを受けそれどころではなかったというのが正直なところであり、大きな反省点である。

また本企画は数多くの被災者の方にご協力頂き、ありがたくも直々にお話を伺うことができたわけだが、当たり前ながらその方たちが他人に辛く悲しい経験を話せるようになるまで、人知れない葛藤があったはずである。その気持ちを乗り越えて、外部の人間である私たちメンバーに必死に事実を伝えてくださるのは、風化させたくない、忘れてほしくないという切なる気持ちを伝えるためであるからだと思いつつ思った。

震災が起こった当初から「自分になにができるのか」ということを考えてきたつもりではあったが、ボランティア等の活動があるにしろ「本当に被災地の人が求めていることなのか」等を考えだしたらキリがなく、結局何のアクションを起こすこともできずに終わっていた。今回の企画でも特別な自分ができた気は残念ながらまったくくはないが、日本ルワンダ学生会議の活動を通して被災地と関わりをもち、こうして

自分の思いを感想として文字におこすことでそれが「忘れないこと」に多少なりとも貢献できるのであれば、そのことを純粋に嬉しく思う。

(JRYC 丸茂思織)

参加者

企画を通して、確実に以前より被災地のことについて考える時間は増えた。被災した人々にとって本当の復興とは？復興計画における行政と市民間の溝はどうやったら埋められるのか？被災した人々の心のケアは？自分たちにできることは？…等々。自分なりに考えた結果、今自分にできることは震災の記憶を風化させないこと、被災地の現状をできるだけ周りに伝えていくことであると思った。この企画に参加する以前の自分は、被災地のことに関心は持っているながらも何も行動を起こせずにいたが、企画に参加することによって、実際に被災地を訪れたり、以前よりも復興についての考えを深めることができた。何より自分たちが主体となってコンサートを企画することで、盛岡市民に被災地のことについて考えていただく機会を設けられたことはとても良い経験になった。この企画を通じて得た多くの経験と友達を大切に、これからも震災のみならず多くのことに問題意識を持って生活していきたいと思う。

(岩手大学 寿松木舞子)

陸前高田市を訪問し、最初に陸前高田市長である戸羽太氏にお会いした。私たちは戸羽氏と話し合うお時間をいただき、津波で家族や親せきを亡くされた遺族に対してどのような援助、ケアをしていくのか、ま

た高台避難対策などについて質問をした。戸羽氏は陸前高田の復興計画である八年計画についてお話してくださり、各々が考えた復興支援の方法を戸羽氏と共有した。

市庁舎訪問の後、津波で大きな被害を受けた市街地へ移動し津波の破壊力と恐ろしさを知った。家屋を倒し、木を根こそぎ流し、地形を変えそして多くの尊い命を奪った津波。その光景を自分の目で見たとき、津波の無慈悲さを感じた。

私たちは津波の被害に遭われた方々にもお会いし、震災当時の話を伺った。

「再び復興できる。それまで辛抱強くいてください。」そのようなメッセージを残させていただいた。

(Eugene & Rosette 白川訳)

リフレクション

担当者：谷川琴乃

企画概要

日時：2012年8月24日（金）

場所：岩手県盛岡市 アイーナ

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

（ルワンダ人4人、日本人12人）

岩手大学メンバー6人

企画目的

前日の被災地訪問を踏まえての感想を述べることによって、被災地訪問の体験を振り返るとともに、自分以外のメンバーが何を感じ、考えたかを知るため。また、これによって得られたことを次の日の学生会議における発表に活かすため。

活動報告

全員が一人ずつ被災地訪問を踏まえて考えたことを1~2分で述べた。以下は要約である。

■ルワンダメンバー

- ・昨日は陸前高田を訪れ、市長に会った。どのように市が復興していくかについて市長と意見を交わし、アイデアを共有した。被災した学校や市庁舎も訪れ、どのようにこの町が復興していくのかもっと知りたい気持ちが強くなった。(Valens)
- ・陸前高田を訪れ、多くの建物や人を流した津波がどんなに危険なものかを知った。ぜひ陸前高田を復興する勇気を持ってほしい。陸前高田は津波の前は美しい町だったが今は破壊されている。(Rosette)
- ・たったの数時間で津波が全てを流し去っ

てしまったことに驚いた。心に残ったのは、伝承館の語り部さんがおっしゃっていた3つのアドバイスである。例えば駐車するときは逃げやすい方向にとめるなどである。また、市のことを考える戸羽市長にも感銘を受けた。(Eugene)

- ・建物や人が1日で流されてしまったことが悲しかった。市長は8年計画のことを話していたが、復興には長い年月がかかるだろうと思った。なぜなら政府が市に多くの資金を与えないからである。また、私は一本松を切るべきではないと思う。守って残すと記念碑となるだろう。

(Cynthia)

■日本人メンバー

- ・戸羽市長は復興のための8年計画について話していたが、地元の人々は陸前高田の復興は難しいと言っていた。市長の考えと市民の考えとの間にギャップを感じた。
- ・まだたくさんの瓦礫があり、復興には長い時間がかかると感じた。
- ・被災地の状況を遠い地域に住んでいる人にも知ってほしい。
- ・被災地に住んでいる人の間でも、家をなくした人とそうでない人との間に意識の差があることを知った。
- ・一本松が地元の人々にとってどんなに力強い存在かを感じた。
- ・語り部さん、市長、ガイドさん、りくカフェの方々など、実際に被災した方々の話を聞いたことはとても価値があった。私たちは被災地のことを完璧に理解できない。私たちにできることは話をすることだ。
- ・陸前高田市民、私たち、語り部さん、ガ

イドさん、市長など、皆違う意見を持っていた。しかし違う意見を持っているからこそ議論する価値がある。

- 壊れた体育館の前でピースサインをして写真をとる人がいることが悲しかった。このような人がいる限り、復興しないと感じた。復興を精神面から考えていきたい。
- 陸前高田市長と政府の間にギャップがあるだけでなく、市長と市民の間にもギャップを感じた。市民の同意を得る必要があるが難しい。

■岩手大学メンバー

- 地震や津波の悲惨さを忘れないことが大切である。忘れたら、多くの人が去年のように亡くなってしまう。何が起こったかを心にとどめ、若い世代に伝えていくべきである。
- 陸前高田市の復興は8年では無理ではないか。市長と市民の考えの差を感じた。
- インフラだけでなく、精神面からも復興を考えるべきである。
- 市長が政府を批判していて悲しかった。一人ひとり状況が違うため、完全にお互いを理解するのは不可能。しかし、市長や行政のリーダーは地元の人声を聞くべき。反対に、地元の人何をするべきか考えるべき。
- メディアは最近被災地のことを報道しなくなっている。人々は被災地で起こったことを忘れてきている。陸前高田に住んでいる人を忘れないように、多くの人に伝えたい。

感想

担当者

ただ訪問するだけで終わりにせずに、何を思ったか、考えたかをシェアする機会をつくったのはとても良かったと思う。日本人メンバー、岩手大メンバーともに、被災者と非被災者だけでなく、市長と市民との考え方のギャップについて言及する場面が多かったことが印象的であった。ルワンダメンバーからも、感想を聞いていて、実際に被災地を訪れたときの驚きが伝わってきた。

(JRYC 谷川琴乃)

参加者

震災前後の陸前高田を比べるとそこには経済的、精神的に大きな差がある。

(Eugene & Rosette 白川訳)

学生会議

担当者：谷川琴乃

企画概要

日時：2012年8月25日（土）

場所：岩手県盛岡市 アイーナ

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

（ルワンダ人4人、日本人12人）

岩手大学メンバー9人

企画目的

岩手企画、特に被災地訪問を踏まえ、ルワンダ人、日本人、岩手大生が共に議論して発表することにより、復興についての新たな視点を導くため。

活動報告

9:00 から 15:00 まで班ごとに発表に向けて準備・ディスカッションを行い、15:00 より各班約 15 分で発表・質疑応答を行った。

発表形式は各班が自由に設定した結果、パワーポイントを使ったプレゼンテーション、劇、工作などオリジナリティのある発表となった。

■グループ A

「陸前高田の未来」という題でプレゼンテーションを行った。1994年のジェノサイドによる破壊から復興したルワンダの首都キガリと、関東大震災から復興した横浜の2都市を例として挙げ、陸前高田にとって「美しい町」とはなにかをテーマに陸前高田の復興を考えた。美しい町にするには、地元の人々が誇れるような町にすること、障害者や高齢者が過ごしやすい町にするこ

と、若者のために雇用を増やし教育の質を高めること、という結論が導かれた。

■グループ B

被災後の子どもの心のケアをテーマとしたプレゼンテーションを行った。まず、子どもに学習支援をしたり、居場所を提供したりする NPO の取り組みを紹介した。しかし、震災の経験を話して共有する機会は限られている。それを是正し子どもの心の傷を軽減するために、ピースクラブという子どものための放課後クラブをつくり、NPO が資金援助をするという提案を行った。

■グループ C

劇で、震災後の陸前高田市の市長、市民（3人）、ルワンダ人という役割を演じた。以下がストーリーである。

市民は3人とも違う意見を市長に訴える。市民1：「他の場所に移るのではなく、ずっとここに住みたい。そのために防波堤をもっと高く、強くすべきだ。」市民2：「それは意味がない。町を守れなかった防波堤を私はもう信じていない。壊れた建物を残し、若い世代に伝えるべきだ。メモリアルサイトにすれば多くの人が訪れるはずだ。」市民3：「この間の津波で完全に壊された防波堤は信じられない。また、壊れた建物を保存するなんて大金がかかる。」そして意見の不一致から言い争いになってしまう。ここで、ルワンダ人が登場する。ルワンダ人：「陸前高田にはジェノサイド直後のルワンダと共通点がある。人を失い、インフラも破壊されたという点だ。しかし、今やルワンダは復興した。良いガバナンス、良いリーダー

シップによって、人々が結束したからだ。でもあなたたちには相互理解がない。同じビジョンを持ち、共に議論すべきだ。ルワンダ人としても、陸前高田のことを多くの人に知らせることに全力を注ぐつもりだ。陸前高田の復興を信じている。」感動した市民たちは仲直りをする。

■グループD

「陸前高田記念館」を建てると仮定し、模型を作って発表した。大切な人を失った人の心を痛めるような被災建造物は壊し、その代わり記念館を建て、陸前高田の過去と未来を見ることが出来る場所をつくるというコンセプトである。

展示内容は、津波の前と後の陸前高田市の写真、伝統産業、献花台などである。また、この記念館は一本松を囲うようにつくられており、一本松の側面に沿って高齢者のためのスロープが設置されている。一番上の月の光は、地元の人々を照らす希望の光である。(設計や展示物はほぼルワンダメンバーの Cynthia のアイデアである。)



感想

担当者

本会議は各グループに分かれて、被災地訪問を通して感じたことを自由テーマ、自由形式で発表した。発表形式としては、パワーポイント、劇、模型の工作などバラエティーに富んでおりグループごとに個性が出ており、また発表テーマも班ごとに異なっていたので大変有意義で濃密な時間を過ごせたと思う。その一方で、グループ内での話し合いにほとんど参加できていない人がいたのは大変残念で、企画担当者としてフォローできなかったことは配慮不足であり、大いに改善すべきところであった。

最後に JRJC、岩手大学、そして国立ルワンダ大学といった異なった背景を持つ三者による議論は刺激的であり、このような機会を設けることができ参加者の方々には大変感謝している。本会議で得た経験を、各人が今後の人生に活かしていけることを切に願う。

(岩手大学 沼田剛宏)

参加者

私の班は話し合った内容を寸劇で発表した。陸前高田の市長や市民から実際聞いたことを台詞にし、役を演じるという形態は大変面白かった。

(Eugene 白川訳)

ルワンダ・ピース フルコンサート in 岩手

～被災地を、そして

ルワンダを忘れないために～

担当者：岩垣 梨花

【スケジュール】

第 1 部	
13:30～	1. はじまりの挨拶
	2. ルワンダ人からのメッセージ 「被災地を訪れて」
	3. INDANGAMUCO による パフォーマンス
	4. SUGEE さんによる パフォーマンス
休憩・交流会タイム	
第 2 部	
15:00～	1. INDANGAMUCO&SUGEE コラボパフォーマンス
	2. 終わりの挨拶

企画概要

日時：8月26日（日）

会場：クロステラス盛岡 ウェストプラザ

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

（ルワンダ人4人、日本人12人）

岩手大学有志9人

協力者：クロステラス盛岡

ジャンベ演奏家 SUGEE 氏

活動内容

一週間の岩手企画を通して岩手・とりわけ陸前高田市から学んだことをルワンダ学生の発表やダンスを通して、より多くの人に発信する。

活動報告

今回のコンサートは、今までの形態とは大きくかけ離れたものに仕上がった。従来のコンサートは、「見たいお客さんだけが来る」というスタイルであったため、客層の固定化や見たい人しか来ない、という側面があった。しかしながら今回は「被災地に学ばせてもらい、それをコンサートという形で還元する」という目的があったため、対象とするお客さんは従来のコンサートよりも幅広ものとなった。そこで我々が今回会場として設定したのが、盛岡の中心部にある商業施設・クロステラス盛岡であった。会場を敢えて公共性の高い場所にすることで、ルワンダに興味のある人もない人も巻き込んだ多くの人に発信することのできるコンサートになるであろうと考え、この場所をお借りした。

そしてもう一つ、私たちがテーマとして掲げたこと。それは「盛岡の人とルワンダンを友達にしよう」というものであった。これは、岩手企画3日目に訪問した陸前高田市・戸羽市長が講演中におっしゃっていた「友達になれば、その人のことを心配する。友達になればその人のことを忘れようとしなさい。」という言葉に由来する。震災から一年以上が経過し、徐々に震災に関する記憶の風化が進んでいく陸前高田市にとって、この言葉は非常に重要な意味を持つ。そしてまた、ジェノサイドから既に18年が

経過し、同様に記憶の風化が進んでいるルワンダにとっても、この言葉は非常に重要なものであると確信した私たちは、「～Be My Friend! 友達になろうよ～」をテーマにして、この活動を進めてきた。



Be My Friend Tシャツを着た Cynthia

当日、メンバーは午前9時に現地へ集合し、会場設営に取りかかった。出演者であるルワンダメンバーも念入りに振りの確認を進めており、着々と準備は進められていった。会場15分前、なかなか集まらないお客さんの数に不安が胸をよぎったが、岩手大学側メンバーが事前周知にかなり尽力を尽くしてくれ、またルワンダメンバーも共に頑張ってくれたビラ配りが功を奏したのか、開演時になると、会場はルワンダンのパフォーマンスを待ち望むお客さんで溢れかえっていた。

そして開演。中山と岩手大学有志・菅原の進行で幕を開けたコンサートは、宮本のルワンダ紹介に続きルワンダ人からのメッセージに進んだ。発表者である Valence と Cynthia は、陸前高田市で見たもの・感じたことをそれぞれ発表してくれ、会場にいるお客さんも彼らの真摯な言葉に静かに耳を傾けていた。



被災地訪問を通して感じたことを発表する
Valence と Cynthia

コンサートはいよいよダンスパフォーマンスへ。軽快な音楽に乗って鮮やかなピンクの衣装を身にまとったルワンダン達が登場する。その迫力ある力強いパフォーマンスに、お客さんも楽しそうに見ている様子だった。



力強いパフォーマンスで観客を魅了する

続いて、ジャンベ演奏家の SUGEE 氏によるパフォーマンス。のびやかな声と存在感のあるジャンベ演奏に、会場中が聞き入っていた。



お客さんと話すルワンダン達

そして、今回のコンサートにおいても入念に準備をおこなった交流会の時間に突入した。初めは会場のお客さんが本当にルワンダンと話をしてくれるのか、近づいたら逃げられてしてしまうのではないかと……。様々な不安に苛まれていたが、実際に交流会が始まると、こちらが驚くほど積極的にお客さんの方が話しかけてくれ、また通訳の学生と二人一組になったルワンダン達も積極的にお客さんに話しかけてくれていったことで、最終的にはこの交流会は時間を延長するほどの大成功に終わった。特に年配の女性と話をした Valence、そして女性の笑顔が非常に印象的だった。

第二部ではルワンダンのダンスと SUGEE 氏のジャンベ演奏のコラボレーションで幕を開けた。おたがいのいいところが混ざった素晴らしいパフォーマンスに終わった。



コラボパフォーマンス

そして最後にサプライズが。なんと会場のお客さんとルワンダンが一緒になって踊ることに。プログラムに組み込んでいなかった上に、当初はお客さんの態度を悲観的に予測していたために廃案となっていた内容だけに多くのお客さんがダンスに参加してくれたことは、本当に驚きで、また非常に嬉しい経験だった。

今回のコンサートでは途中退場を含めれば、最終的には 200 名をこえるお客さんの方に楽しんでいただけたのではないだろうか。そして、交流会という形で実際にふれあう機会を設けることで、今回のテーマである「～Be My Friend! 友達になろうよ～」も達成されたように感じる。



ムラコゼチャーネ！（ありがとう！）

感想

担当者

この企画を進めるにあたって常に悩まされた言葉がある。それは「岩手っ子はオクテっ子」というものだ。テーマを「～Be My Friend！友達になろうよ～」に設定したのはいいものの、話しかけると逃げてしまう、勿論一緒に踊ってくれるはずもない、そのようなお客さんのリアクションを悲観的に予測していく中で、なんとかアイデアを絞り、最終的に出した結論は「ルワンダコーヒーの配布で会場のお客さんをつなぎ止めて、そこに通訳をセットにしたルワンダンを連れて行き、話をする」というものだった。話が途切れては困ると、会話パターンまで用意して本番に望んだ。結果的には、私が常に悩まされていた上記の言葉を疑いたくなるような積極的な岩手っ子と、これまた例年「大人しい」と評されている（特に女の子）のが嘘のように積極的なルワンダのおかげで、このコンサートで最も力を注いだ交流会は無事に終わった。そしてこのコンサートを開催する理由である「被災地に学ばせてもらい、それをコンサートという形で還元する」ということも無事に成し遂げられたように思う。彼らの発表に静かに耳を傾け、彼らのダンスに手をたたいて盛り上がりしてくれたお客さんの姿がなよりの証拠のように思う。企画にあたって、大変ご迷惑をおかけした諸先輩方、企画を盛り上げようと周知を頑張ってくれた岩大メンバーのみんな、無茶ぶりに対応してくれた JRYC のみんな、そして支えてくださったすべての皆様に心からのお礼を申し上げます。ムラコゼチャーネ！

(JRYC 岩垣梨花)

担当者

外国人など見慣れないこの辺鄙な東北の地で、ルワンダが踊ることにどんな意味があるのか。この命題に私は最後まで答えを出せなかった。私は、訪れる人の「何か」を変えてくれるに違いないと言い聞かせて一ヶ月かけずり回ってきたが、その中では「共催」という聞こえの良い、一方ではあまりに不明瞭な団体運営の難しさも相まって、コンサートに対する不安と疑念が心の中で幅をきかせることになっていたのだった。果たして、うまくなどいくのだろうか。しかし、その不安と疑念は、他でもないルワンダによって裏切られた。彼らの笑顔とエネルギッシュなダンスによって、お客さんを巻き込みながら会場が汗ばんだ笑顔に包まれてしまったのだ。あの情景を私は一生忘れることはないだろう。果たしてあの命題の答えは何だったのか、コンサートを終えた今でも答えを出せずにいるが、その回答は、このコンサートから東北の人々とルワンダの間にどんな繋がりや変化が生まれ、そして何が生み出されるのかを知る将来の私に委ねたいと思う。最後に、コンサートの開催にあたってご協力いただいた多くの方々と、このような苦しく楽しい夏を与えてくれた JRYC の皆さんにこの場をお借りして感謝申し上げたい。

(岩手大学 小林紫苑)

参加者

2回目のコンサートは岩手で行った。このコンサートもうまくいったが、特筆すべきは、観客が私達の文化にとっても興味を持ってくれたことだ。私達がダンスを教えたら、彼らはすぐに覚えて一緒に踊ってくれた。

(Cynthia 谷川訳)

このダンスコンサートで、私たち（ルワンダン）は岩手の人々にルワンダの伝統的なダンスを見せる機会を得られて、またルワンダ人として大変意義のあるものでありうれしかった。

(Eugene & Rosette 白川訳)



コラム

ルワンダと駆け抜けた

あの夏の日

～ “牛乳と共に” 編 ～



アフリカと聞けば、日本人は大抵‘暑そうなところ’と思うだろう。アフリカからなら、日本の夏なんて大したことないでしょう、とも。ところが、ルワンダは標高が高いので、一年を通して25度前後と、とても過ごしやすい。よって、日本ような高温多湿な夏には免疫がない。今回の招致の隠れた最大の敵は、そう、熱中症であった。

メンバーのたゆまぬ努力のお陰で、なんとか熱中症こそは免れたものの、疲労や慣れない食べ物のせいで不調をきたすルワンダは少なくなかった。その中でも特筆すべきはUさんのケースであろう。

被災地視察の翌々日、岩手企画のリフレクションをしようというまさにその日、Uさんは遅れてやってきた。いつもの笑顔はなく、背筋を伸ばして椅子に座ることも出来ない。どうしたんだ、と聞いても、うめき声のような半起きのような声し

か出さない。下腹部に異常があるらしいことは何とか分かったので、日本人メンバーが胃腸薬を買ってこようかと彼に提案したところ、「いや、薬はいらない・・・慣れないものを食べるといつもなるんだよね・・・牛乳を飲めば・・・うん、11時くらいには治る・・・」とのこと。そう、ルワンダは牛乳が大好き。多分、こういう時は正露丸よりも牛乳なのだろう。

とりあえず彼に牛乳を飲ませ、健康な我々は議論を重ねた。時間が経つにつれ、スライムのように机にへたばっていた彼も、徐々に元気を取り戻していった。ふっと見ると、椅子にちゃんと座るところか、別のグループのルワンダと談笑などしている。歌など口ずさんでいる。そう、例の時間、11時が来たのだ。

「もうお腹は大丈夫なのか」

「うん」といつもの朗らかな笑顔で返す彼。その後、まるで何事もなかったかのように、我々にルワンダダンスを教えてくれた。流石である。ルワンダ側のリーダーなだけあり、事後体調管理は完璧のようだ。一体何人の日本人が、腹痛の完治時間を指定できるであろうか。

彼を除いては、大きく体調を崩すメンバーはいなかった。招致活動を夏に開催するのは初めてだったので、いつも以上に皆気を配ったのだが、それが功を奏したのか。ルワンダの活動に対する真摯な態度が日本の猛暑日を退けたのか。とにかく、皆さん暑い中、おつかれさまでした！

(片岡美月)



Tochigi

栃木企画

【スケジュール】

実施日	活動	場所
8/27 (月)	交流会	U.U プラザ @宇都宮大学
8/28 (火)	足尾訪問 銅山見学	日光市足尾地区
8/29 (水)	益子町訪問 農業見学	益子町

活動内容

東京から北に約 100km に位置する工業、農業などの産業が盛んな栃木県を訪問してフィールドワークを行なうことにより、ルワンダ人と共に日本の現状についての理解を深めた。

初日の 8 月 27 日には宇都宮大学で日本とルワンダ人学生がそれぞれダンスや伝統芸能を披露し交流を行なった。

28 日には日光市足尾地区を訪問し足尾銅山を見学した。銅の産出源として日本の近代化を支えた銅山の歴史、意義を学ぶとともに、銅山が閉鎖された後の足尾の現状についても理解を深めた。更に銅山の採掘の際に発生したガスによって禿山になった山に植林を行った。

29 日には益子町を訪れ現地で農業を

営まれている方と共に農業が行なわれている現場を見学した。1960 年代以降日本の農業は化学肥料、農業機械が導入されており、機械の導入によって主に稲作が行なわれる田は大規模化している。一方農業形態の変化により経済的に成り立たなくなり保全が課題となっている棚田、里山の見学も行ない、それらが担ってきた役割について学んだ。

企画全体目的

ルワンダは現在、外国からの援助投資を受け入れ急速な経済発展を遂げている。一方日本はある程度の経済発展を成し遂げたものの、少子高齢化、過疎化などといった新たに生じた課題に向き合う必要に迫られている。

本企画は発展した豊かな国として捉えられることの多い日本の実情を、フィールドワークを通して学ぶ。発展を単に良いものとして捉えるのではなく、それによって生じたものを含めて発展の多様な面を知ることが本企画の目的である。

また宇都宮大学の交流会ではダンス、伝統芸能を披露することを通して日ル両国の親善を深める。足尾銅山では植林活動に参加して自然が失われるのは一瞬だ

が、回復するには長い時間がかかる公害について学ぶ。益子町では機械化された現代日本農業と、これからの課題について知識を深めることである。

以上を本企画の目的とする。

宇都宮大学交流会

担当者：島村志保子

【スケジュール】

16:00	会場、JRYC 団体紹介
16:20	アイスブレイキング (自己紹介ゲーム)
16:50	テーマ・トーキングゲーム
17:20	休憩
17:30	インダンガムチョダンス披露
	沖縄ていーだ太鼓演奏
	日本舞踊サークル披露
18:30	歓談
19:00	閉会



企画概要

日時：2012年8月27日（月）

場所：宇都宮大学 UU プラザ

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
(ルワンダ人4人、日本人9人)
宇都宮大学生

協力者：宇都宮大学の皆様

企画目的

日本の学生とルワンダの学生が文化を通じて交流を図り、両国の親睦を深め、両国の未来を背負う若者のあいだに、平和の礎ともなる、友好関係を構築するきっかけとすること。また、ルワンダのジェノサイドについて理解を深め、Intego Art Project (ジェノサイドで心に傷を負った人たちのために、アートを通じて心のケアをしようと取り組む) のアートを紹介し、ルワンダ人のジェノサイドを乗り越えようとする活動を知ってもらうこと。

活動報告

(1) 団体紹介

日本ルワンダ学生会議についてと、第8回本会議で、東日本大震災の被災地、岩手県を訪問し、学んできたことを、ドキュメンタリーを交えて、来場者の方に紹介した。

(2) 自己紹介ゲーム

参加者が皆、大学生という特徴を活かし、ゲーム感覚でお互いの学生らしい日常的なことを、日本、ルワンダお互いの国の学生に知ってもらうことを目的とした。

ルワンダ人も積極的に参加してくれて、

1 分間の質問攻めゲームにおいても、様々な質問を投げかけてくれた。テーマトークでは、サイコロの出る目に従って、恋愛・アルバイト・勉強などについてお互いに紹介しあった。国境を越えても、恋愛トークで盛り上がるのはいつもことながら、アルバイトについてのトークでは、ルワンダではアルバイトをしながら勉強できるのは逆に恵まれた環境にいるからであるとコメントをもらったりと、文化の違いを改めて認識することとなった。

(3) 文化交流会

ルワンダからはインダンガムチョのダンス。日本からは沖縄の伝統芸能エイサーと、日本舞踊の披露をしていただいた。

両国ともに初めてのお互いの伝統文化に興味を抱き、楽しむことができたのではないかと思う。

感想

担当者

この交流会を企画するまでの道のりは長かった。栃木企画の中で何を行うのかということから、かなり模索し、結局交流会を行うことに決まったのは、7月上旬であった。お互いに距離が離れているので、なかなか会うことができず、企画の内容を決定するのもにも苦労が多かったが、JRYC メンバーと宇都宮大学のサークルである、たのしみの家の皆さんやJRYC の先輩方に協力していただき、随分と楽しいものになったのではないかと思う。

初めは 3 日間しかいられない栃木で、

交流会をするよりも日光などに行って観光をするのが良いのではないかと考えていたが、宇都宮大学での交流会を通して、日本ルワンダ学生会議のメンバーだけでなく、もっと多くの人にルワンダについて知ってもらえたのだと思うと、交流会を行う意味は大きかったのではないかと思う。

またルワンダ人もこの交流会で日本の伝統芸能に興味を抱いてくれたようで、Eugene が交流会終了後に、日本舞踊とエイサーで使われていた音楽をダビングさせてほしいと言ってくれた時には、今回の交流会を行ってよかったと思った。

相互理解には、学問的なことを学び、お互いのことを理解することも大切なことだが、文化の交流や普段の生活を知ることによって、親近感が増すと考える。その親近感こそが両国の関係を維持する中で重要な役割を果たすと思わせてくれたのがこの企画だったように思う。これから次の企画を立てていく際にもこの心は忘れないようにしてゆきたい。

当日まで、何から話を進めていったらよいのかもわからず、なかなか内容がまとまらないなか、時間をとって、一緒に企画を作ってくださった宇都宮大学の皆さん、そして JRYC 関西支部の松本さん、当日に急に通訳やプレゼン発表を担当してくださったメンバーには、本当に感謝しています。音響やスクリーンなどの設備の確認が甘かったなどの反省点は多々あるが、いろいろな方の協力もあり、無事に交流会を終えることができました。皆様、ありがとうございました。

(JRYC 島村志保子)

参加者

3回目、最後のコンサートは宇都宮大学（栃木県）で行われた。これは短かったものの、日本の伝統舞踊を見て知識を深めることができた。伝統舞踊を披露する学生を招く計画を立ててくれたタケチヨ（日本人メンバー：藤田）に本当に感謝している。

(Cynthia 谷川訳)

8月18日に宇都宮大学で行われた文化交流は、日本の文化とルワンダの文化という2つの異なる文化を共有できたのでとても充実したものとなった。

日本人が私達の文化にとっても興味を持ってくれたことがわかった。そして私達も日本の文化に興味を持った。特に、伝統衣装や踊り手が素晴らしかった。ルワンダに帰ってから他のメンバーに日本文化について話し、写真を見せると彼らもとても興味を持ってくれた。

(Rosette 谷川訳)



足尾訪問

担当者：小池志歩

【スケジュール】

11:00~12:00	体験植樹
12:00~13:00	旧松木地区見学
13:00~14:00	銅親水公園（昼食）
14:00~16:00	足尾銅山近代化産業遺産見学（本山精錬所→本山抗→古河キャスティック→足尾銅山観光）
16:00~17:00	地域意見交流会

企画概要

日時：2012年8月28日（火）

場所：日光市足尾町

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー
（ルワンダ人4人、日本人8人）

協力者：日光市職員の皆様

国土交通省足尾砂防出張所

NPO 法人足尾に緑を育てる会

足尾まるごと井戸端会議代表山田功様

日光市地域おこし協力隊皆川俊平様

コンサーレ引間章夫様

NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク岩井俊宗様

企画目的

足尾は日本の高度経済成長期を支えた銅の産地として有名であるが、公害問題が発生したという観点から環境学習のまちとしても有名である。足尾町を訪問することで、日本を支えた技術を知るとと

もに、発展がある程度達成された次に直面する問題について理解を深めてもらうことを目的とする。

活動報告

■ 体験植樹

体験植樹は国土交通省足尾砂防出張所の皆様と NPO 法人足尾に緑を育てる会の皆様のご協力のもとすすめられた。「カンボク」という木を植樹。紙芝居などを用いて、国交省事業の説明、足尾の歴史、なぜ植樹をする必要があるのかということの説明していただいたので、ルワンダ人にとってとてもわかりやすかったのではないか。器用にシャベルを使いこなし積極的に作業に勤しむルワンダ人の姿が印象的であった。

□ 国土交通省事業

国土交通省とは主に、道路や川の管理や港や空港などの交通の管理をしている国の機関である。足尾砂防出張所では、土砂災害などから人々の生活を守る「砂防」と言われる仕事をしている。砂防とは具体的に砂防堰堤を作り土砂をせきとめ、また山の斜面を階段状にして土が滑り落ちないようにしたところに草木を植えて土砂崩れを防ぐ工事をするのである。

□ 足尾銅山の役割

足尾銅山は今から約 400 年前の江戸時代に発見された。それが明治時代になって技術が発展し、日本の銅産出量 40%以上を占め、日本一の銅山となった。銅山開発とともに足尾町も大きく発展し、そこで採掘された銅は 10 円玉や電線などさまざまなものに使用された。現在、銅

がさまざまな電化製品に使われていることから、足尾の銅は日本の近代化や産業の発展に、たいへん重要な役割を果たしたといえる。

□ なぜ足尾の山から緑が消えたのか

大きな原因は 3 つあるといえる。1 つ目の原因は人々の生活のために山の木をたくさん切り落としたことである。2 つ目に明治 20 年に上流にあった松木村から大きな山火事が起こったことである。この火事のために、1100 ヘクタールもの森林が焼けてしまった。3 つめに銅を製錬するときに発生する亜硫酸ガスによる煙害があげられる。亜硫酸ガスの流出により、草木だけでなく土までもが汚染されてしまい、足尾の山々から完全に緑が失ってしまったといえる。

□ 植樹の必要性

足尾では、山から緑が失われたことで大雨のたびに土が流れ出してなくなり、岩だらけのはげ山になってしまった。それ以降、がけ崩れや土石流などの災害が起きやすくなってしまった。植樹をすることは、土砂災害などを防ぎ下流に暮らす人々の生活を守ることにつながる。

□ 植樹を終えての感想

土砂災害などを防ぐためにこうして木を植え続けることはとてもいいことだと思う。またそうした活動に参加することができてうれしい (ルワンダ人メンバー Valence)

■ 旧松木地区見学

旧松木地区は中世以来 3 つの山村が存在したが、工場から排出された亜硫酸ガスの悪影響や、山林の乱伐、大火により住民は減少していき結果、廃村となって

しまった。現在、空港跡や墓石跡などが残されており山村の名残を感じることができた。また公害の影響により緑を失った山をはっきりと見ることができ、公害が自然に残した傷跡について深く理解することができた。現在は草木に覆われているが、かつてここに村が存在し人々が生活していたということについて、信じられなかった。

■足尾銅山近代化産業遺産見学

本山精錬所：銅産出量の増加に対応するため直利橋製錬分工場として解説された。当時、先端技術を導入し銅の生産量をさらに伸ばしたが、同時に煙害問題も引き起こしてしまい、地域住民の人々を苦しめた。現在は内部非公開であるが、川の対岸から全景を見ることができた。古河キャスティック：欧米からの輸入機械をモデルに独自の改良を加えた各種機械が製造された。また古河キャスティックは現富士通の始まりでもあり、現在日本を支える技術がここから生まれたことが理解できた。

足尾銅山観光：坑道の中の見学距離はおよそ700メートルであるが、実際は約1200キロメートル坑道が続いており、坑道の中では当時の最先端技術が駆使されていた。また当時の日本の労働者の様子なども、ルワンダ人学生にとっては興味深いものであっただろう。銅資料館などの3つの資料館が併設されており、当時足尾での日本を支えた技術や役割を知ることができたに違いない。

■地域意見交流会

当日ご協力いただいた方々をお呼びし、ルワンダ人学生、日本人学生そして足尾

で活動を行う人々それぞれの立場から意見を共有した。ルワンダ人学生からは足尾について一日では理解できなかったことなどの質問が多く出された。

以下意見交流会より一部質問抜粋

Q. 16世紀、まだテクノロジーが発達していなかった時代にもかかわらず、どうやって銅の採掘が行われたのか。また銅の採掘技術はどのように持続させていったのか。

A. 主に西日本の地方で銅山開発が積極的に行われており、そこで技術を習得した人々が足尾に来て銅採掘を行った。18世紀に入ると、一時銅採掘が困難になったが、水の中から銅イオンを抽出するという技法に変化した。また19世紀後半から20世紀初頭にかけて、外国の技術を導入することで飛躍的に銅採掘量が上昇したといわれている。

Q. 現在の足尾では主要な産業は観光業しかないのか。またそういった活動に若者は興味・関心があるのか。

A. 足尾は産業といえるほどの観光にはなっていない。足尾は遊ぶ場としての観光ではなく、学ぶ場としての観光を提供しているためリピーターとなる人が少ない。若者が興味・関心を持ち、そういった活動に取り組もうとしても足尾には雇用の場がないのでまちは衰退していく一方となってしまふ。

感想

担当者

私自身足尾への訪問は三度目であったが、下見を行う以前は足尾銅山鉱毒事件、田中正造という二つの言葉しか知らなかった。どちらも小学校の教科書に出てくる言葉である。足尾への初めての訪問の際、私は緑豊かで自然あふれるまちであると感じた。しかし、緑を取り戻しているのはほんの一部であり、そこにたどり着くまでに多くの苦しみや努力があったことを知った。公害により山々から緑は失われ、活気あふれていた人々の生活を苦しめた。以前のようなまちを取り戻すことは不可能かもしれないが、かつてそこにあったものを取り戻そうとする人々の努力と思いを強く感じる事ができた一日であった。今回、日本ルワンダ学生会議の企画の一環としてであったが、足尾について知れたことを本当にうれしく思う。発展は人々の心や生活を豊かにする。しかし行き過ぎた発展の先には何があるのか。人それぞれ思うことや考えることは違うと思う。しかしそんなときには何気なく足尾の山々の風景や一日を通して学んだことを思い出してほしい。

(JRYC 小池志歩)



参加者

今日は環境をどのように守るかということについて、具体的な体験とともに学ぶことができて本当に良かった。またルワンダ人として足尾の地に植樹することができてとても光栄に思う。足尾銅山に関しても、多くの製品がその銅から作られていることを知ってとても感心した。

(Cynthia 訳:宮本)

植林など足尾が環境を守ることに力をいれていることを初めて知り、とても驚いた。とくに印象的だったのは、50年くらい前ははげ山であったのが現在は緑を取り戻してきているということである。今後どうやって環境を守っていくかという事を考えていきたいと思う。

(Eugene 訳:宇大生 堀部)



益子町訪問

担当者：藤田康宏

企画概要

日時：2012年8月29日（水）

場所：栃木県益子町

参加者：日本ルワンダ学生会議 10名

日本人メンバー6名

ルワンダ人メンバー4人

宇都宮大学学生1名

協力者：農家 橋本様、床井様

企画目的

本企画では益子町を訪問し、益子町において日本の農業を学ぶ。ルワンダは人口の80パーセント以上が農業に従事しており、農業は主要な産業である。日本では産業の高次化が進み農業が経済の中に占める割合は極端に大きいわけではないが、重要な産業の一つである。現在の日本の農業は農業機械、化学肥料の導入により大規模化が行なわれている。日本の技術的に進んだ農業を見学すると共に、それによって新たに発生する課題、取り組みについても知識を深める。将来ルワンダが経済的に発展した時に何かしらの今回の企画で学んだことが何かしらの参考となれば幸いであると考え。



活動報告

本企画は日本の農業の

- ・過去
- ・現在
- ・将来への取り組み

の3つをテーマとして構成されている。

日本の農業の過去として、昔の日本の農村の風景を残す里山、棚田を訪れた。里山、棚田は農業機械の導入、化学肥料の導入をはじめとした農業の変化により、経済的には存続が難しい状況にあり、それらの景観や果している役割を存続させるために保全活動が行なわれている。

かつて人々は里山から落ち葉や草を肥料にする目的で採集していたが、化学肥料の普及した現在ではそのような価値を失った。また棚田は山がちな地形を有効利用した水田であったが、農業機械が入るための広さが存在しない。そのため農作業は手作業に頼らざるをえず棚田での耕作は経済的に成り立たない。

しかし逆の見方をすれば近代化された農業が入り込めないがために昔ながらの形態が残っている。里山は動物と人間の緩衝地帯の役割を果しているが、その里山に手が入らず荒れてきていることでのししなどの獣害が発生していることをあわせて学んだ。

日本の農業の現在として、区画整理された大規模水田で農業機械を用いて大規模に耕作が行なわれている実情を実際に水田を見学しながら説明を受けた。トラクター、コンバインといったそれぞれの機械の果す役割を知ると共に、行政が多

額の予算を用いて区画整理を行なっている現状についても学んだ。

将来への取り組みとして、有機栽培を紹介された。今回取り扱った肥料は大豆と米ぬかを合わせ、空気中の納豆菌を発効させて作り上げるものであった。ビニールハウスの中で実際に実物を手にとった。有機肥料の利点は、自然から作り上げられたものであるため土壌を痛めず作物本来の力を引き出すことが出来ることである。この肥料を用いて作られたトマトを試食したところ、普通のトマトよりも甘みが強いと感じられた。

感想

担当者

今回の企画を通して日本の農業がおかれた原状というものを深く知ることが出来た。マスメディアやインターネットからの情報では担い手不足で近い将来農業は成り立たなくなるというマイナス面が強調されることが多かったが、実際は日本の農業の技術力は高い水準にあり、品質の高い作物が作られている。消費者のニーズを考えた有機栽培という取り組み、今回の見学では直接扱わなかったがインターネットや直売所を利用し生産者と消費者が直接つながることで、安い価格で消費者に作物を届けられるとともに自分も高い収入を得られるという取り組みも行なわれている。やり方を工夫すれば大きく伸びる分野であることを実感することが出来た。また企画を通して、都会では得られない自然の豊かさを体感することが出来たと感じる。(JRYC 藤田康宏)

参加者

栃木企画の3日目、益子町を訪れ、床井さんのお宅にお邪魔しました。そこで私たちが勉強したことは以下の四点です。

- ・里山について
- ・農業機械について
- ・化学肥料を用いない農業について
- ・益子の農業について

床井さんのお宅では、衣服のための繊維を綿から作り出す方法を学びました。田んぼでは、ルワンダの米が全て土地に十分に水を張らなければいけないのと違い、水が不十分でも育つ種類の米があるということを教わりました。

日本の稲作は除草や収穫が機械化されているのが印象的でした。

益子では農家の方のお宅に伺い、実際に農業機械を見学しました。そこでは除草機、収穫機、乾燥機、田植機を見せてもらいました。

農家の方は機械が実際にどう動くのか見せてくれました。私たちが、機械を自分の農地で使う以外に、どのように機械によって金銭を得るのかと聞いたところ、機械のいくつかを他の人に貸し出していると答えてくださいました。

床井さんのお家では、タマネギを植え、家の近くの綿畑に行き、沢山の種類の綿を見ました。

農学を学ぶ学生として、機械化についての知識を得ると同時に、日本農業の機械化に感銘を受けました。

(Valence 片岡訳)

三日目に私たちは益子町を訪れ、ある農家の方から日本の農業のことを多く学んだ。水田をはじめとする農業の現場を実際に目にし、その中でも特に私の興味を引いたのは農業機械であった。様々な種類の農業機械が農業に用いられているのを見るのは初めてのことであり、農業をより学ぶことができた。そして農業はルワンダ人にとって非常に重要である。ルワンダの主要な産品は農作物であるもののルワンダの農業は発展していない。益子での経験を通して私たちは先進的な農業を知ることができた。

(Rosette 藤田訳)

コラム 停電の夜

8月29日の夜、私達は宿泊先の「益子コミュニティーセンター 益子ふるさとの家」で夕食をとっていました。ふるさとの家を運営されている橋本さんは農家ということもあり食卓にはなんと新鮮で取れたての野菜が食卓に！！ ルワンダンはとっても偏食家で、日本では基本カレーとスパゲティ、(しかも「スパゲティ」はミートソースだけを指す) ドーナッツしか食べてくれなかったのですが、新鮮な野菜はちゃんと口にしてくれました。自然の力はすばらしかったです ^^

で、食事もたけなわになった頃突然電灯が消灯。今日は誰かの誕生日だったのでしょうか？ いえいえ、実は突然の停電、俗に言うハプニングです。非常灯を残して建物は真っ暗に。皆は食事中、手元が見えにくい。手回し充電式の懐中電灯を引っ張り出して、男性陣は猛烈にハンドルを回していました。ろうそくにも火が灯されて私達は通常現代の日本では味わえない体験満喫をすることに！ これぞ旅の醍醐味です。

停電の範囲は益子町周辺の一部の地域だけであり、およそ1時間後には電気が復旧しました。復旧した後はしばらくルワンダや日本の話で食後の時間を楽しんでいました。そしていつの間にか流れで4人のルワンダン達が祖国の国の歌を歌いだすことに。一曲終わった頃ルワンダんたちは日本人に「何か日本の歌を聞かせてよ～」というリクエストをしたのですが、私達はなかなか歌う歌が思いつきませんでした。

日本の歌は沢山あるはずなのにいざ歌おうとするとなかなか歌が思い浮かばない。ルワンダんたちはダンスコンサートを通してルワンダの踊りや歌を沢山日本で披露してきました。せっかくの機会なのだから日本のこともしっかり紹介したい。まずは早稲田大学の校歌「都の西北」を一曲、次に応援歌の「紺碧の空」を歌いました！ 「紺碧の空」のさびの部分、「わせだ～、わせだ～、はーしゃはーしゃわ・せ・だ！」ではルワンダンも一緒に合唱に参戦。あまりにも合唱の声が大きすぎて屋外にいた橋本さんの飼い猫たちのびっくりしていた！ かもしれませぬ。

最後に、世界に一つだけの花を歌って歌交換の時間は終わりました。ルワンダんたちは次から次へと、まるでかれることのない水脈のように歌がどんどん出てくるのに対して日本人側はなかなか歌が出てきませんでした。ちょっと悔しかったです、次に会う時は是非とも沢山覚えて行きたいです。

盛り上がっているのはいいのですが、日本人にはもちろんルワンダの歌の歌詞、歌っていることの意味は分かりません。ルワンダンも、「はーしゃはーしゃわ・せ・だ」の「わ・せ・だ」以外の部分の意味は分かるべくもなし。でもそんなのはそれほど大したことじゃないのかもしれないと感じました。歌やダンスって歌詞とかの細かいことが分からなくてもとにかく人をどんどん巻き込んでいってしまうのですね。世の中って利害とか駆け引きとかいろいろ複雑なところがありますが、もう一方で好き、嫌い、仲間、友達といった単純なところがとても大切であると痛感。ちょっと怖い話になるかもしれませんが、こういうところで楽しい時間を共有した相手を傷つける気には全くなりませぬ。人と人の理解が平和を作り出す、相互理解の大切さ、そういったことを肌で感じるようになった素敵な夜でした。

We had a good night!! (藤田康宏)

第三章

学生会議報告

日本における食の変化.....	61
日本企業 UNIQLO は貧困層に貢献できるのか.....	62
日本の医療制度とその問題.....	65
私たちはなぜ英語を学ぶのか.....	66
日本の農業.....	69
足尾銅山ー公害問題ー.....	74
TRADITIONAL DANCE AS A TOOL OF WELCOMING TOURISTS.....	75
民主主義と選挙.....	76
How Rwanda Has Been Reconstructed.....	79
被災建造物の保存・観光地化の是非について.....	80
日本における子どもの貧困と教育格差.....	82

日本における食の変化

担当者：小池志歩

日時・場所

日時：8月18日（土）9:30~10:00

場所：落合第一地域センター

プレゼン要旨

今日、日本では食の西欧化が進んでいる。昔は豆や海藻類などを中心とした質素な食生活をおくっていた。しかし現在日本の食卓は、肉類を中心としたカロリーの高い食事が一般的である。また食の西欧化によって、ジャンクフードも手軽に食べられるといった理由で人気である。しかし、食の西欧化によって生活習慣病など多くの問題が発生している。このプレゼンテーションを行うことで、食の西欧化が招く問題について理解してもらいたいと考える。

プレゼン詳細

■イントロダクション

日本の伝統的な食事と、西洋の食事との違いを写真やカロリーの比較などを利用して説明した。また、そもそもなぜ西洋の食事が日本に入ってきたのかというと、第二次世界大戦後のアメリカからの食糧援助により西洋の食事は人気になった。

■食の西洋化の利点

利点の一つとして、日本人の体格の向上があげられる。実際に第二次世界大戦以降、日本人の平均身長は約20cm上昇している。

■食の西洋化の問題点

しかし食の西洋化によって多くの問題が発生している。代表的なものとして生活習慣病患者の増加があげられる。またジャンクフードの食べ過ぎが原因となり、肥満になる子供たちが増えている。

■結論

食の西欧化による深刻な問題点をふまえたうえで、伝統的な日本の食事への回帰を提案した。

■ディスカッション

日本、ルワンダ双方の国にとって、ジャンクフードなどといった食事を摂ることをやめ、伝統的な質素な食習慣に戻ることはいいことか、悪いことかそれぞれに意見を述べてもらった。

感想

発表者

食の西洋化によって利点よりも問題点の方が多く発生していることを実感した。現在私たちの身の回りには多くのジャンクフードで溢れている。今回このプレゼンテーションを通して、日本の伝統的な食習慣に戻ることを提案した。しかし私たちの身の回りにはジャンクフードといった西洋的な食事は溢れている。また手頃で便利、味もおいしいといった理由から、伝統的な食習慣に戻るのは難しいと考える。しかし西洋料理が私たちの健康にもたらす影響は甚大であるので、今一度、自分の食生活を見直し考えるべきであると思う。

日本企業 UNIQLO は 貧困層に貢献できる のか

発表者：松本万里子

日時・場所

日時：8月18日（土）10:40~11:40

場所：落合第一地域センター

プレゼン要旨

ルワンダでも日本でも、程度の差はあれ存在する貧困問題やジェンダー問題。これを解決するためには、一体どんな取り組みが出来るのだろうか。今回は、一つの事例として日本企業 UNIQLO の CSR 活動を取り上げ、貧困問題・ジェンダー問題解決に向けて何が出来るのかを考えた。

プレゼン詳細

日本企業 UNIQLO は、CSR 活動の一環として、バングラデシュのグラミン銀行と提携し、合弁会社を設立した。

この合弁会社の目的は、服の企画・製造・販売をバングラデシュで行うシステムを作り、同国における社会的課題（貧困、衛生、教育など）の解決に取り組むということである。

UNIQLO とは、日本で有名な企業の一つであり、高品質で低価格の衣類を提供するカジュアルブランドである。すでに日本には、約 800 店舗あり、海外では 12 の国に出店している。グラミン銀行とは、バングラデシュにあるマイクロファイナンス機構

の一つである。すでに、800 万人もの人々に貸付を行っており、そのうちの 97% は女性である。また、創設者のムハマド・ユヌス氏とグラミン銀行は、2006 年ノーベル平和賞を受賞した。

商品の企画・製造・販売・利益の再投資を循環する一つのシステムとして考える。また、販売時には、グラミン銀行から資金を借りている女性たちを「グラミンレディ」として雇い、彼女たちが訪問販売をしたり自宅を店代わりに使い販売したりする。

この取り組みは、UNIQLO にとってやりがいのある仕事であり、将来的にバングラデシュが中国に次ぐ生産拠点になるかもしれないという利点があるものの、利益を増やすことが難しく、インフラが整っていないため計画的に生産するのが難しい。グラミンレディにとっては、雇用が増え収入を得ることができ、女性のエンパワーメントにつながるという利点があるが、訪問販売では一度に多くの枚数を売ることが出来ないということや、女性が仕事をするということに対して夫の理解を得るのが難しいという欠点がある。

質疑応答

Q. グラミンレディと UNIQLO の関係性はどうなっているのか。（Eugene）

A. UNIQLO は現地でのネットワークがないので、グラミンレディのネットワークを利用して現地の人々に商品が届くようにしている。（松本）

Q. CSR の意味は何か？（Eugene）

A. Corporate Social Responsibility（企業の社会的責任）の略である。（松本）

ディスカッション

[テーマ]

- ・グループ 1, 2

ルワンダの貧困層の人々を救うためにはどんな CSR 活動が一番良いのか。

- ・グループ 3, 4

ルワンダで女性の地位を改善するためにはどんな CSR 活動が一番良いのか。

[結論]

- ・グループ 1

貧困層を救うために重要なことは、雇用の機会を増やすこと。ルワンダには、健康・金融・法律などの事項に関して様々な政策がある。もし、ルワンダで CSR をするならば、政府に対して現状を説明する必要がある。(宮本・Eugene)

- ・グループ 2

CSR は雇用を生むことができ、それにより貧困層の数を減らすことができる。ルワンダでは、農業に従事している人々が多いので、彼らの知識を活用して CSR をすれば良いのではないだろうか。(白川・片岡)

- ・グループ 3

ルワンダでは、ジェンダーバランスに配慮している。男性も女性も平等に権利が与えられている。女性の地位を改善するためには、女性が社会に対して発言し、そして自信を持つことである。(Valens)

- ・グループ 4

ルワンダでは、政府による政策のおかげで女性が、仕事を獲得する機会が増えてきた。また、以前に比べ女性が就くことができる職業の種類も増えてきている。(Rosette)

感想

発表者

私は、世界で起きている貧困問題やジェンダー問題に関心があり、プレゼンをするとなれば、ぜひこの問題に関連することをしようと考えていた。日本の企業の CSR 活動を紹介すれば、日本企業への理解も深まるだろうし、この問題についても話し合えるだろうと考え、このようなプレゼンになった。実際、プレゼンをしてみると彼らの関心の高さが伺えた。日本では CSR という言葉を耳にする機会が増えている。しかし、ルワンダは私がプレゼンをするまで CSR という言葉や概念を知らなかった。このことは、私の中で一大発見であり、とても驚いたことであった。

参加者

今回のプレゼンで UNIQLO と CSR について知ることができた。UNIQLO は服を通じて女性を支援しているので、とても重要な企業だと思う。また、CSR は人権の保護や環境を改善するのに貢献していて、とても役に立っていると思う。

(Cynthia 訳：松本)

コラム 「Let's Lecture!」

各訪問地どこかしらで、日本語とルワンダ語の教え合いが繰り広げられていた・・・。

東京の某大学付近のインドカレー屋で私は初めてルワンダ語を教えてもらった。初めて教えてもらった単語は王道にあいさつ。こんにちは「Muraho (ムラホ)」、わたしの名前は「Nitwa (ニトゥワ)」などなど。ちょうど目の前にビールがあったのでビール「Inzoga (インゾガ)」、乾杯「Kubuzimabwac (クブジマブワク)」も教えてもらった！
東京は日本人にとっても暑い。ましてやルワンダンにとったらもっと暑い！彼らはよく「Harashuwshe chane (ハラシューシチャーネ)」を連呼していた。意味は「超暑い！」

岩手ではルワンダで有名な歌を教えてもらったりもした。私も「お疲れ」「おはよう(ございます)」などいくつかの日本語を教えた。Rozzy にいっては文字にも興味があったらしく、カタカナで名前の書き方を教えた。

ふと耳にはさんだ「OK 牧場！」・・・ん？誰だそんな日本語おしえた奴は。全く！

一番ヒヤヒヤした場面は戸羽市長とお会いした時。ルワンダンは開口一番、「おはヨ！」こっ・・・！こらこら！「ございます」をつけてつけて！

個人的に Vava が「オツカレ！」と言った時の顔が大変かわいかったなあ 笑



(白川千尋)

日本の医療制度とその問題

担当者：藤本 丈史

日時・場所

日時：8月18日（土）11:30~12:30

場所：落合第一地域センター

プレゼン要旨

プレゼンでは、全体の構成をイントロダクション、前半部分、後半部分の3つに分けた。まずイントロダクションで日本人の医療負担の例を示した。前半部分では、日本の医療制度の内容とその歴史的背景、および日本人の健康水準に対するパフォーマンスについて説明した。後半部分では、少子高齢化と財政難のなかで、日本の医療制度は危機的状況にあることを述べた。

プレゼン詳細

■イントロダクション

イントロダクションでは、日本人が日本の医療機関で治療を受けるとき、どの程度の費用負担をしなければならないかについて、具体例を通して示した。

■前半部分

多くの先進国でみられる医療制度の3つの類型（公営医療方式、社会保険方式、市場方式）を提示したうえで、日本の医療制度は社会保険方式に相当することを述べた。次に、日本の医療制度の歴史的背景について簡単に解説し、最後に日本の医療制度が日本人の健康水準の向上に果たした役割を、

平均寿命と乳幼児死亡率という2つの尺度から、説明した。

■後半部分

日本人の健康水準の向上に大きな役割を果たしてきた日本の医療制度について、今日その持続可能性が危ぶまれていることを示そうとした。すなわち、少子高齢化と財政難といった、現在多くの先進諸国でみられる現象のもとで、日本の多くの公的医療保険制度は財政的に維持できなくなっていること、それゆえに“保険”に基づいた日本の医療制度についてもその維持が難しくなっていることを述べた。また、日本の財政難が医療サービスの質の低下をもたらしていることについても述べた。

質疑応答

Q. 医療サービスを受ける際に保険の適用を受けることはわかったが、たとえばこの建物（落合第一地域センター）が地震や火災で被害を被ったとき、保険の適用を受けることができるか。（Rosette）

A. 地震や火災については加入義務がないため、民間が提供する保険に加入しない限り、地震や火災で保険の適用を受けることはできない（藤本）

ディスカッション

医療制度の問題は非常に複雑で、専門知識を要することから、ディスカッションは難しいと判断し、ディスカッションについては行わなかった。

感想

発表者

日本のような福祉制度は、ルワンダではあまりなじみがないのではないかと思います、プレゼンはなるべくわかりやすいものにしようと心掛けた。それゆえ、本来は議論を要する点について、(直観的に)ごまかした箇所が多々あり、全体として非常に粗い、大雑把な内容になってしまったように思われる。

また、自分としては、日本における医療制度の水準の高さだけではなく、日本の医療制度が抱える構造的問題についても強調していたつもりであったが、プレゼンに対するルワンダ人学生の感想欄を見ると、前者(日本における医療制度の水準の高さ)に関する記述がかなりを占めていた。ほかにも、自分がプレゼンで述べていないことも感想欄に書いてあることもあった。

参加者

多くの先進国の医療制度は非常に高い水準にある。また、多くの先進国で出生率が下がっていることに強い印象を受けるとともに、異様なことと感じる(Eugene)

私たちはなぜ英語を

学ぶのか

担当者：丸茂思織

日時・場所

日時：8月18日(土) 15:24~16:14

場所：落合第一地域センター

プレゼン要旨

現在多くの国が当然のごとく第一外国語として英語を導入し、早いところでは小学校から英語教育を開始している。現に私たちの団体も日本人とルワンダ人のコミュニケーションツールとして英語を使っているわけだが、そもそも何故英語なのだろうか。各々が当事者ながら、なぜ英語を第一外国語として使いた学んでいるのか、意識している人はほとんどいないと考える。このような無関心に釘を刺すとともに、ルワンダ語と英語とフランス語を話すルワンダ人の「私たちはなぜ英語を学ぶのか」という問いに対する率直な考えが聞きたいという思いから、このテーマを取り上げることに決めた。

プレゼンテーションの大まかな流れとして、まず世界で英語がどれだけ普及しているのかを示したうえで、英語が国際共通語となった背景を言語的理由・歴史的理由から説明し、その後英語を話すうえでのメリット・デメリットの一例を紹介した。そして最後に「なぜ私たちは英語を学ぶのか」という問いを投げかける形で終了した。

プレゼン詳細

1. 英語は世界でどれだけ普及しているか

英語を使用している国は、全部で 80 か国以上あると言われている。しかし意外にも、英語を母国語としている人は世界人口の 4.68%で、世界第一位の中国の 13.22% と比べるとかなり少なく、またネイティブスピーカーの人口としては中国語、スペイン語に続く第 3 位である。だが、ネイティブスピーカーとノン・ネイティブスピーカーの人数を合わせると、英語は言わずもがな世界で一番話されている言語である。

英語がいかに普及し、また他の言語と比べ優位な立場にあるのかは、以下に挙げる例から伺うことができる。

- ・貿易取引や国際会議の場において国際共通語として英語が使用されていること
- ・世界の GDP の約 40%を占める国が全て英語圏であること
- ・全部で 30 億をもあるウェブサイトのうちの約 70%が英語表記であり、ネット使用者の約 30%が英語使用者であること
- ・新語全体の 6 割を占める科学分野の新語が英語であること

2. 英語が国際共通語になった背景

(1)歴史的理由

まず国際共通語がラテン語、フランス語、そして英語と移り変わってきた流れを大まかに説明したうえで、「帝国主義」「植民地政策」「第二次世界大戦」という大きな 3 つのキーワードを取り上げ、歴史的背景から英語が普及した理由を述べた。

(2)言語的理由

英語が国際共通語になった理由は、英語がもつ 2 つの言語的特徴にある。

まず、英語にはアルファベットが 26 文字しか存在しないことが理由に挙げられる。それに対し、日本語は漢字だけで 1000 の文字が存在し、まして中国語は 10000 もの漢字がある。次に、英語にはフランス語やドイツ語といった言語と異なり、男性名詞や女性名詞が存在しないことが挙げられる。

以上の理由から“習得のし易さ”が英語普及の大きな理由であることが分かる。

3. 英語を話すメリット・デメリット

(1)英語を話すメリット

英語を話すことによって得られるメリットは個々によって異なると私は考えるが、一般的に、職業選びの選択肢が増える、海外の友達を作ることができる、多くの情報を得ることができる、海外の本やドラマなどの作品を楽しむことができる、等が挙げられる。

(2)英語を話すデメリット

「英語を話すデメリット」というと多少語弊が生じるが、つまりここでいうデメリットとは「英語を使用することで一部の人がこうむる不利益」を意味することとする。このトピックでは大きく 2 つのことを取り上げ、英語を話すデメリットを説明した。

まず「コミュニケーションの不平等」である。英語の国際共通語化、ある種の“英語の支配”は英語が堪能に話せない人を「コミュニケーションの弱者」にしてしまう傾向がある。つまり、非英語圏の人々は英語圏の人と話す際に劣勢の立場に置かれたり、また英語を話すことにどこか引け目を感じたりすることがあるのである。また現在では、英語話者による「イングリッシュ・オンリー運動」というものも大きな注目を浴

びている。「イングリッシュ・オンリー運動」とは、初期は英語優位の状況が確保されていたアメリカで次第に海外からの移民が増えてくるにつれ、英語の地位が揺らぐことを恐れた英語話者たちが英語の優位性を主張した運動のことである。

つぎに「少数言語の衰退・消滅」が挙げられる。これは英語が特権化されたことで、現在自分が使用している言語を捨て、優位な英語に乗り換えてしまい、少数言語の衰退・消滅を招くという問題である。現在のイギリスでは、イングランドによる同化政策を受け伝統的なケルト語話者が大幅に減少し、イギリス政府による復興策も採られている。また英語に関わらず、このように少数言語を消滅・減少に追い込む言語は現在、「キラー・ランゲージ(killer languages)」と呼ばれている。その代表として、英語、中国語、スペイン語、ヒンドゥー語等が挙げられる。

質疑応答

ここではプレゼンテーションに対する質問に限らず、「英語」について思うところを、質疑応答を通して自由に意見交換してもらった。

Q. なぜあなたは英語を学ぶのか？ (丸茂)

A. 私が英語を学ぶ理由は様々な人々とコミュニケーションをとるためである。今この場（学生会議）でも、英語を使って我々はコミュニケーションをとっていて、もし母国語しか話せなかったら互いにコミュニケーションをとることはできないのだ。これが私が英語を学ぶことが良いことであると考えられる理由である。(Valence)

Q. ルワンダでフランス語が普及しているのはなぜか？ (藤本)

A. ルワンダはかつてベルギーの植民地であり、ベルギーの公用語がフランス語だったからである。(Eugene)

Q. 私は国際会議等の場で常にネイティブスピーカーと話す際に引け目を感じているのだが、あなたは英語を流暢に話すアメリカ人やイギリス人と会話するときに引け目を感じることはあるのか。(久保)

A. 引け目は感じている。彼らに早く話されたりすると聞き取ることができないし、私は早く話すことができない。また英語を話せても、独自のイントネーション・なまりがある。(Valence)

感想

発表者

日本メンバー・ルワンダメンバー共にずいぶん掘り下げた議論を展開していたことから、私の想像に反し、自分たちの使っている言語（英語）に対して高い意識をもっていることが伺えた。英語を第一言語としないノンネイティブであるにも関わらず、英語という言語でコミュニケーションをはかっている日本人・ルワンダ人だからこそ、本音で語り合うことができたのだと思う。

また日本で“受験英語”といった文法に特化した教育方法が問題として注目され、「英語を学ぶことが目的」となってしまう一部の日本人学生がいる反面、以下のルワンダメンバーの感想からも分かるように、英語が「目的ありきのツール」という位置づけであることがとても良いことであると感じた。

参加者

英語は海外の人とコミュニケーションをとることになくなくてはならないし、現在多くの国で英語が使用されていることから、英語を学ぶことは大切なことだと思った。
(Cynthia)

私の経験から、英語は多くの国で普及しており、様々な人とコミュニケーションをとることを助けてくれる。また英語はビジネスの場面だけでなく、音楽を聴く等のエンターテイメントな部分でもとても有用である。また日本人の学生は小学校から大学まできちんと英語を学習するべきだと思う。
(Valence)

日本の農業

担当者：藤田康宏

1. 日時・場所

日時：8月19日（日） 10:00～11:00

場所：東戸塚地区センター

2. プレゼン要旨

ルワンダの人口の80パーセント以上は農業に従事しており、ルワンダにおいて農業は重要な役割を果す。本プレゼンでは日本の農業の現状を紹介し、8月29日に栃木県益子町で行なわれる農業企画についての事前勉強を行なう。構成としては、

- ・過去
- ・現在
- ・これからの取り組み

の3つを順に取り扱う。日本では食料自給率の低下、高齢化、担い手不足といった「農業の衰退」が問題視されている。古来からの日本の豊かな農業の風土の紹介と共に、現在の日本の農業の現状を発表する。

3. プレゼン詳細

はじめに日本の農業で中心的な地位を占める稲作の一年の流れを説明した。大雑把な内容としては、

- ・苗育て
- ・田植え
- ・田の手入れ
- ・収穫
- ・農業の合間、また収穫後の祭りといったイベント…である。

弥生時代以降日本の社会は稲作の影響を大きく受けており、農耕の開始によって大規模な村が形成され定住生活が本格的にスタートした。豊穡を祈る祭りなども催されるようになり、農業が日本人の生活、風俗に大きな影響を与えた様子を説明した。

一通りの基本的な内容を紹介した後、日本農業の

- ・過去
- ・現在
- ・将来への取り組み

の3つのパートに分けてプレゼンを進めていった。また、この流れは8月29日の栃木県益子町訪問で見学する当日の流れに沿ったものである。

(I) 過去の日本農業

過去とは具体的に第二次世界大戦以前を

指す。日本では1960年代にトラクターなどの農業機械が導入され、それが契機となって農村の風景が一変した。8月29日、栃木県の益子町を訪問する際のフィールドワーク先の一つとして里山と棚田を取り上げた。里山、棚田は機械が入る前の農村の風景を色濃く残している。

化学肥料、農業機械といった「現代」技術が導入される以前、農民は里山に入り落ち葉を田んぼなどの肥料として利用した。木を燃料として切り倒し、たけのこ、きのこ、山菜などを食料として収集した。水田が広がる農村を取り囲む場所に位置し、人間と自然の境界線である里山の役割を説明すると共に、技術の発展で里山に人の手が入らなくなったために古来の役割を失い普通の森に帰りつつある現状を共有した。

里山は人間を養うと共に、動物達にとっても大きな恩恵をもたらした。トンボやカエルといった水田によく見られる生き物達が生息する場になり、渡り鳥たちも豊かな生態系が生み出す栄養を求めて飛来した。

棚田は国土の狭い日本で、土地を有効利用した結果生まれた田んぼの形態である。しかしながら棚田は面積が非常に狭いため効率的に農作業が行なえる農業機械を使って作業を行なうことができない。そのため手作業に頼る棚田は経済的には成り立たず、現存する棚田は基本的に景観保全のために残されているという意味合いが強い。

農作業の方法は機械にあまり頼らない手作業であり、人力と家畜の力に頼っていた。戦前の農家はたいていそれぞれの家で家畜を飼い、動力源、栄養源、肥料の産出源と

していた。

(II) 現在の日本農業

現在の日本農業の大きなポイントとして次の3つを挙げた。

- ・機械化
- ・担い手不足
- ・専業農家の減少、兼業農家の増加

(i) 機械化

1960年代から農業機械が導入されるようになると農作業の効率が飛躍的に上昇した。化学肥料の導入も併せて収穫量も増加した。そのため農家の人々は「重労働」から開放され一家総出で農業を行なわなければならない状況から、じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃんの三ちゃんで行なわれる三ちゃん農業が行なえる土壌が生まれた。

農作業に画期的な変化をもたらした機械化であったが、デメリットも存在している。農業機械は100万円以上の値段がかかるものも多数存在する。初期投資がふくらみ結果として農業がもうかりにくい産業になった。

(ii) 担い手不足

専業農家の平均的な収入は300万円と言われている若い人にとっては将来設計が非常に難しいと言われており、他にも魅力的な仕事がある中でわざわざ農家を選択する人は少ない。50、60歳以上の農家が大半を占めている一方45歳を下回る層の農家は割合が非常に少ない。このままの状況が継続すれば近い将来農家の担い手がいなくなってしまうと言われている。

(iii) 専業農家の減少、兼業農家の増加

農業が機械化され、化学肥料の使用が活発になったことにより農業が昔に比べて重労働ではなくなったことにより (i) で挙げた三ちゃんが農業の中心を担い、とうちゃんは周辺の工業や事務所などの職場へ働きに出た。専業農家と兼業農家を比べると兼業農家の方が収入が高い。実際に益子町でも兼業農家の家は建て替えが行なわれており新しいものが多い一方、専業農家の家はなかなか建て替えが行なわれず古いままとなっている。

日本の中では一般に専業農家の減少、兼業農家の増加が問題だとされているが実際のところは農家の視点に立った場合それが本当かどうか疑問を抱いた。

(III) 将来への取り組み

将来の取り組みとして有機肥料と販売経路の開拓を発表した。有機肥料は自然の栄養を用いているため微量栄養元素が含まれている。また同時に化学肥料と異なり土にダメージを与えることもない。有機栽培は食の安心安全の観点から消費者に対して需要があり、農家にとって有望な取り組みの一つとなっている。

販売経路の開拓として、生産者が直接消費者に農作物を販売する取り組みを紹介した。今までは一般的に生産した作物を JA に収めて市場で値をつけ、せりを行なう業者が卸売業者に作物を販売し、最後に卸売業者が消費者に商品を届ける。生産者と消費者の間には多くの媒介人が存在し、消費者が作物を買う価格のうち1~2割しか生産者である農家の手元に残らないと言われている。現在ではインターネットを用い

て消費者に直接販売する経路を開いたり、農家が協力して地元で直売所を設けて取れたての作物を持ち込んで販売する方法が取られている。

直接消費者に作物を販売することで生産者は高い価格で販売が可能で、消費者も安い価格で作物を買うことが出来る。

質疑応答

Q. 日本の農家の人が作っている作物は自分達で消費する分か、それとも輸出を含めた販売用か？

A. 今日では自分の食べる分を作っている自給的農家と販売を目的としている販売農家の両者がいる。輸出については日本の農産物の価格は高いのであまり行なわれていない。

Q. 田植えは雪解け後に行なわれる。もし田植えをした後に雪が降ってきてしまったらどうするのか？

A. 農家の人は毎年経験に基づいて農作業を行なっている。詳しいことは分からないが、季節を適切に選んで植えていると思う。

Q. 里山にはとても多くの種類の生き物がいる。作物に悪影響をもたらす生き物はいないのか。

A. 例えば稲を食べる生き物としてすずめが挙げられる。それに対するためにかかしを作るといった対策をとっている。カエルなど里山にいる生き物の多くは害虫を食べるなどして農作業の助けになる。

Q. 日本の農家は全員機械を持っているの

か？

A. 販売を目的とした農家は基本的に全員機械を使っている。コストと能率の面から手作業では利益をあげられない。自分で消費する分の作物のみを作っている農家では機械を使わずに作物を作っている農家もいる。

4. 感想

発表者

今回の発表を通じてルワンダ人に日本の農業のことを少しでもより理解してもらうことが出来たら幸いです。日本の農業は機械化されており、そのために農業の形態が大幅に変わったということに大きな衝撃を受けました。農業機械の導入によって農業が大規模化し、棚田のような狭い農地を耕すことは経済的に成り立たなくなってしまったため全国で棚田が消えつつある現状を知ることが出来ました。しかしながら同時に単純にいいと思い込んでいた、「昔の美しい景観を守ろう」という社会の流れに疑問を持つ結果にもなりました。必要とされなくなったものが廃れるのはある意味当たり前、単純な保護活動も大切だけれども経済的に成り立つように新しい仕組みを考えていくことが大切なのだと感じました。

現在のルワンダは家畜の力を頼って人と動物後からによって農業が行なわれていますが、将来機械や化学肥料が積極的に導入されるようになったとき、日本の例が役に立ってくれればうれしいと思います。また流通経路の中で、流通に関わらない生産者は弱い立場におかれていることについて、ルワンダではコーヒーが主要作物で国際価格の影響を強く受けるので参考になればい

いと感じました。

参加者

日本における機械を用いた米の作られ方を知ることが出来てとても有益だと感じました。また、豊穰を願って行なわれる祭りも興味深いものでした。人と自然の関わりで生まれた里山には感動しました。

(Valence Muvara)

じやるわ コラム JRYC的国際貿易取引

報告書の作成に際して、割り当てられた箇所の記事を書くために、前回の本会議の報告書を参考として見ていたところ、日本人がルワンダと秋葉原までお買いものに出かけていたことについて記してあるコラムがあった。嗚呼、前回のルワンダ人招致でもルワンダとのお買いもので苦労したんだな、と思いながらそのコラムを読んでいた。

ルワンダとのお買いものは、ルワンダ人自身の金銭取引が絡んでくるから大変なのだ。ふだん、ルワンダが日本で食事や電車の切符を購入するときは、日本人側が全額負担するから、それに必要な作業は会計上の作業だけであり、それほど大変ではない。

しかし、カメラのように目的が個人的で、比較的高価な商品となると、そうはいかない。そういった商品に関しては、日本人側の会計から出すわけにはいかず(ただでさえ団体の財政状況は逼迫してるのに!)、したがって商品の購入に際してはルワンダ人自身が出費しなければならない。

ルワンダが日本でカメラのような商品を購入するときには日本人も苦労する。その理由は二つある。まず一つは当然言語の壁である。ルワンダがどのようなものをほしがっているかを理解し、具体的な商品の説明も英語でルワンダにしてあげる必要がある。

もう一つは、日本人とルワンダとの間の為替取引(!?)である。今回、日本に来たルワンダは、日本円ではなくアメリカドルを保有していた。日本で商品を購入するのに、ドルで払うわけにはいかない。なので、まず日本人側が円で商品を買ってあげて、そのあとルワンダからドルでお金を返してもらうわけだが、その際、円とドルの交換比率を設定する作業が必要となる。しかも、ルワンダはそれほど多くのお金を保有しているわけではないので、細かいところの計算まで非常に敏感である。したがって、彼らの納得のいくようなレートで、彼らが払うべきドルの金額を計算しなければならないのである。

とはいえ、ルワンダとのお買いものでは、自分はいして苦労を感じなかった。というのも、そういった面倒事は完全に先輩に任せきりで、ルワンダと同じように、自分も商品棚に陳列してあるカメラをいじくってばかりいたからだ(先輩も同罪)。

ルワンダとのお買いものは、東京での企画が一通り終わった8月20日と、ルワンダが帰国する前日の8月30日にあった。

異文化交流の壁を感じた夏だった(トヤッ。

(藤本 文史)



足尾銅山ー公害問題ー

担当者：島村志保子

日時・場所

日時：8月19日（日）11:05~12:00

場所：東戸塚地区センター

プレゼン要旨

1880年代を契機に日本で発生した足尾銅山をめぐる公害問題を取り上げ、これからも成長を続けるルワンダと日本の学生たちに、過去の問題を考え、未来に活かしていくことを目的とする。

プレゼン詳細

足尾銅山の歴史を紹介し、公害発生の背景、被害の様子、どのように公害問題が拡大したのか、そして現在に至るまでの公害の復旧作業の例として、植林と鮭の放流について紹介した。

ディスカッション

どのように発展と環境保全のバランスを保っていけばよいか。発展と環境保全はどちらが大事であるかを3つのグループに分かれて議論してもらった。

結論

3つのグループともに、環境保護に重点をおくべきとの結論になった。理由は、
・よりよい環境が保証されていることで、より良い発展が保証されている。ただ、技術の発展によって、効果的な環境保護の手段が得られるという側面もある。
・ルワンダではまだ発展途上なので、まず

は開発に重きをおき、そのあと保護というようにしたい。しかし、国民全体の利益のために、足尾のような一地域の人の健康が損なわれるようなことがあるならば、必ず発展のための開発よりも、環境保護が大事だと思う。

・答えは出しづらいが、日本は公害問題を経験した立場として、情報発信して行くべき。

また以下のような話も聞くことができた。

・ルワンダでは植林などを行うことで自然の保護を行っている。

・ルワンダではジェノサイド前には法律がなく、自由に木を切っていたが、ジェノサイド後には法律ができ、政府の許可があれば商業目的などで、木の伐採をすることができるようになった。

・ルワンダでは約90パーセントのエネルギーを木から得ている。

感想

発表者

まずは反省からしたい。今回の足尾銅山についてのプレゼンは、企画の中の事前学習の意味を含めていたのに、自分の準備不足等で、あまり内容を伝えることができず、大変後悔の残るものであった。

議論の結果としては、環境の保護が大事であるという意見が、多数であったが、ルワンダでは発展途上ということもあり、経済発展の前提軸として、自然の保護が大事だと考えているようだった。

足尾銅山においては、当時公害を軽減する技術があったにも関わらず、鉍毒を処理するコストを惜しんだせいで、公害対策が

遅れたという面がある。一度失われた自然はもとに戻すのに時間がかかるということをしつかりと念頭において、日本、ルワンダ両国ともに経済成長を続けていけたらと思う。

参加者

足尾銅山が日本を作るのに大いに貢献していたと知って、特に日本の銅山の役割について大変驚き、私はこのトピックとても興味を持ちました。私は銅山を保護すべきと思いました。なぜならそれは私たちの日常生活において大切なものだからです。

(Bagwaneza Rosette)

ルワンダの伝統的なダンス

—観光客へのおもてなし—

担当：Eugene MAZIMPAKA

Bagwaneza Rosette

翻訳：藤田康宏

1. 日時・場所

日時：8月30日（木）

場所：早稲田大学学生会館

2. プレゼン要旨

現在のルワンダにとって観光は重要な役割を果たしており、観光資源として豊かな自然、野生動物、文化や伝統が挙げられている。その中でも特に重要な位置を占める

ルワンダのダンスについて詳しい紹介がなされた。

3. プレゼン概要

初めに観光が現在のルワンダにとって重要な役割を果たしていることを説明し、特に重要な位置を占めるダンスについて紹介がされた。ダンスは長い歴史を有しかつ生活に根付いたものであり、訪問者をもてなすのはもちろん、結婚式、公式行事といった場面でも頻繁に踊られる。観光資源の中でも特に注目すべきものとして野生のゴリラが紹介された。また、ルワンダの地形は丘陵であり「千の丘の国」というニックネームがついている。

ルワンダは植民地化以前よりひとつの国家として成立しており、文化や伝統は世代を超えて受け継がれてきており、今の世代も次世代にこれらを継承していかなければならないとされ、政府もこれを支援している。

ルワンダのダンスは大まかに次の4つの種類に分類できる。

- ・ Intore：戦士を模倣した踊りで、雄々しさを強調する。
- ・ UMUSHAGIRO：女性たちが国に豊かさをもたらす動物たちを祝福する踊り。象、シマウマ、牛等が挙げられる。
- ・ UKURAMBAGIZA：婚姻の踊り。男女が共に踊る。
- ・ The Royal Drummer：13人の演奏者がドラムを演奏する。伝統的に王権の象徴であった。

この中でもっともポピュラーな形式は

Intore である。これは、女性によって踊られるバレット、男性による英雄の踊り、そしてドラムから構成される。

そして、これらの踊りは旅行者をもてなす役割を持っている。目玉は、観光客も現地のダンサーとともに踊りにまざれることである。

最後に、ルワンダでは観光が大きな役割を有しており、その中でもダンスは重要な位置を占めている。よって政府はこの分野を更に発展させていく必要があると結論づけている。



民主主義と選挙

担当者：白川千尋

日時・場所

日時：8月30日（木）

場所：早稲田大学学生会館

プレゼン要旨

民主主義は先進国に限らず多くの国が導入しているイデオロギーである。しかし「こ

の国は民主主義を主張しているけれど、本当に民主主義なのか」という国がたくさん見られる。

そこで私は「選挙」という民主主義には欠かせない政治手段に焦点をあてた。もちろん選挙だけではその国が民主主義であること判断することはできない。しかし選挙は国民が意思表示できる最も身近な手段ではないだろうか。

先進国である日本と発展途上国であるルワンダの選挙結果を比較し、先進国と途上国の民主主義や選挙に対する見方・捉え方の違いを取り上げた。

なによりもルワンダの学生が民主主義や選挙に対してどういう考えを持っているのかに興味があった。

プレゼン概要

デモクラシーを主張するからその国はいいと言えるのか、デモクラシーは「平和」を導くイデオロギーであるか。（そもそもデモクラシーがいいかどうかという問題についてはここで言及しない）

かつてのドイツ、ワイマール共和国では、ホロコーストやインフラ整備で名が知られたアドルフ・ヒトラーが民主的な選挙を利用して政権を勝ち取った。時に民主主義は政治的に利用され、ヒトラーのような政治家に加担してしまう。

ジェノサイド以降のルワンダの選挙結果は、2000年は暫定統治政府が選んだものの2003年、2008年そして2010年の全て、現ルワンダ大統領率いるRPFがほぼ得票率を占めた。2008年は95%、2010年は93%という高得票率を獲得し他の党は6%以下の得票率であった。一方で日本の2011年8

月 11 日の衆議院議員選挙結果はというと、民主党 42%、自由民主党 26%、その他の党 11%以下という結果であった。特に民主党が突出したわけでもなく他の党が極めて低いというわけでもなかった。

両国の選挙結果を比較した結果、本来民主主義を主張する国の選挙結果として、一党が 90%という高得票率をとる可能性はほとんどない。ルワンダはあまりに他党との得票率の差が大きすぎる。ゆえにルワンダは「独裁政権の疑い」「他党や知識人に対する身体的攻撃の可能性」「表現の自由の侵害の可能性」があると予測される。

質問

1. もし自分の国の政権を握る党に不平をいうことができないとしたら、あなたはこれに対して何か感じますか、もしくは何も感じませんか？(もし不平を言う場合、あなたは殺される可能性がある)
2. 選挙の役割とは何ですか？

発表者の答え:

1. 自分の言いたいことを言えない状況に恐ろしさを感じる。政権を握っている党に意見を言うことが出来ない場合、自分の国をよくする機会がなくなってしまう。
2. 選挙は自分の意見を示す一つの方法である。民主主義において、自由や権利が保障されることは当然である。特に選挙は、その国に住む人間が自分の国をよくする一つの方法である。

参加者の答え:

- リーダーがしっかり政策を行っているなら不満はないが、良くない政策を行っているなら批判する。

(Valence Muvura)

- 国のリーダーを選ぶために選挙は大変重要である。もし、国民が自分たちの選んだリーダーをよいと思うなら、その国は十分よいといえるから。

(Bagwaneza Rosette)

感想

発表者

ルワンダの学生は自分の国をよく知っていたし、選挙に興味を持っている人が多かった。彼らはむしろ自分が国のリーダーになるかもしれないという考えまでもっていた。今日日本では若者の選挙離れや政治に対する関心の低下が問題となっている。日本人は彼らの政治に対する姿勢を見習うべきだ。

民主主義は国民による国民のためのものであるから、自分が選挙で選んだリーダーを信じているし、そのリーダーが国を発展や平和に導いてくれるはずだという意見が印象的だった。ルワンダの学生の政治に対する捉え方を知ることができてよかった。

参加者

よいリーダーシップが発揮されている時にその国の民主主義はいいといえる。一方でリーダーシップが発揮されていない時はその国の民主主義は悪いといえる。(例えばその国に独裁者がいる場合)

民主主義に参加するのに、選挙はとても重要である。

(Bagwaneza Rosette)

コラム ルワンダンは今日も踊る

ルワンダンは歌と踊りが大好きである。彼らが全員ダンスサークルのメンバーだからかもしれないが、彼らがダンスを踊っているときの笑顔はまぶしく、本当にダンスへの愛が伝わってくる。ルワンダでは学校に伝統ダンスの授業まであるそうで、子どもから大人までダンスに親しんでいるようだ。

今回ダンスを見ることができるのは、計画されていた横浜、岩手、栃木のコンサートだけだと思っていたが、実際はそうではなかった。彼らは、日常的に突然歌い踊り始めるのだ。例えば、バスの中で突然ハモリ始めたり、コンビニでかかっている音楽に合わせて踊りだしたり…。なかでも岩手企画1日目の夜のBBQでは、ルワンダが踊り始め、日本人も巻き込んで大いに盛り上がった。日本人の中には彼ら以上に踊り狂うメンバーもあり、大いに楽しんだようである。また、女子のダンスには壺のようなバスケットを頭にのせて踊るものがあるのだが、ルワンダ女子は水を入れたコップで代用して頭にのせて踊ったりしていた。そしてこぼしたりしていた…。その日の昼には日本人の頭の上にペットボトルをのせようと努力していたが、私たちはそんなことできるはずもなく…。頭の形を否定された日本人であった。

そんなどこでも踊る姿は、被災地でも発揮された。陸前高田の仮市庁舎で戸羽市長のお話を聞いた後、市長の前で踊ることになったのだ。突然のことだったがルワンダは素晴らしいダンスを披露した。彼らがとても嬉しそうな顔をしていたのが印象的であった。

今回ルワンダと一緒に過ごして、ダンスがこんなに身近にある文化をうらやましく思った。そしていつでもどこでも踊れる彼らの体力もうらやましい…。



バスケットを頭にのせて踊る

(谷川琴乃)



仮市庁舎の前で踊りを披露するルワンダ人たち

How Rwanda Has Been Reconstructed

担当者： Eugene MAZIMPAKA

翻訳：岩井天音

日時・場所

日時：8月22日（水）

場所：岩手大学

プレゼン要旨

ルワンダの歴史を踏まえた上で、ルワンダの復興の在り方を日本人学生と共有する。その上で、東日本大震災からの復興とジェノサイドからの復興の共通点・相違点について私見を述べる。

プレゼン詳細

■ルワンダの歴史

1962年にベルギーより独立した。「現在」のルワンダが始まった日は、1994年7月4日、ルワンダ愛国戦線（RPF）によってジェノサイドが終結した日にあたると言えるだろう。しかしその日から今日まで、ジェノサイドからの復興の道のりは長かった。

■ジェノサイド後の復興について

ジェノサイド後、ルワンダ政府は「国の復興は、国民の心のケアから始まる」と考えた。実際、人々の心は酷く傷ついていた。国民の精神的な復興なしには国の復興は有り得なかった。

政府やNGO主導の下、ツチとフツが和解を目指すためのセミナーや集会在国内で多く開かれた。文字通り一緒に座り、自信

が経験したことをありのまま話す。これは、決して簡単なことではないが、この経験のシェアという行為が、最終的には「赦し」に結び付くのだ。ルワンダでは、これを応用しジェノサイドの加害者を住民自らが裁く「ガチャチャ裁判」も行われた。

またRPF（訳者註：現カガメ大統領が所属する政党）は、Unity, Democracy, and Development（団結・民主主義・発展）を標語に掲げた。この目標は、ルワンダの復興において目指すべきものを明確に掲げているのではないだろうか。

さて、ある程度精神的な復興が進んだところで、私たちルワンダ人はルワンダの未来について思い描く必要性があった。そこで出来たのがVision2020である。

現在、良好なガバナンスの下、私たちはVision2020で定められた目標を達成しつつある。また、ルワンダは大変治安がよく政情が安定していることでも知られる。

■地震とジェノサイドを比較して

「復興」というテーマは同じであるが、ジェノサイドと地震では性質が違っていると考えている。

ジェノサイドからの復興では、「二度と繰り返さない」（Never Again）というメッセージが強く押し出されており、初等教育から高等教育までそのメッセージを学ぶ機会が用意されている。

東日本大震災における津波の被害は、アルジャジーラなど国際放送を通して目にすることがあった。今回の岩手滞在では、災害にどうやって向き合っていくのか、学びたい。

被災建造物の保存・観

光地化の是非について

て

発表者：岩垣 梨花

日時・場所

日時：8月24日（金）

場所：アイーナ岩手県民情報交流センター
7階会議室

プレゼン要旨

2011年3月11日。宮城県沖を震源とするM9.0の大規模地震が日本を襲った。東日本大震災である。この大規模地震によって誘発された津波により東北沿岸部は壊滅的打撃を受け、約2万人の尊い人命が奪われた。

そんな壊滅的な町に残ったもの、それは廃墟と化した被災建造物であった。窓ガラスは水圧ですべて破られ、天井は壁が崩れて梁がむき出しになっている……。その様態はまるで終戦直後の日本の姿を彷彿させる。そのような当時の津波の凄まじさを物語る建造物は現在、保存か取り壊しかの議論のさなかにある。このような津波の被害を端的に表す建造物を保存することで、津波の恐ろしさを後世に伝え続けることができる一方、その建物内で最愛の家族や友人、恋人を亡くした遺族にとっては忌まわしい存在である。

震災から一年半が経過した現在、被災地は今、新たな問題に直面している。どのような選択が「是」であり、「否」であるのか、

自身の立場によって大きく意見が分かれるこの問題を、「学生」という立場から考えてみたい。

プレゼン詳細

テーマを扱った動機

今回訪問した被災地である、岩手県陸前高田市はまさに今この議論が進められている最中である。彼らが実際に目にした被災建造物がこの先どうなっていくか共に考えていくことで、震災を「遠い国・日本で起こった悲しい出来事」ではなく、もっと身近なこととして考えてもらおうと思ったため。

プレゼンの展開

まず東日本大震災について簡潔に紹介し、これまでの活動で得た知識をおさらいした。その後、被災建造物の現状を説明して現在は「保存」か「取り壊し」かの二択で意見が分かれていることと両意見の言い分を説明。さらに(ex)として、大学生と遺族という立場を当てはめて具体的に説明。両意見とも「間違っていない」ことを明示したうえで、この対立は「立場の違い」から来るものであるということを説明。最後に「保存」と「取り壊し」のメリット・デメリットをまとめて紹介し「被災建造物は残すべきか、取り壊すべきか」という疑問を投げかけてプレゼンを終了。その後、4班に分かれて議論に移行した。

ディスカッション

〈グループ 1〉

被災建造物は“保存”すべきであると思う。昨日訪問した陸前高田市の市民ホールなど多くの方が亡くなり、またそこにある建物の多くも壊滅的被害を受けた。その記憶は本などでも語り継ぐことはできるが、やはり視覚的に訴えるものは非常に有効である。

(発表者：宮本・Valence)

〈グループ 2〉

本当の結論は市民の方次第であるが、私たちは“残す”べきであると思う。時間の経過と共に人々の記憶は風化していく。その風化に歯止めをかけるために私たちは残っているものを保存して、津波の恐ろしさを後世に伝えていくべきである。私たちはその保存するものは「奇跡の一本松」が良いと思う。(陸前高田市の沿岸部にはかつて、7万本の松が植えられており、人々は“高田松原”と呼んで、その松原を愛していた。しかしながら、津波でわずか1本を残してすべてが流され、その残った1本は「奇跡の一本松」として被災者の心を支え続けた。根腐れが原因で解体が決定したが、その後永久保存化される予定。)

(発表者：rosette・久保)

〈グループ 3〉

建物は“保存”されるべきだと思う。震災では非常に多くの建物が損害を受けた。そのうちのいくつかは、外観こそ残っているものの、中はぐちゃぐちゃで、この中で亡くなった方も多くいる。そんな時、遺族はこんな悲しい事実は早く忘れ去ってしまい

たいと願う。思い返したくないと感じる。しかし、だ。私たちは遺族こそ犠牲者のことを忘れるべきではないと思う。犠牲者のことを忘れずにいて、彼らの受けた苦しみを後世の人に伝えていかなければならない、とそう思う。

(発表者：Eugene)

～このように、“保存”という結論を出すグループが多数の中、唯一シンシア（シンシアの班でも“保存”という声があげられていた）だけが“取り壊す”べきであるという意見を述べた。

〈グループ 4〉

私はルワンダでの例を提示したい。ルワンダではジェノサイドの後、各地でメモリアルが建てられた。これは、ジェノサイドの記憶を風化させず、後世に伝えていくことを目的としたものである。私は同じように、陸前高田、特に“奇跡の一本松”が切り倒された跡地にミュージアムを作れば良いと思う。そうすることで、家族・友人・恋人など自分の大切な人を建物内で亡くした被災者が建物を眺めるために傷つくこともないし、津波の記憶を後世に伝えることもできる。

(発表者：Cynthia)



感想

発表者

プレゼン後のディスカッションでは議論が進みつつも、最終的にはほとんどの班で「被災建造物は保存すべき」という結論が出された。理由はやはり、後世に伝えるために視覚的に訴えるものは非常に有効的だからである。

そんな中で印象的だったのは唯一「取り壊すべき」という結論を出したシンシアの言葉であった。その言葉から、彼女がこの東日本大震災をルワンダのジェノサイドと結びつけて考えていること、さらに言えば震災を自分の国の出来事のように真剣に考えていることが伺えた。私は彼女の意見を聞いたことで、私たちが被災地訪問や岩手企画を通して彼らに伝えたかったことが十分に伝わったと感じた。

日本における子ども の貧困と教育格差

担当者：谷川琴乃

日時・場所

日時：8月24日（金）15:40~16:30

場所：岩手県盛岡市 アイーナ

プレゼン要旨

日本は経済的に最も豊かな国の一つであるとされる。しかし、子どもの相対的貧困率は先進国の中で比較的高い。親の所得格差が子どもの教育格差につながっている。塾などの日本の教育の特質や、教育における政府の公的支出の低さなどが原因である。子どもの教育機会の不平等は正のための新たな解決策として、地方自治体やNPOの取り組みも紹介する。

プレゼン詳細

まず、子どもの相対的貧困率とは何かを説明した。それは、年収が全国民の年収の中央値の50%に満たない家庭にいる子どもの割合である。率が高いほどその国には格差が存在するといえる。ユニセフによると、先進35か国の中で日本は9番目に子どもの相対的貧困率が高く、14.9%である。

では「貧困」とされている子どもはどのような状況に置かれているのか。具体的には、1日3食の栄養バランスの良い食事を欠く、親が給食費を払えない、毎日風呂に入れない、修学旅行に行けない、などが挙げられる。ここで、親の所得によって子どもの生活水準がどのように異なるのかを示す

ため、裕福な家庭の子ども A と裕福でない家庭の子ども B を例として挙げた。A は毎日バランスの良い食事をとり、塾やサッカークラブ、英会話教室に通い、修学旅行に行き、自宅に友達を招待して楽しむ。しかし B はそのような生活を送ることができない。

このような子どもの貧困はなぜ起きているのか。不況や非正規雇用の増化などにより親の経済状況が悪化したこと、日本における再分配機能が他国に比べて著しく低いことなどが挙げられる。

親の経済的貧困は、子どもの健康問題、虐待、家庭の孤立に加え、子どもの教育格差を引き起こす。本プレゼンでは、親の経済的貧困と子どもの教育格差に焦点をあてた。

第一に、親の所得と子どもの成績には相関関係がある。親の年収が高いほど子どもの試験の点数が高いことが証明済みである。原因の一つとして、入学試験勉強における塾の役割が大きいたことが挙げられる。裕福でない家庭は子どもを塾に行かせることができない。第二に、成績が低ければ大学入学率も下がる。第三に、大卒は高卒より年収が平均 1.5 倍高くなる。つまり、親の所得格差が子どもの学力格差を生み出し、子どもの将来の所得格差につながるという「貧困の連鎖」が存在する。

では政府はこの問題にどう対処しているのか。児童手当や公立高校授業料無償化などの政策がある。しかし、児童手当は十分ではないという指摘があり、公立高校授業料無償化も、授業料以外は自己負担であるため完全な解決策にはなっていない。そもそも日本の教育への公的支出（対 GDP

比）は、OECD によると比較できる 31 加盟国の中で最下位である。大学レベルでも、授業料は高く、給付奨学金も非常に限られている。教育への公的支出の低さは家庭の教育費の負担を重くする。家庭の経済力が子どもの教育機会に直結してしまうのである。

ここで、新たな解決策を紹介する。地方自治体や NPO が主体となり、子どもの生活支援や学習支援に取り組んでいる。本プレゼンでは、キッズドアという NPO の取り組みを紹介した。

キッズドアは、高校受験を目指しているが家庭の経済的な理由で塾に行けない中学生を対象に、放課後無料で学習支援をしている。教えるのは大学生のボランティアである。家庭の経済状況にかかわらず全ての子どもに平等な教育機会が与えられることを目指している。

ディスカッション

4 グループに分かれて 2 つの議題についてディスカッションを行った。

「日本の子どもの貧困についてどう思うか」については、日本の子どもの貧困はアフリカで起きているような絶対的貧困ではないが、それでも「深刻な問題だと思う」という意見がルワンダ人学生から出た。

「大学生として私たちに何ができるか」については、「中古の教科書を集めて子どもたちに配る」などの案が出た。

感想

発表者

子どもの貧困と教育格差というテーマにしようと思ったのは、私自身貧困問題に関心があったからである。そして、自己責任で片付けられがちな大人の貧困とは異なり、子どもの貧困は子ども自身には責任がないことが明らかであるからだ。また、ルワンダ人が、日本人は皆裕福だと思っているとしたら、日本にも貧困があり、格差があるという事実を知ってほしいと思ったからだ。このプレゼンを通して彼らは何らかの発見があったならとてもうれしく思う。相対的貧困の定義や、親の就労状況についてももう少し分かりやすく説明すべきだった、ディスカッションをもっと工夫すればよかった、など反省点はあるが、これらを次の機会にいかしていきたい。プレゼンが大きなトラブルがなく終わったこともうれしかったが、個人的にはプレゼン準備のため子どもの貧困についての資料を読んでいる時がとても有意義な時間だった。様々な発見があり、この分野への興味が深まった。

参加者

私にとってこのトピックはとても興味深い。なぜなら、日本にも貧困や失業があり、それが子どもの貧困につながっていることが分かったからだ。日本はもっと教育に力をそそげるはずだ。教育は国の発展のための重要な資源だ。知識がなければ発展できない。日本における教育の機会を増やすことはとても重要である。(Rosette 谷川訳)

コラム 乙女なルワンダンガール…？

2人のルワンダンガール Cynthia と Rosette はとにかく乙女だ。毎日ファッションショーのように華やかな洋服を着ていたり、綺麗なアクセサリを身につけていて常におしゃれを欠かさない。あまりにも毎日おしゃれな服を着てくるので、「この服高いんじゃないの？」と聞いたことがあったが、答えは「No」で、しかも「めっちゃ安いよ」と返ってきた。そんな彼女たちを最も乙女だと思った瞬間に遭遇したので、ここで紹介しておこう。

(写真:ポーズを決める Cynthia)



それは栃木企画が終了し、東京へ戻ってきた直後の学生会議でのことだった。順調にその日の議題を進めていき、一区切りがついたところで休憩に入ったので私は Cynthia・Rosette とともに女子トイレへと向かった。先に2人が個室へと入り順番を待っていたのだが、そんな私に驚くような音が聞こえてきた。

「ジャー」と便器内を勢い良く駆け巡る流水音。「そんなの当たり前じゃないか」と思われる方もいらっし

やるかも知れないが、これは確かに“違う”のだ。私の耳に聞こえてきた、この機械がかった無機質な流水音は通常のものではない。それは女性なら誰でも一度は使用した経験をお持ちであろう「音姫」の流水音だった。

「音姫」とは、“用便時にどうしても流れてしまう少し恥ずかしい音を消したい！”という、何とも日本女性らしい繊細な悩みを解決するためだけに生まれた画期的な文明の利器である。しかしこの装置はなかなか奥深いもので、本当の水を流す回数を減らせるために、節水にも貢献しているという、大変地球にやさしい側面も持っているのだ。

(写真:蛍光色大好きな Rosette)



普段から確かに乙女だとは思っていたがまさかここまでだったとは…。彼女たちが繊細な乙女心の象徴である「音姫」を使いこなしている姿は非常に深い感動を覚えた。…と、そこでいきなりトイレの警報が鳴り響いた。いきなりの大音量にかなり驚いたが、個室から出てきた2人は何事もなかったかのように。どうやら、洗浄ボタンと押し間違えてしまったらしい。ここで初めて「音姫」の音は、意図して

使用したのではなく、たまたま押した中の一つであることに気付いた。どうやら、彼女は「音姫」の使用方法は熟知してはいなかったようだ。本当のことが分かり、若干がっかりしたが、次に来日した時は、この「音姫」の微妙な乙女心を説明して、ぜひ「相互理解」に貢献したい。

(岩垣梨花)

第 4 章

参加者感想

岩井 天音	国際基督教大学教養学部 4 年	87
岩垣 梨花	早稲田大学人間科学部 1 年	88
大山 剛弘	早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻 修士 1 年	90
片岡 美月	早稲田大学文化構想学部 3 年	93
久保 唯香	早稲田大学文化構想学部 3 年	94
小坂 弘奈	フェリス女学院大学 2 年	95
小池 志歩	群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部 2 年	96
品川 正之介	早稲田大学教育学部 3 年	97
島村 志保子	日本大学法学部 1 年	98
白川 千尋	専修大学法学部 2 年	100
谷川 琴乃	早稲田大学政治経済学部 2 年	101
永井 陽右	早稲田大学教育学部 2 年	102
中山 康平	早稲田大学国際教養学部 4 年	103
藤田 康宏	早稲田大学政治経済学部 2 年	104
藤本 丈史	早稲田大学政治経済学部 3 年	106
松本 万里子	立命館大学経済学部 2 年	107
丸茂 思織	日本大学法学部 1 年	108
宮本 寛紀	横浜市立大学国際総合科学部 3 年	110

「繋がり」

国際基督教大学教養学部 4年
岩井天音



初めに、第8回本会議には自身の都合上わずかな日程のみの参加となったため、今回の本会議に対する包括的な感想ではないことを断わっておく。

今までこの団体で活動してきた2年半と第8回本会議を振り返ると、ルワンダ人の存在は私に多くの「繋がる/繋げるきっかけ」を与えてくれたと思う。今回横浜で開催したダンスイベントでは、ルワンダメンバーによるダンスレクチャーの時間を設け、観客と一体となって楽しめる空間を作り上げることが出来た。今までにはない一体感や盛り上がりを見せたイベントであった。多分、日本人の力だけでは多くの観客を巻き込んだ空間を作り上げることは不可能だっただろう。ここでもルワンダ人は民間交流レベルで日本とルワンダを繋げる重要な役割を果たしてくれた。

その他にも私はこの2年半で、ルワンダ人のお陰で様々な「繋がり」を得られた。

日本ルワンダ学生会議メンバーであると得られる経験の一つに「日本各地を訪れる」という点が挙げられる。実際に「ルワ

ンダ人」というきっかけのお陰で、私は今までに行ったことのなかった日本各地に足を運ぶ機会を得、多くの学びを得た。また、団体の代表として多くのルワンダ関係者の方々にお世話になったが、そこでの出会いも貴重であったと感じている。

第8回本会議でもルワンダ人は繋がりをもたらしてくれる存在だった。第8回本会議の後に開催する報告会のタイトルは”here and there”という。あちらとこちら。東京と東北。首都と被災地。東京と栃木。都市と地方。日本とルワンダ。先進国と発展途上国。here と there の間には、想像力を働かせないと埋められない溝が存在するかもしれない。しかし、ルワンダ人と共に学び議論することで、私たちの想像力は少し豊かになったはずである。”there”が自分の想像の範疇に入った時点で、そのthere は一歩”here”へ近づき、自分も there に近づける。そんな活動だったのではないかと振り返って思う。

大学生として本会議に参加するのは今回で最後である。今まではルワンダメンバーとの別れの時に感傷に浸ったりしなかったが、今回は違った。大学2年生の時に活動を初めてから半年に一回ほどの頻度で会っていてある意味「会うのが当たり前」であったルワンダ人に次に会えるのはいつか分からない、会えたとしても一日中一緒にいることは難しい、ということを実感させられた。駅で彼らを見送った後に、めずらしく寂しい気持ちになった。

しかし、いつまでも寂しがっている訳ではない。何故なら2年半の交流を通して”普通の”人間関係を築いたと思うからだ。ル

ワンダ人（外国人）だから特別という訳ではなく、“普通の”友人になれたと思う。

“We meet to depart, we depart to meet.”

最終日にルワンダメンバーがスピーチの中で引用したフレーズだ。前に別のルワンダ人もこの言葉を使っていた。日本語にも「会話は別れの始め」という表現があるが、“we depart to meet”という後半の部分がある方が好きだ。実際に次にいつ会えるという保証はないが、活動を通して出会ったルワンダ人メンバーを忘れることはないし、向こうもまた日本人のことを記憶の片隅に置いてくれているだろう。例えば、夜遅くまで Gmail のチャットをオンラインにしていると、ルワンダからチャットが来て「もう日本時間で深夜 2 時だよ？早く寝た方がいい」と心配してくれる友人がいる。活動を通して出会った友人達のこうした些細な気遣いが、私の将来を大きく変える訳ではない。しかし、それらは私の人生を豊かにしていると胸を張って言える。その存在に感謝して、これからの人生も頑張っていきたい。

「友だちって

なんですか？」

早稲田大学人間科学部 1年
岩垣梨花



高校 2 年生の冬、いつものように我が家へ帰宅すると、見慣れた居間のソファに見慣れぬ 5 人のアフリカ人が座っていた。おそろおそろ始めた 5 日間の共同生活。片言の英語で会話をし、同じ皿に盛られたご飯を食べ、夜中まで一緒に遊んだり、踊ったりする……。そんな、ある意味“非日常”の連続がとにかく楽しくてしょうがなかった。最初は近づくことも怖かった彼らに、いつしか自分の方から抱きつくようになって。言葉が通じない彼らと確かにつながっている気がした。なんとなく“友だち”になった気がした。

別れの日、“再会”を約束して彼らは我が家を後にした。私の頬には涙が伝っていた。これが、私の人生で初めて“ルワンダ”に触れた瞬間である。

あれから 3 年の月日が経ち、私は今回日本ルワンダ学生会議の一員として第 8 回本会議に参加した。そしてこの会議を運営し

ていく中で、3年前にあんなにも簡単にできた“友だち”というものに非常に悩むことになった。かつてこんなにも悩んだことがあったであろうかと思う程に悩んだ。1つめには言葉が通じないことに、“友だち”としての壁を感じた。伝えたいことはあるのに、それを上手く英語で表現することができない。また、ルワンダンが必死に伝えてくれようとする気持ちを聞き取ることができない。言葉が分からない、これは3年前にも同様に感じたはずなのに、何故かあの時以上に辛いものだった。「英語が通じなくても心が通じている、の過程は高校生で終わらなきゃいけないんだよ。私たちはそういうのでは駄目。だから英語を勉強しないと。」JRYCメンバーの一人に言われた言葉が痛いほど沁みた。

2つめには私が担当した岩手企画・コンサートの準備段階で“友だち”という言葉に悩んだ。

本企画書の岩手企画・コンサートにも記したが、今回私たちは“Be My Friend!～友だちになろうよ～”をテーマに企画を進めてきた。陸前高田市長の講演から、友だちになることが大切だということは分かった。そのためにコンサートを開くことも決定した。でも、どうやって・・・？そもそもルワンダンは、コンサートを聴きに来るお客さんは、お互いに友だちになりたいと思うのであろうか？“友だち”なろう、などとは実は大変おこがましい考えであって、そんなことは望んでいないのではないのか？私のこの疑問は「てか、友だちってなに？」にまで発展し、最終的には広辞苑で「友だち」をひっぱってしまふほどに迷走した。自分の納得する答えが見つからない

まま企画を進めていくことは不安の連続で、いつも「本当にコンサートは成功するのだろうか？もしかするとお客さんは誰も来ないのではないだろうか？」という恐怖に苛まれていた。(冷静に考えれば、岩手大学生が周知に大変力を入れていてくれたので、そんなはずはないのだが。)

そんな私に、ルワンダンは“友だち”は何かを教えてくれた。そんな瞬間が企画中にあったのだった。

岩手企画1日目。アイスブレイキングの後、河川敷に移動してバーベキューを楽しんだ。皆が楽しく肉を焼いている中、私はなぜか一人で泣いていた。理由はとても単純で、自分の怠惰な性格と、そのために先輩方に迷惑をかけてしまったことに耐えきれなかったからだ。そしてまた非常にくだらないので理由は割愛させていただくが、その時私はなぜかヒザを負傷していた。涙でぐちゃぐちゃになったお粗末な顔と、血のにじんだヒザを人に見られたくなくて、私は皆に背を向ける形で河川敷のふちに座り、必死に涙をこらえていた。・・・と、一段下がった水辺で水遊びをしていたEugeneとValenceと目が合ってしまったのだった。「やばい、見られた！」と少し焦った私にEugeneが「痛い？」と問いかけた。どうやら、Eugene・Valenceは私の血がにじんだヒザを心配してくれているようで、私が泣いていることには気付いていないようだった。

「大丈夫！全然痛くないよ。」と返したが、2人は川の水を手にとって何度も私のヒザを洗ってくれた。企画のことで少し落ち込

んでいた私には、彼らの優しさがとても暖かくて思わず涙がこぼれそうになり、そうなることを避けるために必死にこらえた。このままだと2人の前で恥ずかしくも大号泣してしまう、と感じた私はなんとかこの場を離れるため2人に「もう痛くないよ。ありがとう」と伝えて立ち上がろうとした。その時、

「痛いのは心かい？」

そう聞いたのは、Eugene だった。Valence もこちらを見ていた。

「なんだ、2人とも分かってたのか。」そう思ったら、なんだか2人の優しさがとても尊くなって、私はどうとう涙を抑えることができなくなり、その場で泣いてしまった。2人はそれ以上何も言わずに、静かに私の頬に伝わる涙を手で拭ってくれた。

本会議中、多くの時間をルワンダと過ごし様々な思い出が頭をかすめるが、初めての英語のプレゼンで皆を爆笑させたことよりも、悲観的に予測していた岩手コンサートが大成功に終わったことよりも、この河川敷での思い出がなぜか私の記憶に鮮明に残っている。それはきっと、私がこの本会議の中でずっと悩まされていた“友だちってなに？”の答えが少しだけ分かったからなのだろう。

言葉にしなければ分からないことは沢山ある。言葉にしなければ日本ルワンダ学生会議が成り立たないことも十分に承知している。しかしその上で、意外に言葉にしなくても伝わるものがあるのではないだろ

うか。そして、その思いをくみ取ろうと努力をしたとき、お互いは“友だち”になれるのではないか。3年前、確かに感じた“なんとなく友だちなれた気がした”の理由が、少しだけクリアになった。初めての招致は忘れられない夏の記憶となった。

「未来へ」

早稲田大学大学院 創造理工学研究科
建設工学専攻 修士1年 大山剛弘



気がつけば早いもので、このルワンダ学生招致も4回目を数えます。幸運にもその全ての招致に関わることが出来、毎回得るものはあるが、今回は個人的に自己ベストの収穫がありました。

とはいえ、私に関わったのはほぼ岩手企画のみなので、その企画経緯から感想を書きます。まず、岩手県国際交流協会の記事となるものをそのまま転載します（手抜きではありません！笑）

「岩手と、ルワンダ??」

この言葉は企画段階から何度も聞いてきました。確かに、なかなか聞きなれない組

み合わせですよ。1つ例を取り上げれば、片や三陸沖の海の幸に恵まれる岩手に対して、ルワンダはアフリカの内陸国で海もありません（ルワンダン（「ルワンダ人」のこと）学生の中には、今回初めて海を見た人も！）。

そんな悪条件？にも関わらず、『ルワンダ・プロジェクト 2012』は「東日本大震災とその復興から、日本とルワンダそして世界の未来を考えよう」というテーマのもと始まりました。

ルワンダ。まずそこから説明しましょう。ご存じの方も多と思いますが、ルワンダは1994年に20世紀最大の内戦の1つ、いわゆるルワンダ大虐殺を経験した国です。そこでは、当時約700万人の人口のうち100万人近くが犠牲になりました。詳細は割愛しますが、この内戦は軍隊による人民の殺戮以上に、植民政策でツチ・フツというカテゴリーに分類された人々が、同じコミュニティの中で殺しあった側面が強調されます。人命や社会基盤に加え、既存のコミュニティをも失った悲劇は、想像すら難しいです。そして、もう1つ。ルワンダはその状態から、20年足らずで驚異的な復興を果たした国でもあります。世界的にも有名なコーヒーの輸出に加えてIT産業も軌道に乗りつつあり、「アフリカの奇跡」とも呼ばれています。

さて、先ほど悪条件などと書きましたが、申し訳ありません。あれは僕にとって全くのウソです。笑

僕と岩手大の同志・洞井は「ルワンダの学生ほど、いま岩手で議論を交わすのにピ

ツタリな人はいない」という想いで、この企画の発端から一致していました。

- ・内戦～復興のプロセスを肌で感じて育った彼らなら、復興の最中にある東北に共通項を見出し、良い議論が出来るということ。

- ・（アフリカの発展途上国、海がない、等）様々な違いがあっても、互いの背景を理解して顔の見える関係を築き、共に将来を考えられると分かれば、それを知った全ての人々が勇気づけられるだろうこと。

上の2つの大きな期待から、僕はルワンダン学生との接点をもつ関東の学生団体「日本ルワンダ学生会議」の企画代表として、洞井は現地・岩手にゼロから働きかける岩手大学代表としてそれぞれ突き動かされ、そして共感してくれたたくさんの方々と共に企画は実現されました。

日程は6日間、アイスブレイキング→被災地・ルワンダについての学習会→陸前高田訪問→グループ発表→コンサートという流れで行われ、慣れない英語やルワンダンとの共同生活（ルワンダンは全員岩手大のメンバー宅に宿泊しました！）に四苦八苦しながらも、互いの絆は強くなり、震災と今後の復興の在り方に関する議論も日増しに深まりました。

そして最終日のコンサートは、来日したルワンダン学生による伝統ダンス（ルワンダでは平和の象徴である）をフィーチャーしてクロステラス盛岡で行われましたが、その時のとびっきりのルワンダンの笑顔や、

休憩時間に積極的に岩手の人々に話しかける様子を見て、6日間という期間の中で彼らが心から岩手を好きになり、人々と友達になったのだと確信しました。

この企画が直接、東北の被災地あるいは世界中の紛争を解決することはありません。しかし、コミュニティの大切さ、どんなに離れていても「友達」であることの心強さ、当たり前だけど将来の世界を担っていく上で、僕たちの世代に何よりも大切なことを改めて確認する本当に貴重な機会となりました。末文までお読みいただき本当にありがとうございます。最後は陸前高田市の戸羽太市長から頂いた、この企画を象徴するあの言葉を。 **Be My Friend!**

創立以来、僕たちは「相互理解」を一貫して理念に掲げて活動しています。そして、その対象は「ルワンダ」だけに限定する必要は全くないと、僕は考えます（身近な人と分かり合う努力をせずに、外へ外へというのは、綺麗事に思ってしまうので）。

3.11 大震災は、まだ終わっていません。それでも関東圏の（或いは他の東北以外の地域の）生活からは、あの出来事はどんどん遠ざかっています。なので、今回はルワンダは勿論、岩手との相互理解を目指しました。全く違う背景を寄せ合わせて、その相乗効果で、3つのコミュニティを同時に相手にしてしまおうという欲張った訳です。

ところで「相互理解」を理念に掲げ活動するとはどういうことなのか。ここがはっきりしないと成果の確かめようがありません。他人である以上、完全な理解は不可能

でしょう。それでも、相手に関心を持つ事。知りたいと思う事。つまり「友達」「兄弟」「家族」、言葉は何でも良いですが、その様な関係になること。それが相互理解を目指す過程で得られる証だと思います。冒頭で、今回得たものが最も多かったと書きましたが、それは僕にとって一番多くの友人関係が誕生した招致であったということです。こんな草の根の金銭には換算出来ない関係が未来の世界を創り上げていくのだと、素朴に信じて活動してきた一人としては、これ以上幸せなことはありません。

「誰かと分かり合う」ありふれているけど、とても難しいことです。これからもいろんな問題が、団体にも1人1人にも待ち受けているでしょう。それでも今回生まれたような素朴な関係を大切に出来る暖かいチームであってくれればと、そして自分もそう在れるようにと願いながら、この文を、そして学生時代を最高に実り多いものとしてくれた日本ルワンダ学生会議での役割を、終えようと思います。 **Murakoze!**

「暖かい記憶」

早稲田大学文化構想学部 3年

片岡美月



10ヶ月の留学期間を経て、2年ぶり且つ2度目の招致活動を行った。今回は残念ながら全参加は出来ず、東京、横浜、岩手のみの参加であった。

今回の招致活動では、人々のつながりの中で生まれる暖かい記憶というものが沢山残ったと思う。岩手や横浜のコンサートでは、皆がルワンダ人と一緒になって踊ってくれた。中には、ルワンダには興味がなかった、あるいは知らなかった人も沢山いただろう。それでも、ただ通りかかっただけ、友達に呼ばれただけの人も、皆がルワンダ人と同じステップを踏んでくれた。すごかったねえきれいだねえと、ルワンダ人に近寄って声をかけてくれた。

私たちは活動の理念として‘相互理解’を掲げている。‘相互理解’という言葉そのものが難しいので、非常にやっかいな理念と言わざるを得ない。団体活動をどのように進めるか、よく迷ってしまうのもこのせいである。3年生になった現在も、こうして椅子に座って‘相互理解’の意味を考えていると、五里霧中の心境になってしまう。

だけれども、今回、コンサート会場の端っこに立ちながら、日本人とルワンダ人が和気あいあいと一緒に笑っているのを見て、単純に、ああこれで良いんだなあと思った。

その状態が相互理解、と言いたい訳ではない。このコンサートが終わって1ヶ月経った頃、参加してくださった方の中で、全員が地図上でルワンダを示せるか、ルワンダ人の名前を覚えているか、いやルワンダだったかウガンダだったか判別できるか、確信は持てない。楽しい時間を共有すれば相互理解、というのであれば、私たちがルワンダのことを勉強する必要もない。

それでも、この暖かい一体感には、こんな小さな微笑ましい記憶を異邦人と共有できたということには、何か意味があるはずだ。その程度も質も、人それぞれ違うだろう。別にそのせいでその人の人生が変わるということもないだろう。でも私は、こんな記憶が沢山の人の中に沢山生まれれば、世界平和も少し近づくのではないかと、強固な確信は不在にして、ただ素朴に、思うのだ。そして、そんな場のきっかけ作りをした人々の一員であるということが、素直に嬉しかった。

相互理解という理念を掲げる以上、こんな風に楽しく嬉しくにこにこしてだけいればいい訳ではない。時には血みどろ覚悟で相手に自分を理解するよう迫ることも大切だろうし、相手を理解するために自分から突進していくことも大切だ。でも、ああこれで良いんだなあ、と、ふと思ったあの気持ち、相互理解という無理難題の小さな鍵であるとも思うのだ。

また、被災地の一つである岩手県陸前高田市の訪問も、決して忘れられない記憶としてずっと残るだろうと思われる。被災地への思いや感想は、とても書ききれない上に脱線する恐れがあるので省く。が、そこにも人の暖かさを感じた。語り部さんは、

丁寧にあの日のことを、海のない国から来たルワンダ人に、津波を経験したことのない学生達に、伝えようとしてくれた。りくカフェの人たちは、暖かく家庭的な雰囲気ですぐ私達を迎えてくれた。

自分の体験を伝えたいという思いは、字面だけ見ると一方方向の理解を求めているように見えるが、陸前高田市の皆さんのお話からは、相手の立場や心境への配慮、深い思いやりが感じられた。あんな思いをもう誰にもしてほしくない、苦しい思いをした他の人たちのことを知ってほしい。この伝えたいという思いの裏には、皆への優しさがあるのだろう。話す相手への、他の被災者の方への、そして自分自身への。私はその優しさと暖かさがとても嬉しかった。

そんな中で私が残念だったのは、被災地で、立ち入り禁止の中に土足であがりこんだり、不謹慎な写真撮影を行う人々の存在である。それこそ自分の知りたいという気持ちだけを、あるいは‘有名’なところへきて楽しいという気持ちだけを考えた、周りへの配慮どころか単純な想像力さえが著しく欠けた独りよがりの行動である。まさに私たちの理念と対極の行動である。しかし、不特定多数の人間に目くじらをたてた所で、時間と感情の浪費である。この反面教師は、相互理解という難題に取り組む決意を新たにす起爆剤として消費する他はないのだろう。

最後に、この活動に関わってくれた栃木、岩手、横浜の地域の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいである。本当に、沢山の人の優しい気持ちに支えられて、この招致活動は成り立っているのだと、今回特に強く感じる事ができた。この招致活動が、きっと沢山の

人々の中に、良い思い出として残るだろうことを心から願っている。

「繋がる、大学生。」

早稲田大学文化構想学部 3年

久保 唯香



「え、ちょ、ちょっとそれはやめた方がいいんじゃないの??」

心配性の私は、少量の油に大量のジャガイモを投入しようとするルワンダ系女子を必死に諫めていた。水気をとっていないために油がはねてパチパチと音になっている。眉をひそめて「Oh~ no~」。

キャップをかぶって、いかしたタンクトップを身にまとい、彼女たちはジャガイモを揚げ続けた。

日本ルワンダ学生会議(JRYC)。私はこの団体をいつも、日本とルワンダの大学生を繋ぐ学生団体だと説明している。本会議も8回目を迎える。今回私は、岩手大学のスズキ家にルワンダメンバーとともにホームステイをさせていただいた。

ジャガイモは無事フライドポテトになり、ルワンダメンバーの腹に落ちた。なん

だか面白くて、スズキと私はこんにやくと田舎巻きを食べながら笑った。これならルワンダンに取られることもなかろうと…。

この本会議では、スズキをはじめとする岩手大学を含めて実に 10 以上の大学から学生が参加した。つくづく大学は不思議な場所だと思う。大学生というだけで私たちは出会い、寝食をともにするのである。

まだまだ未熟だと思っても、私は 4 回の本会議を経験した。1 回 1 回、出会った一人ひとりとの時間が、かけがえないものである。

卒業して、大人になって、またいつかどこかで、一緒に仕事したり、お酒飲んだり、家族の自慢をしたりするのかもしれない。そんな日が来るまで、ここで出会った方々、ルワンダに住む彼らには、一生懸命生きてほしい。そしてだからこそ私も、毎日頑張ろうと思うのである。

ルワンダから来たメンバーの一人が、小包を 2 つおもむろに出してきた。それは、第 5 回から第 7 回本会議で共に活動した友達 2 人からのプレゼントだった。遠く遠く離れたアフリカ大陸の小さな国から海と大陸を渡ってやってきたお茶とはちみつとお手紙。ぼろぼろになったその小包と私と私の家族にあてたお手紙を見て、やっぱり明日も頑張ろう、と思うのだった。

「自分を 見つめなおす」

フェリス女学院国際交流学部 2 年
小坂弘奈



今回の第 8 回日本ルワンダ学生会議本会議は、私にとって 2 度目の本会議、いわゆるルワンダ人メンバーとの対面であった。昨年大学 1 年生で初めてルワンダ人とあった時は、憧れの国ルワンダからのメンバー来日に胸をわくわくさせていたと同時に関西メンバーと共に企画した大阪企画を無事に成功させることができるのか不安を抱えていた。そして待ちに待った第 7 回本会議ではルワンダメンバー、関西メンバー、他のメンバーと交流を深めることができ、大阪企画も大きなトラブルもなく無事に終了した。

2 度目の本会議はどうだったのだろうか、今一度自分に問いかけてみる。私は全力を尽くすことができただろうか、今回の本会議を振り返ると私は反省することがあまりに多すぎる。私は母校である横浜商業高校の生徒、先生と共に高校企画なるコンサートを企画した。というのも来年 2013 年にアフリカ開発会議(TICAD)を控える横

浜で私達学生のアフリカに対する問題意識を深めようというのが目的であった。協力して下さる方や、高校生との連絡を取り合うなど、私が主体となって企画を進めていたのだが、私の動き全てにおいて効率が良かったとは言えない。そのせいでメンバーや他の方々に迷惑をかけてしまったと反省している。今回私はこの失敗を通して学んだことは、連絡を早く取ることがいかに重要かと、自分の器の大きさを知っておき、できないことはためらわずに他のメンバーに協力してもらうことだ。

そして迎えた当日、私は自分の準備不足が原因で不安でいっぱいだった。コンサートはルワンダ人紹介、団体紹介から始まり高校生による活動紹介をかねたプレゼン、ジャンベ部、ルワンダンのパフォーマンス、そしてルワンダメンバーによるダンスレクチャーという内容であった。当日参加メンバーに無茶なお願いをたくさんしてしまったと深く反省しているが、途中ひやっとした場面もあったがみんなの協力のおかげで意外とスムーズに進んだのではないかと思う。コンサートが終わり、私はほっとしたと共に自分自身も楽しみ、とても満足していた。ダンスレクチャーの後、来場のみなさまと一緒に見よう見まねでルワンダダンスを踊ったのだが、なんと会場のほぼ全員が参加し、私がイメージしていた”アフリカ風盆踊り”にぴったりであった。私はその光景を見て、反省もしていたがとっても満足した。良くも悪くもルワンダンが来てしまえばなんとかうまくできてしまうところがこの団体だと思っている。私は今回の反省を忘れずに、今後の人生に生かさねばと思う。

その後の企画については私は夏休みを利用した短期留学の都合で岩手企画の数日間のみ参加で、みんなよりも先にルワンダンにお別れをしたのが心残りであったが、今年も彼らに会うことができ本当に良かった。ともあれ、今回私の企画に協力して下さった団体メンバーを含めた方全員、この報告書を手にとって下さった方に感謝します。ムラコゼチャーネ！（ありがとう）

「成長」

群馬県立女子大学
国際コミュニケーション学部 2年
小池志歩



私は今回の第8回本会議で初めてルワンダ人と対面した。私がルワンダ人と過ごした時間は5日間という僅かなものであったが、時間では測れないかけがえのないものを手にすることができたと感じている。特にルワンダ人とともに過ごした栃木での3日間は最高の夏の思い出となった。

振り返れば私の不甲斐なさから反省点ばかりが頭をよぎる。最大の反省点としてやはり英語力のなさを痛感した。やはり自分

の言葉で気持ちを伝えることができないのは辛かった。またルワンダ人は日本に来てとても好奇心旺盛で真剣に日本について知ろうとしていた。ルワンダ人の真剣な問いかけに、しっかりとした答えを返すことができず歯がゆい思いをたくさんした。

今回の本会議では遠い国ルワンダが少し身近な国として感じる事ができた。日本ルワンダ学生会議に参加する前は、ルワンダといえばジェノサイドといったようにマイナスなイメージばかりが浮かんでしまっていたが、彼らと考えや時間を共有してジェノサイドだけではないルワンダを知ることができた。次はルワンダに渡航して自分の目でしっかりと確かめたい。今回、企画準備の段階から振り返って、たくさんの人に出会いまた初めてのことをたくさん経験した。ルワンダ人に会えたことだけではない、たくさんのことを学んだ。これからも日本ルワンダ学生会議の活動を通していろいろなことを経験し自分の糧としていきたい。次に彼らと会うときは更に成長した自分で。彼らとの再会を今から心待ちにしている。

「JRYC での 2 年半を 振り返って」

早稲田大学教育学部 3年
品川正之介



「留学う？友達と徹夜でゲームする幸せを失いたくないです。嫌です。」

大学一年生で JRYC 入りたての頃、こんなことを先輩に言っていた、らしい（笑）。自分でも呆れる程だが、そんな自分が今では海外留学中で、主にアフリカ関連の授業を取っている。人生不思議なものである。

JRYC は自分にとって非常に良い学びの場であった。ルワンダやアフリカの事、それだけじゃなく振り返って自国の日本について知る良い機会だった。学術的な意味での学びだけでなく、経験的・感覚的な「学び」がたくさんあった。これまでの JRYC での 2 年間は、確実に自分の中で何かしらの種をまいてくれたと思う。

今回の招致では、留学の関係で企画立案が中途半端なかかわり方になってしまったり、本会議を最初の数日間しか参加できなかったのが申し訳ないのと、残念であったけれども、今年新たに入ってきてくれたメ

ンバーたちが頑張っている姿を見て、彼らにとって非常に良い経験になってくれたら嬉しく思う。

本会議をもう気づけば4回も経験して思うのだが、本会議は正直楽しい。しかし楽しい事だけじゃない。企画立案から、実際の本会議でのルワンダンとの交流まで、しんどいこと、つらいこと、悔しいこと、理解できないこと、たくさんある。けど、それこそこの活動の醍醐味なのだと思う。今年入ってきたメンバー一人一人が、本会議を通じて楽しい思い出をつくったり、時には悔しい思いをしたりで、精一杯に学び、それぞれ個人の中に何かしらの種がまかれたことを願ってやまない。

なんかすごい先輩面した調子こいたことをほざいてるなあとか自分書いてみて思っているわけなのだが、今こうしてJRYCでの2年半を振り返って考えてみるとそう思わずにはいられない。新メンバーたちの姿と2年前の自分の姿が、ほんのちょっと重なって見えたような。

とりあえず一年間の留学でJRYCとの活動からは離れますが、みんなこれからがんばってください。

「前へ」

日本大学法学部 1年

島村志保子



私たちの活動の中で、JRYCの将来というものがよく議論され、私たちの中で大きな問題となった。私自身、企画を作成する中で、協力者の方からこの団体の理念である相互理解について質問を受け、そもそも相互理解とはなんなのか、そこに具体的な意味があるのか、散々悩むことも多かった。

「相互理解」という理念だけをもとに活動している、私たちの活動には目に見えやすい成果はないと思う。個人によっても相互理解の意味は異なり、正解もないと思う。だからこそ自分のやっていることが、自己満足に過ぎないことなのか、それともちゃんと意味を持つことなのかはわからなくなって、混乱するように思う。

企画を計画する中でも、これが本当にルワンダに伝えるべきことなのか、これがルワンダが知りたいことなのかなどとても悩んだ。

だが団体のこれからの姿を考えずに、全く自分の率直な考えからすれば、私は第8回本会議は本当に楽しいものであったし、自分にとって本当に意味のあるものだった。

企画段階では、ただの「ルワンダ人」に過ぎなかった彼らが、8月17日に来日して、一緒に活動しているうちに Eugene, Cynthia, Vava, Rosy といった個人として見えてくる。私は彼らからたくさんの思い出をもらった。悲しくておちこんでいたとき、Cynthia が座っていた私の手を取って笑顔でダンスを教えてくれたこと、誕生日を祝ってもらったこと、同じ部屋に泊まって一緒に話をしたこと…。もっとたくさんのお話を話したいのに、全く英語が使えなくて悔しい思いもしたが、ルワンダ人の彼らといった国籍が先行して個人が語られるのではなく、Rosy の住む国がルワンダというように一人の人として関わっていったことが、純粋に嬉しかった。そのような気持ちになれたことも含めて、彼らと過ごした二週間は私にとって大切なものだったように思う。

第5回の本会議で Alfred が述べた言葉に「君たちは1994年のジェノサイドみたいな悲劇がまた起こらなければルワンダへの興味を失ってしまうのだろう」という発言があったそうだ。悲劇は人を団結させ、強く人々を結びつける。これはルワンダのジェノサイドだけでなく、日本の東日本大震災にも同じことが言えると思う。(虐殺が、震災が起こる前までは行ったこともなかった土地に対し大勢の人たちが知り、支援や救護を行う) 反省から良くしていくことも大切だとは思いますが、後悔の数より未然に防げることがもっと大切なことだ。ルワンダのジェノサイドから18年経っており、もはやジェノサイドでルワンダを語るつもりは全くないが、人と人のあいだでおこる悲しい出来事が二度と起きないように、私た

ちはルワンダだけではなく、いろんな国についてどんな人たちが暮らしているのか、情勢はどうかをもっと知っていく必要があると思う。

私たちは学生で、まだ知識も経験も足りないし、何か行動するには不十分であるのかもしれない。ただ知らないことで、私たちが様々な問題に無関心でならないために、私たちは自分たちがまずルワンダについて知り、また多くの日本人にルワンダという国を伝えていくことが私たちのできる役割なのではと思う。もちろんルワンダにも私たちが先進国の一つと捉え、技術的なことを教えてくれる国としてではなく、パートナーとなる国として捉えてほしい。

第8回本会議で、私は日本の色々な地域の方と交流し話をすることができた。何キロも離れた大学の方から本会議が始まる前から、応援のメッセージをもらったり、共に企画を行ったり、岩手でも栃木でも、私はたくさんの方々に支えてもらったことに本当に感謝の気持ちでいっぱいである。このような機会をもてたのも JRYC に所属していて、企画に参加できる環境にあったおかげだと思う。

反省もたくさんある。生きてきた環境が違うのだから、同じ説明を受けてもルワンダ人には伝わりにくい事がたくさんある。もっと自分たちが学び、説明していかなければいけないと思った。私は第8回の企画を企画する、あるいは実行する中で、素敵な日本人たちに出会えたし、日本人が努力する姿を間近に見ることができた。だからこそ、多くの問題を抱えた日本ということだけではなく、たくさんの人たちが自分なりのビジョンを掲げて暮らしているんだと

いうことまで伝えていきたいと思った。日本とはやはり異なる場所に生きる彼らなのだから、もっと伝えたいことがあったし、またこの日本に招くという活動に対して、私たちが日本人とルワンダ人がただ友達になるというだけでなく、しっかりとお互いの国のことを知れる機会としたいとも思った。

人間は住む地域、環境によって考え方も必ず左右されていると思う。だから政治的にも地図上の国境は必ず存在するし、それはなければならぬものなのだとも思う。けれど私たちが関わっていく中では、その垣根を越えていきたい

私個人としての目標は、もっと知ること。私はまた彼らに会いたいと思うし、これからもルワンダについて日本についてもっと知りたいし、知ってもらいたいと思う。また、ルワンダの彼らのように自分の国、日本そのものをもっと好きになりたい。その気持ちを忘れずに、これからの日本ルワンダ学生会議での活動を続けていきたいと思う。

最後にはなりましたが、今回の第8回本会議を行う中で協力していただいた皆様、ありがとうございました。

「伝えること」

専修大学法学部 2年

白川 千尋



8月17日、成田空港で私は初めてルワンダンと出会った。長旅で疲れているであろうにも関わらず、彼らの顔には笑顔が溢れていた。私は緊張しながらも彼らと抱き合った。とにかく最初は「はじめまして、わたしの名前はしらこ。会計やってるよ」みたいな感じで自己紹介。「飛行機どうだった?」「日本どう?」などと会話を続けてみる。単純な英語の質問はできる。さて問題は彼らから質問されたときだ。何を言っているのか聴き取れない!!先輩方からはルワンダン特有のなまりがあることは聞いていたが、それだけではなく、私のリスニング力の問題の方が大きかった。とりあえずカタコトな英語で答える。その答えに対してルワンダンは「ふーん」みたいな分かったようなよく分からなかったような表情を浮かべていた。頭の中でこれから彼らと過ごしていけるだろうかという不安が頭をよぎった。

そもそも私はこの第8回本会議で“自分の英語能力のなさを思い知る”ということの一つの目標として掲げていた。それをま

さに空港から電車に乗り継ぐ途中で感じ始めていた。

18日の学生会議ではディスカッションに進んで参加できないことに対して自分に憤りや情けなさ、焦りを感じた。しかし一言も声を発さないで終えるのは嫌だったので、ディスカッションにはあまり関係ないが、Cynthiaがお昼に牛乳を飲んでいたので牛乳の感想を聞いた。

ルワンダと一緒に過ごしていると次第に彼らの英語に耳が慣れてきた。岩手では岩手大学生の家にルワンダとホームステイさせていただいていたので、会話する機会も多くなった。(そもそも岩手大学の宿泊ローテーションは私がルワンダと一緒に生活できるように組んだのだ)たとえ耳が慣れてきたからといってわたしが受け答えできるわけではなかった。しかしどうしても自分の言いたいことを伝えたかったので、絵をかいたり、文字におこしたりして自分の意思を伝えようと試みた。相手に自分の伝えたいことが伝わった時、安堵感というか嬉しさを感じた。何度でもその感情を味わいたいと思った。

“言葉”を使って伝えたいことを伝えられない場合、文字におこしたり、身振り手振りで伝えたりと方法はいくらでもある。しかし言葉を発さなければやっぱり本当に自分の言いたいことを伝えることはできない。言葉を使って、会話することで初めてその人がどんな人なのか、何を考えているのかを知ることができる。この第8回本会議では、自分の英語能力のなさを思い知ることができたと同時に言葉の豊かさを知ることができた。

「忘れないこと」

早稲田大学政治経済学部 2年

谷川琴乃



第8回本会議は、私にとって初めての招致であり、初めての本会議であった。招致前は当然ルワンダ人に会ったこともない。企画準備段階から「ルワンダ人」のイメージは漠然としたままだった。では本会議が終わった今、「ルワンダ人」はどのようなイメージになったか、というとうまく答えられない。たしかに、ダンスや写真が好き、など共通点は挙げられるが、4人とも個性を持った別々の人間であるので、「ルワンダ人」のイメージを言えといわれても答えられないのである。しかし文化や国境を越えて、など難しいことを考えていた招致前とは裏腹に、最終的にはルワンダ人一人ひとりが、一人の人間であり自分と同じような学生なのだと気づき、親近感を感じた。今は「ルワンダ人」と聞くと、漠然としたイメージではなく、4人それぞれの顔が浮かんでくる。

反省点もある。「ジェノサイドだけではないルワンダ」がキーワードのようになってきている。それ自体は良いことである。実際私もルワンダの素晴らしいダンスを見てすっかり魅了され、ルワンダの美しい面

(文化面) を見ることができた。しかし、私がルワンダに興味を持ったのもジェノサイドからであることもあり、それについてどう思っているのか直接彼らの口からききたいと思っていた。聞く機会はあった。しかし、どこまで踏み込んでいいのか迷ってしまい、質問をためらってしまったことがあった。そこには、こういうことを聞いたら気を悪くしないかな、ちゃんと伝わるのかな、ちゃんと答えてくれるのかな、などの思いがあり、彼らに対する一種の不信感や、自分自身の積極性の無さが存在していた。本当に議論を通じて理解しようという気持ちが欠けていたことは否めない。この反省点は次の機会にいかしたいと思う。

私にとって今回一番大きかったことは、下見も含め、岩手に行って被災地を直接訪れ、目で見て、被災者の話を聞いたことである。忘れないでいることがどんなに大切かを知った。

被災地のことを忘れてはいけない、という。同じように、ジェノサイドが起きたルワンダを忘れてはいけない、という。ふつうはずっと忘れないのは難しいことかもしれない。しかし私は今、「ルワンダ」と聞けばシンシア、ロジー、ユジーン、ヴァヴァの顔が浮かんでくる。「岩手」と聞けば岩大生やガイドさん、語り部さんの顔が浮かんでくる。ルワンダのことも、岩手のことも、私はずっと忘れないだろう。

この団体に入っていなければ、被災地に行くこともなかつただろうし、岩手大学の学生と知り合うこともなかつただろうし、もちろんルワンダ人と会うこともなかつただろう。このような経験ができたことに感謝している。

「価値観」

早稲田大学教育学部 2年

永井陽右



私が参加した本会議の数は今回で3回目となった。今までとは少し違った視点に立ち活動を眺めることができたと思う。今回の気づきはざっくりと、ルワンダメンバーへのネガティブイメージだ。

今回の活動において、私にはルワンダメンバーの態度がとにかく目についた。たとえば、彼らのかねてからの希望である“発展”をテーマにした企画であるにもかかわらず、メモの一つも取らない。外部の方のお話を聞くとなるとまず集中力が続かない。気温が高いことに加え、私たちの翻訳精度が悪いということも原因であると思うが、それにしても良くなかった。私が時折注意しても改善されない彼らの態度から、「本当に学ぶ気があるのか？」という疑問が常に頭の隅にあった。

初めてルワンダ人メンバーと接した時、多くの日本人は、ルワンダ人のことを陽気で面白く優しい人だと認識する。ルワンダの伝統ダンスも同じで、とにかく素晴らしいと認識する。やがてそれらは固定観念となっていく。しかし、それで終わってしまっているものなのか。理解とは簡単にでき

るものではなく、お互いに笑っただけで完結するものでもない。ポジティブな認識だけではなく数多くの理解が必要だと感じる。豊かな関係性を築くには多くの理解が必要になってくる。ルワンダ人と日本人は違う、だからこそ日本に来たのなら、自分達の価値観だけではなく日本の価値観に理解を示してほしい。そして逆に、私たち日本人も私たちの価値観に則って主張すべきだと切に思う。

最後に、新メンバーたちに改めて感謝を述べたい。先輩たちのサポートが少ない中で本当にがんばっていたと思う。ありがとう。著しく成長をする新メンバーたちを見て、私もさらに成長しなければと思う次第だ。

「ルワンダと僕」

早稲田大学国際教養学部 4年

中山康平



私がルワンダ人の日本招致に関わるのは、今回が最後となった。思い起こせば私の大学生活はこの団体抜きには語ることは出来ない。私はこの日本ルワンダ学生会議で入学直後から活動している。この団体は、

一般的に大学生が所属するようなサークルとは違い、責任ある仕事を1年次から与えられる。(就職活動で企業が良く使用するフレーズで“若いうちから責任ある仕事を任せてもらえる”というものがあるが、まさにそんな感じである。)

日本ルワンダ学生会議が初めてルワンダ人学生を日本に招致した際、学生会議にて1番初めにプレゼンテーションを行ったのは、尊敬できる3、4年の先輩方ではなく、1年生の私だった。それから3年、私はこの団体のおかげで様々なことを学ぶことが出来た。そして、多くの素敵な、尊敬できる人々に出会うことが出来た。

今回の招致計画が練られ始めたのは、前回の招致(2011年12月)直後だった。実際私はその前回の招致をもって、この団体から卒業する予定だった。しかし、私の心にはわだかまりがあった。“被災地の為にこの団体で何かしたい”、この思いが心のどこかでくすぶっていたのである。

東日本大地震、そしてあの津波が日本を襲った際、私は日本にいなかった。私が、日本が大変な状況になっていると理解したのは、留学先のアラブ首長国連邦大学の寮のトレーニングルームにて、アゼルバイジャン人の軍人達と、日課となっていた筋トレを行っている最中だった。たまたまその日は、トレーニングルームのテレビでイギリスのニュース番組であるBBCを見ていた。そのテロップで日本の地震情報が流れたのである。“帰国するとき日本はどうなっているのだろうか”、地震、そして津波に関する映像がテレビで流れるたびに、そういう不安な思いに駆られた。“日本の為に何

かできることをしよう”、そう思い、留学先の大学で、ドバイに駐在されていた日系の企業の方々と募金活動も行った。しかし、現地を自分自身の足で訪れ、被災された方々の為に直接何かしたいという強い思いを持っていた。

こういう訳で、今回の招致で被災地の話が出た際、迷いながらも、ルワンダ人被災地招致事業の1担当者に立候補した。ルワンダ人と共に被災地の為に何が出来るかわからないけど、これが自分自身にしか出来ない事だと思ったのである。どのようなことを行ったかは、岩手滞在のページを参考にしてほしい。ただ私にとってこのルワンダ人招致が、過去に関わった招致の中でも一番の思い出になるのは間違いない。

この被災地への招致、そしてこの団体に所属して考えたことは書くにはかなりの分量となるだろう。そういう訳で、あえてここに私の感想を多く書くことはしなかった。もし私が何を考え、何を学んだかを聞いてみたいという稀有な人がいるとしたら、是非連絡頂けたらと思う。拙い文章ではあるが、これで終わりとさせて頂く。

「言葉の壁と、 壁を越えた『言葉』」

早稲田大学政治経済学部 2年
藤田康宏



ムラホー！！

8月17日田空港に4人のルワンダ人が降り立った。ムラホーとは日本語で「こんにちは」。ALTの先生を除いて人生で初めて外国人と会う緊張感は相当なものでした。私は日本どころか出身の栃木県から離れたこともあまりない純ジャパ。全てが初めてのことばかりでした。

私達の団体は例年夏に日本人がルワンダに渡航し冬にルワンダ人を日本に招致しますが、今年は日程の関係で夏にルワンダ人を日本に招致し冬に日本人がルワンダに渡航することになりました。今年この団体に入った私達新メンバーの活動は、まず夏の招致事業に向けて日本国内で企画の準備を行うことです。ルワンダ人と共に日本のどこを訪れたいか、彼らと何をしたいのか、半年かけて準備を行いルワンダ人を迎え入れることが出来たと感じています。

実際のところ夏にルワンダ人を招致することになり日本の中を練り歩く活動を行っていたため、半年間なかなかルワンダに

関する活動を行なっているという実感が持てませんでした。企画を作り上げていた間は明確に意識していなかったようでしたが、間違いなく大きな葛藤を抱えていました。自分が本当にやりたいことが分からずある意味途方に暮れていたのは間違いなかったと思います。

しかしルワンダンが来日そうそうムラホーと konichiwa (こんにちわ) と言ってきて、ようやく自分のやっていることに実感がわき始めたのでした。

彼らとはかく明るい。日本と違ってルワンダではコミュニケーションとしてボディタッチも多用されます。ルワンダン男子が日本人女子に絡む様からルワンダ人男子は全員「チャラ男」であると結論付けられました。また私の経験ともあわせると同様にルワンダン女子も「チャラ子」でありませぬ、絶対に(笑)。一番驚いたのはとある日の帰りのバスの中で、ルワンダン達が陽気な歌を何曲も何曲も歌っていたことです。一日の行程を終え大半の日本人は疲れから眠りについていたのに、彼らには無限のパワーがあるのではないかとさえ思っていました。パワフルさの影響を受けて、私もなぜかいつもとは異なりテンションが非常にハイに。

ルワンダで用いられている言語は英語、フランス語、そして現地語のルワンダ語の3つです。日本人とルワンダ人との間では主に英語でコミュニケーションがとられました。しかし今回の企画全体を通じて初めての外国語での意思疎通の難しさを痛感しました。いざ英語を用いて会話をしてみよ

うという段になるとそれなりに勉強してきたはずの英語が全く役に立たず、日常会話や簡単なことならなんとか意思疎通がとれたものの多少でも込み入った話になると私は沈黙せざるをえませんでした。それ以前に、様々なプレッシャーのために日本語として自分の言葉がなかなか出てこなかったのかもしれませんが。時には日本のために、ルワンダのために私達は何ができるか、そのような視点から企画を考えていた時期もありましたが良い結果は出ませんでした。何事をなすにもまず相手とのコミュニケーションがしっかり取れていなければ何事も始まりませぬ。当たり前で基本的なことの大切さを思い知らされました。ディスカッションにおいてもなかなか英語が出ずにもどかしい思いを感じました。

このように言葉は上手く通じなかったものの、お互いを理解するという面で感動できる出来事もありました。それはルワンダンのダンス。ルワンダンのダンスコンサートは横浜、岩手、栃木の各訪問地で行なわれました。そのいずれでも終盤に入るとルワンダンたちが手拍子をだして観客全員を踊りに巻き込み、いつの間にかステージと観客席の見分けがつかない状態に！！

人の心って案外簡単に通じ合えるものだということを痛感しました。自分は深く考えすぎていたのだなと軽く自己反省。相手を一人の人間として捉え、お互いに心を開き合えば争いは自然と減っていくのかなと直感直感。

一緒に行動している時私が上手く英語を話せなくてもルワンダンたちが、「Takechiyo!!!」と全力で絡んでくれて

て本当に楽しかったです。

今回の企画を通じて全てのスタートステップである「相互理解」の一部を理解できたと思います。しかしそれは何かをするためのスタートステップに過ぎないのかもしれない。

日本で企画をするのだから日本のことを中心に考えた方がいい、そんなアドバイスをもらってからしばらくの間ルワンダについて考えることを控えてきましたが、ルワンダに渡航する今期はそういうことも含めて自分に何が出来るかを考えていきたいと思います。

「異文化交流の壁」

早稲田大学政治経済学部 3年
藤本文史



今回の第8回本会議は、これまで国際交流とはまったく関わりのなかった自分にとって、外国人、とりわけアフリカ人と交流する初めての機会であった。

大学1年生、2年生のころは、大学院に進学しようと思っていたため、日本ルワン

ダ学生会議のような企画活動には参加しないで、基本的に勉強していることが多かった。なので、当然日常において外国人と交流することはあまりなかったし、ましてアフリカ人と交流するなどほとんどなかった。しかし、もともと本を読むことが嫌いであり、また大学生活もなかなか思うようにいかないこともあってか、このままずっと勉強し続けることに限界を感じていた。そうして、大学2年生の最後の時期に日本ルワンダ学生会議の活動に参加してみようと思った。

とはいえ、大学3年生というタイミングで、ルワンダ人招致という規模の大きい企画に参加することには、正直ためらいもあった。また、そういう気持ちのせい、企画に対する参加は相当中途半端なものとなってしまった。

本会議中、ルワンダ人学生に対して消極的になってしまうことも多く、英語もうまくしゃべれず、結果として今回の招致で異文化交流の壁を思い知らされた。異文化交流の壁を克服するためには、個人個人がそれを乗り越えるためにそれ相応の努力をしなければならないことを痛感した。

しかし、異文化交流を通して、後悔することもあったが、参加してよかったと思うこともあった。それは、日本人とルワンダ人との間の違いを、なんとなくではあるものの、感じ取れたことである。日本人とルワンダ人の違いは、文化や常識の違いといったものに代表されるけれども、とりわけ違いを感じたのは思考の違いにおいてである。(こういった言い方はおこがましいかもしれないが) そういった思考の中に先進国と発展途上国との断絶を感じたりもした。

今回の交流では、自分が感じた日本人とルワンダ人との思考の違いをメンバーに伝えたり共有したりすることができなかった。そういった意味で、今回の招致で自分は“相互理解”を深めることができなかったと思う。しかし、日本やルワンダ、ひいてはアフリカの問題を考察するうえで重要なヒントを得ることができたという点で、今回のルワンダ人との交流は、自分の人生である程度重要な意味をもつように思われる。

「私を魅了するもの」

立命館大学経済学部 2年
松本万里子



京都から東京へ向かう新幹線の中、私は何とも言えない気分浸っていた。初めてルワンダンに会える嬉しさと緊張が入り混じり、さらには中学校の修学旅行以来の東京ということで、道に迷わないだろうかと少し不安な気持ちもあった。

思えば、私は高校生の時、この団体のHPを見つけ、大学に入学したらこの団体に入ろうと決めて以来、彼らに会うことを心待ちにしていた。そしてついその日がやってきたのである。長年の夢が叶えられ

たような気持ちになり、とても嬉しかった。部屋の戸を開け、初めてルワンダンにあつたとき、笑い声や話している雰囲気などから彼らに魅力的なものを感じていた。そして、私は緊張の中、プレゼンをした。プレゼンをするにあたって、何となくこんな議論になるのだろうと予想していたのだが、実際は予想に反し、日本とルワンダの違いを感じることができ、私にとって、とても有意義なものになった。

プレゼンを終え、一度京都に戻った後、数日後に栃木企画に参加した。栃木企画初日のイベントでは、ルワンダンのダンスを目の前で見ることができて、とても感動した。2日目は足尾に行き、植樹や車窓見学を経て足尾銅山を見学した。帰りのバスの中、日本人メンバーは、みな疲れてほとんどしゃべることはなかったのだが、ルワンダンメンバーは終始談笑していた。さらには、歌も歌いはじめ大盛り上がりであった。疲れて、バスの中で眠かった私。ルワンダンの歌をBGMに眠るなんて、なんて贅沢なんだ！とのんきに考えていたのだが、やはり眠ることは出来なかった。3日目は、日本の農業について学んだ。積極的に質問をしたり、実際に体験してみようとしたりするルワンダンの学ぶ姿勢に感心した。自分も見習わなくてはと、ルワンダンを見て自分を正すということが何度かあった。

この団体の理念である「相互理解」。今回自分は、どの程度ルワンダンのことを理解できたのかは分からない。ただ、会話をしているなかでお互いに通じ合うものがあったのは確かだ。私は、今回の来日メンバーの中で、Rosetteと話す機会が多かった。同じ経済学部だったため、日常的な内容だ

けでなく、勉強の内容も話すことができた。お互いの国に興味を持ち、私が彼女に日本語を教え、彼女が私にフランス語とキニヤルワンダ語を教える。言葉は違っても、思いは伝わるということ、身をもって体験した。そして、今回の本会議に参加している間、終始私を魅了する何かがあった。しかし、今の時点で私はこれが何なのかよく分からない。この何かを知るためにも、これから彼らと交流を続けていきたいと思う。

「相互理解？」

日本大学法学部 1年
丸茂思織



新入生として初めて経験することとなった第8回本会議は、たくさんの楽しかった記憶を私に残したのと同時に、自分の課題・問題が浮き彫りとなる、少々ほろ苦いものとなった。

このたびの第8回日本招致からは相当話がずれてしまうが、私が日本ルワンダ学生会議（以下 JRYC）に入ろうと思ったきつ

かけについて少しばかり書きたいと思う。私が JRYC に入ろうと思った理由は大きく二つある。いたってシンプルかつ単純で恥ずかしい限りだが「アフリカをよく知らないから（知りたい）」というなんとも無責任な理由と、『学生同士という平等かつ対等な関係』でルワンダという国と関わりをもつことができる」という JRYC の団体理念に惹かれたからである。事実、我々日本人がいざアフリカという世界と関わろうとすると、無意識のうちに「支援」という方向にばかり目が向いてしまいがちではないだろうか。そんな中 JRYC の活動は、私にとってとても魅力的なものに見えたのである。

今初めて告白するが、実はこの団体の「相互理解」という活動理念を私はとても気に入っている。この日本招致を迎える前にも JRYC の将来について考える場が多く設けられ、この活動理念に関する議論も多々行われたわけだが、この「相互理解」という活動理念は理念でありながら、面白いことにメンバー各々で異なる解釈をもち多用な意味を為す。私自身は「相互理解」に明確なゴールは存在しないと考えている。抽象的でなんとも矛盾した話になってしまうが、ゴールのない「過程」を地道に踏み続けることに私たちの活動の意味があるのではないだろうか。

また一度の招致に多額な助成金を要しながら、「目に見える具体的な成果」を求められないのは、ある意味「私たちが学生だから」であるからだと言えなくもない。それは団体理念として、「相互理解」を掲げられるひとつの大きな理由であるとも言える。「学生」という立場を一度離れば、アフリカ世界と関わるにも経済的利害関係等に

付きまといられるだろうし、なにかしら数字に表れるような成果・変化が求められるのは必然。…こんなことばかり述べていると、「学生」という立場を振りかざし、甘ちゃんやっているように聞こえるかもしれないが、そういうことを言いたいわけではない。私はむしろ「相互理解」というなんとも難しい活動にこの団体を通して取り組んでいることを、とても嬉しく思う。つまり、ある意味とてつもない贅沢な活動をさせてもらっているのだと感じる。

しかしこの招致に限っては、それが私個人にとって一種の「甘え」になってしまったという気持ちが正直否めなかった。“英語力が低くて、言いたいことが伝えられない。”“伝わらなかったらどうしよう…”。“発言をするときには、ちゃんとしたまともなことを言わなくちゃ。”“自分に自信がもてない。”…等、恥ずかしながらこんなくだらないプレッシャーに何度も悩まされた。ただでさえ難しい「相互理解」が、私の実力不足と相まって、さらに遠くへ行ってしまったような気さえた。

ここまで個人的な反省点ばかりを指摘してしまっただけ、もちろん多くの収穫もあった。上記の反省も「英語力」と「積極性」という私個人の課題を見つめ直すきっかけにもなったし、なによりルワンダと共に過ごした時間は本当に楽しいものだった。カッコいい男の子や彼氏についてガールズトークをしたり、新しく買ったカメラと一緒に悪戦苦闘したり、駅のホームでべろんべろんに酔っぱらった男性を見て皆で大笑いしたり・・・こうした思い出だけでももう数えきれない。今でも「日本人

の『他の人の面倒をよく見る』という文化はすごくいい。アメリカ人じゃこうはいかないよ！」と言いながら私の手を握った Rosette の姿が目には焼き付いて離れない。日本をあまり知らないはずの彼らの言葉が、こうして今まで気づけなかった自国の素晴らしい文化に気が付かせてくれることも数多くあった。

またこの招致では様々な“ギャップ”をルワンダ・日本間に留まらず、いたる場所で痛感することとなった。企画の一環で岩手に足を運ばせてもらったわけだが、「被災地と非被災地」では勿論のこと、同じ岩手県内でさえも「盛岡と沿岸部」では復興や震災に対する考え方にギャップが生じていることを知った。ギャップはどんなに努めたところで消し去ることはできない。しかし相手の気持ちに少しでも歩み寄る努力をしたり、自分の持つ異なる考え方を相手に伝えたりすることで状況を少しずつかえることはできる。試みなければなににも変わらない。ルワンダに留まらず、同じ日本の中でも様々な場面でこうした「相互理解」を試みることができたことは、「相互理解」というゴールのない活動理念を掲げる JRJC に所属する私にとって、一種の手ごたえにもなった。

最後になるが、第8回本会議に関わって下さったすべての方々に今一度感謝の意を表したい。助成団体様はもちろんのこと、一緒になってルワンダダンスを踊って会場を盛り上げてくださったコンサート来場者の皆様、辛かった経験を話すのでさえ人知れない勇気が必要であるにも関わらず、よく分からないルワンダという国から来た

メンバーに真摯に東日本大震災の経験を語って下さった被災地の方々、影から支えて下さった OBOG の方々、そして岩手企画を一緒に作り上げてくれた岩手大学メンバー…。至って当たり前のことではあるが、この招致に限らず「相互理解」を掲げる JRYC という団体は、“自分”と“自分以外の相手”が存在し始めて成り立つものである。その事実を私たちは片時も忘れてはならない。大勢の方々を巻き込んだ第8回本会議。その場にいさせてもらった者の責任として、この活動を日本・ルワンダの将来につなげていきたいと切に思う。

「当事者意識」

横浜市立大学国際総合科学部 3年
宮本寛紀



何かを失ったり、壊してしまったりすることは簡単だが、それを修復させるにはとても長い時間や労力が必要である。岩手の被災地を訪れ「復興」について考えた時も、栃木の足尾銅山跡地にて「発展とそれに伴う弊害」について考えた時も、共通しているのが、いかに修復していくということが難しいかといったことであった。いわれ

てみれば当たり前のことだが、実際に当事者のお話や経験を聞いてみると、やはり深く印象付けられ、その言葉ひとつひとつが重くのしかかってきた。

岩手においても、栃木においても、はたまたルワンダで起きたジェノサイドにおいても、自分自身がその当事者になるということは不可能であるし、その必要はない。ただ、その当事者に少しでも近づき、対話をするだけでも、悲しみや辛さを共有することができると私は信じている。そして、当事者ではないからこそ違った視点や角度から物事を捉えることが出来、それが時には当事者に還元出来るような力になる。その力というのは、精神的な支えであったり、具体的な解決への糸口であったり、様々なものが考えられるが、そういった活動を出来るのが当団体の強みであると再認識することが出来た。曖昧な表現で伝わりづらいかもかもしれないが、これが今回の本会議を終えた自分の中での結論である。そういった意味では、今回の日本招致事業は当団体の強みを大いに発揮したのではないかと思う。このことについては、これから先も考えていきたいことでもある。何かの問題に触れようとする時、外部の人間として取り組もうとする時、それは自分にとって、団体にとって、当事者である相手にとってどのような意味を持ち、意義のあることなのか。考え始めるときりがないし、極論を言ってしまうと、人によって捉え方は違うためそこに正解はなく、答えなど出ないかもしれない。the best を常に目指し、better にしていく努力はこれからもしていきたいと強く感じた。

また、今回の本会議を振り返ってみると、

企画準備の段階から多くの困難に遭遇したことが思い起こされる。それは、今回の事業全体の責任者として、それまでの本会議とは違った立場で関わっていたからこそであろう。私自身、大学1年次の冬に当団体と出会い、第3回本会議（日本招致）への参加、第4回本会議でルワンダへの渡航を果たし、第5回本会議では会計を務めた。その後、1年間大学を休学し海外にいたため、昨年度の第6回（ルワンダ渡航）と第7回（日本招致）には参加することは出来なかったものの、団体の中では古株の存在であり、新しく加入したメンバー含め皆を引っ張り、先導していけるような役目を担うべきであろうといった自覚はあった。しかしながら、その観点から考えると反省させられることばかりである。また、過去3回の日本招致事業では5名のルワンダ人学生メンバーを日本に招聘することが出来ていたものの、今回は助成金や補助金が思い通りに受給させていただくことが出来ず、様々な議論の後に4名のメンバーを招聘する結果となった。これは、仕方の無いことかもしれないが、やはり人数が減ってしまえばそれだけ各訪問地での企画や今後の活動に支障をきたしかねなかったため、非常に残念に思った。ただ1つ自信を持って言えることは、第8回本会議を実施し、無事に予定していた全企画を終えることができ良かったということである。正直、ルワンダ人学生を日本に招聘するためのVISA取得であるとか、彼らが滞在中の身元保証人を一学生である人物が務めるというのは多大な責任が生じるため、非常にリスクも伴っている。こういった面もこれからの活動で考慮していきたいと思う。

最後になりましたが、今回の第8回本会議実施に関わってくくださった方々、支えてくださった方々に感謝の気持ちを込めて終えたいと思います。ありがとうございました。

コラム ムリガンデ大使の深イイ話

日本滞在の最終日、私たちはムリガンデ駐日ルワンダ大使にお招きいただき、大使のご自宅を訪問・ランチをご一緒しました。ルワンダンボーイズは来日時から大切に持っていたルワンダの伝統的な杖（ルワンダ国旗カラーのリボン付き）を用意、ルワンダンガールズは朝からに念入りにメイクをしていました。

家におじゃましてまずはしばし懇談。私達メンバーのコップが空になると、大使や一等書記官のベネディクトさんがジュースを注いでくれます。一国の大使にジュースを注いで頂くとはい…日本人は申し訳ない気持ちと有難く思う気持ちでいっぱいなのですが、ルワンダンはそうでもない様子。後程ユジーンに聞くとところによると、「目上の人からの好意は素直に受け取るものさ」とのこと。それがルワンダ文化に共通する概念かどうかは分かりませんが。

美味しい食事の後は、スーパールワンダ語タイム。ルワンダンが日本で感じたこと・体験したことをルワンダ語で大使に伝えていたようです。

しかしある時（ルワンダメンバーが日本人の時間の正確さについて驚いた、といった内容を話した後のことだと推測）、大使が急に真面目な顔つきになり、英語でこうおっしゃいました。

「時間に正確であるということが、日本がここまで発展した理由だと思う。ルワンダだったら 10時にミーティングをスタートさせようとしても 11時に始まる。確かによくあることだが、例えば 20人中 15人は時間通り来ていて、ただ重要な人が 1時間遅刻したために 11時からミーティングが始まったとしたら、15人分の 1時間が無駄になる。でも、日本では、そういうことが起きない。時間を守り、大切に使うことこそがルワンダの発展にも繋がるはずだ。」

この深イイお話に、ルワンダ人は苦笑いを浮かべながら納得しているようでした。

（といっても日本ルワンダ学生会議の日本側のミーティングもしばしば時間通りに始まらないこともあるよな…なんてことは大使の前では秘密です。）



記念に写真をぱちり。ルワンダ人、ポーズを取ってキメています。
暖かく迎えてくださった、ムリガンデ大使とベネディクトさん、ありがとうございました！

（岩井天音）

付録

メディア掲載.....	114
後援・助成団体様・ご協力頂いた方々.....	119
写真館.....	121
おわりに.....	123

メディア掲載

8月22日付
盛岡経済新聞 web 記事より

岩手・ルワンダの学生ら復興交流イベントコンサートや学生会議など / 岩手

盛岡経済新聞 盛岡市 2011年08月22日(水)19時55分配信



クロステラス盛岡(盛岡市大通)で8月28日、「ルワンダ・ピースフルコンサート」は岩手・ルワンダを、そして被災地を忘れないために〜」が開催される。(盛岡経済新聞)

【画像】日本ルワンダ学生会議の大山剛弘さん、岩手大学の涌井翔(ゆい)さん

同イベントは、岩手大学の学生と日本ルワンダ学生会議が企画するルワンダプロジェクトの一環で開催。日本ルワンダ学生会議は、首都圏とルワンダの大学生を中心に結成された交流団体。両国間で国際会議などを行い、相互理解のために活動している。今月21日からルワンダ国立大学の学生が来県し、被災地を事前高田でのボランテアや学生会議での意見交換会などを行う。

「1994年に内戦を経験したルワンダはすごい速さで復興を果たしていると感じる。ルワンダで起きた悲劇と復興のプロセスは、東日本大震災にも共通点があるので想った」と同プロジェクトの岩手大学の涌井翔(ゆい)さんは話す。「イベントを通じさまざまな人が集まって未来を考えるような機会にしたい、まずは、お互い勝利の見える関係にしなければ」とも、当日は、日本に招待されるルワンダ学生ダンスグループ「アインダナムチュウバ」、ルワンダが植民地化される以前からある平和を象徴する伝統的ダンスを披露する。アフリカソバークラッシュユニットのSUGEE(スギ)さんによるアフリカの現状を伝えるからの「アフォーダンスや、ルワンダコーヒーの試飲なども行われる。

開催時間(13時30分〜16時、参加無料、事前予約をする特典もある。



「復興」とは何か、互いの経験をもとに意見を交わす学生ら

被災地で学ぶ「復興とは何か」

26日に 成果発表 ルワンダ、岩手、首都圏大学生

民間対立を繰り返す、国の復興に数百年を要するルワンダ。アフリカ大陸東部のヒクトリア湖の西に位置する国。有志と、早稲田大学など首都圏とルワンダの大学生を中心組織する「日本ルワンダ学生会議」が26日に岩手の大学生と共に開催し、「復興」とは何か考えようとい。高田市を訪問、26日には盛岡市のクロスステラスで開催するプロジェクトが1日から1週間の日程で、盛岡市のプロジェクトの成果を発表する。

プロジェクトは、岩手という被災地を学ぶ手立大学院国際学研究所「リサーチセンター」を1年の研修期間(2008)と、改めて被災地を日本ルワンダ学生会議と日本ルワンダ学生会議代表で早稲田大学大学院経済学工学研究科1年の大山剛弘さん(26)が、高校の同級生たちとが主体で企画された。

岩手大の学生10人と、岩手大の学生10人と、ルワンダ大学の学生4人が参加。26日は、岩手大の講義室を会場に、ルワンダの復興の歩みも東日本大震災について互いに報告し、意見交換した。

山田町出身の岩手大人文社会科学部3年の福士海海さんは、被災地の現状や復興について報告。吉田が被災し、しほりんは被災地で暮らしたくないと思つたと被災地を推して来た

の現状について紹介する。ルワンダの学生らは、被災地訪問以前から復興を担う共育されてきた経験が、日本ルワンダ学生会議の目的や平和への思いを共有する。

ルワンダで1994年に起きた民間対立による大虐殺では80万人から100万人が犠牲になったとされる。しかし、その後約15年間で驚異的な経済発展を遂げている。

大山さんは「ルワンダの学生たちは、内戦やその後の復興など多くの経験をしている。復興が繰り返りながら日本の学生が学ぶべきことはたくさんある」と話す。岩井さんも「ルワンダからの復興を知るルワンダの学生と、被災からの復興に立ち向かわなければいけない日本の学生が互いを知り、学んできたことを生かしていきたい」と思いを強くしていた。

ルワンダ学生と復興考察

プロジェクト きょう被災地訪問

岩手大、
首都圏の大

学、アフリ
カ・ルワン
ダの学生が
被災地支援
について考
え行動する

「ルワンタ
・プロジェクト201
2」のメン
バーは23
日、陸前高
田市を訪問
する。被災



被災地訪問を前に「復興とは何か」を話し合う学生たち

の学生が津波到来時の
様子を解説すると、ル
ワンダの学生は「震災
後、政府はすぐに対応
したのか」などと熱心
に質問していた。

同プロジェクトは岩
手大の学生10人、ルワ
ンダ国立大の学生4
人、首都圏の大学生13
人で構成。かつて、民
族対立による大虐殺を
経験したルワンダの学
生と交流を深め、とも
に平和への思いを発信
していくことで「復興
とは何か」を考えてい
くことが目的だ。

同プロジェクトの岩
手大代表を務める洞井

者と話し合い、震災か
ら1年半後の現状を知
ることで「復興とは何
か」を考え、発信する。
ンなどを展開。岩手大

(19) 地 域

(第3種郵便物認可)

盛岡・東北

地域の話題・情報お寄せください

本社
019(653)4111
紫波支局
019(672)2800
二戸支局
0195(23)8080
岩手支局
0195(62)3249
八幡平支局
0195(70)1507

翔さん(同大学院修
士1年)は「被災地を
訪問し、実際に感じた
ことを多くの人に伝え
ていきたい」と力を込
めた。
26日は午後1時半か
ら盛岡市大通3丁目の
クロステラス盛岡でル
ワンダのダンスコンサ
ートなども行う。入場
無料。

復興へのヒント探る

ルワンダから学生視察

陸前高田

アフリカの内陸国・ルワンダの学生が参加する「東日本大震災をアフリカの学生と考える」つなげよう未来へ」プロジェクトは、22日から県内で実施されている。23日には岩手大学や首都圏の大学生らとともに陸前高田

市を訪れ、戸羽市長との会談、震災語り部からの聞き取りなどを行った。岩手大生と日本ルワンダ学生会（事務局・早稲田大学）を中心に企画された被災地訪問プログラム。ルワンダ国立大学の学生4

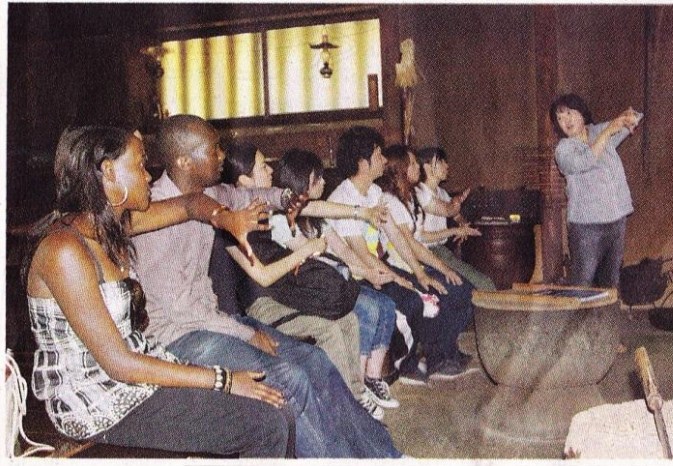
人を含む約30人が22日から4日間の日程で盛岡での事前学習および陸前高田市の視察などを行っている。23日は同市を訪れ、戸羽市長と面会。市長から復興計画の概要などについて説明を受けた。ルワンダは18年前、民族対立によって100万人の命が失われ、多くのコミュニティや文化を喪失した経験があることから、「コミュニティーをなくした人たちの居場所をどう確保するのか」といった質問も出された。

このあと2グループに分かれ、小友町の気仙大工左官伝承館や竹駒町の未来商店街、一

本松などを見学。このうち伝承館では案内人の武蔵裕子さんが、神戸から分灯された「3・11希望の灯り」の設置経緯や、震災直後、現在までの状況を解説した。

内陸部に住むルワンダの学生は、実際に現地を訪れるまで津波がどういうものかイメージをつかめずいたというが、大船渡市と陸前高田市の位置関係や被害状況を聞き、震災

前後の写真を見るにつけ、事態の深刻さを実感した様子だった。早稲田大学院・創造理工学研究科修士1年の大山剛弘さんは「ルワンダも悲劇から復興してきた歴史があり、東北の復興に役立つ共通点が見つけれないかという思いで来ている。痛みを分かち合い、相互理解を深めることで両国をつないでいきたい」と話していた。



陸前高田の被害状況などについて説明を受ける学生たち。小友町・伝承館

後援

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）
ルワンダ国立大学（National University of Rwanda）
アフリカ平和再建委員会（ARC）

助成団体様

双日国際交流財団
三菱東京 UFJ 国際財団
岩手大会社 let's びぎんプロジェクト
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

ご協力頂いた団体・個人の皆様（順不同）

在ルワンダ日本大使館
駐日本ルワンダ共和国大使館
横浜市立横浜商業高 GLOCAL-Y 部員
多摩美術大学ジャンベ部員
横浜アーツフェスティバル実行委員会後援
Dance Dance Dance@YOKOHAMA2012 参イベント
横浜市文化観光局後援
駐日ルワンダ大使館公認
港北公会堂スタッフの皆様
岩手大学有志
陸前高田市市長戸羽太氏
陸前高田市庁舎職員の方々
左官大工伝承館職員武蔵様
りくカフェスタッフの皆様
未来商店街スタッフの皆様
ガイド新沼岳志様
クロステラス盛岡
ジャンベ演奏家の SUGEE 氏
宇都宮大学
宇都宮大学有志
日光市職員の皆様

国土交通省足尾砂防出張所

NPO 法人足尾に緑を育てる会

足尾まるごと井戸端会議代表山田功様

日光市地域おこし協力隊皆川俊平様

コンセーレ引間章夫様

NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク岩井俊宗様

橋本様

床井様

ダンスコンサートに参加して下さった方々

誠にありがとうございました。

写真館

イベント企画 in 横浜



岩手企画





肩のたたき合いっこ (笑)

栃木企画



(見えないけど...) 頭上にトンボが



サプライズのバースデー!



程よく筋肉のついたセクシーなルワンダン男児の背中

コーディネーターお疲れ様!



ありがとう
ムラコゼチャーネ



おわりに

日本ルワンダ学生会議の団体規約第2項は、「目的」の項である。大まかにまとめると、「互いの国や地域の文化・社会に対して、多面的な理解をする／理解を促す」「両国や世界で起こる問題に対して共通認識を持ち、友情を育み、確かな信頼関係を築くこと」と書いてあるのだが、誤解を恐れずに言えば、至って想像の範囲内の「目的」である。国際交流の意義を定義づけようとするれば必ず出てくるようなフレーズであろう。また、これらの目的は、今日までにルワンダ・日本で開催した本会議によって達成への途上にあるのではないかと感じる。

それでは、日本ルワンダ学生会議の「目標」とは何だろうか？ 世界平和、相互理解、日本ルワンダ間の民間外交の架け橋になる、社会貢献、国際協力——、個人がそれぞれに掲げる目標は様々であり上記の目標を持つ者もいるであろうが、実は、団体として明確な目標はない。

その代わり、と言っては難だが、私達には「相互理解」という理念がある。団体の設立当初から、「両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、ひいては恒久的な平和構築への貢献を果たすという信念」（規約第3条）に基づき、「相互理解」が大切にされてきたのである。

ここで、「相互理解を深める／促進する」といった目的や目標が据えられている訳ではないことに注目したい。相互理解自体を目指しているのではなく、ルワンダ人と共に「何か」に取り組む際に大事にするべきもの、もしくはその過程で生まれるものが相互理解の精神なのではないかと思う。この「相互理解」という言葉こそが、今日の日本ルワンダ学生会議を日本ルワンダ学生会議たらしめるものである、と私は考えている。

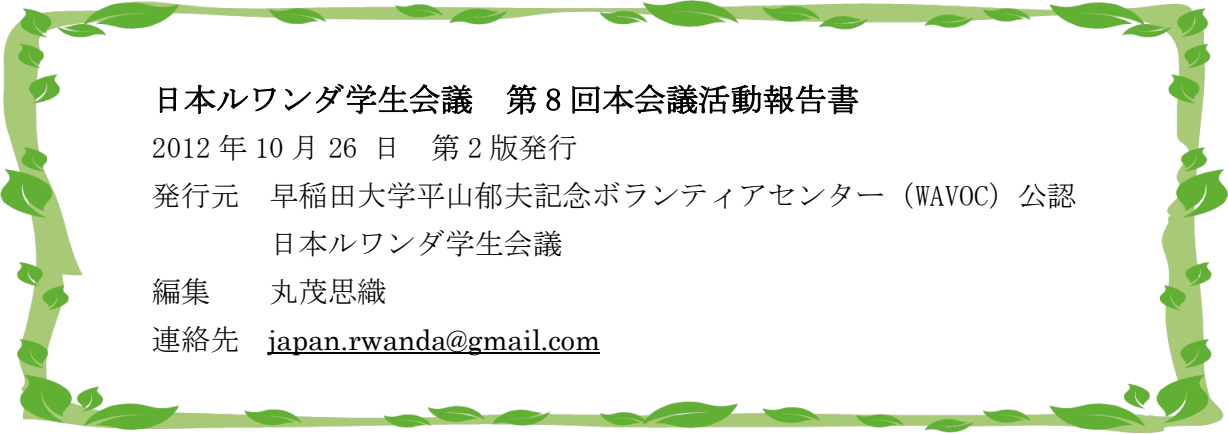
と、ここまでさも誇らしげに書いた訳だが、実は理念だけが立派で目標がないことは団体メンバーを悩ませている一因でもあるのだ。助成金の申請時や外部の方に団体目標を問われた時、どう答えるのが適切なのか迷ってしまう事が多々ある。実際、団体の「目標」については今後より一層個人が考えていくべきテーマなのかもしれない。

しかし、あくまでもポジティブに考えたい。日本ルワンダ学生会議は、ルワンダ渡航と日本招致事業を軸にして、今まで個人の興味のままだに自由な活動をしてきた。「やりたいこと」に取り組み、実現できる環境にあるはずだ。

私自身は、この団体の活動はただの「きっかけ」であつても良いと思っている。しかし、ここで得た経験は一つも無駄ではなかった。「相互理解」に込められた信念を信じ続け、自分なりの世界平和という目標に向かって努力していこうと思う、それが卒業まで半年を切った今の心境である。

日本ルワンダ学生会議 第6代代表 岩井天音

この事業は、双日国際交流財団・三菱東京 UFJ 国際財団・岩手大会社 let's びぎんプロジェクト・WAVOC の資金協力の下で行われました。経済的な面で支えてくださった各財団の皆様及び、各活動にご協力くださった多くの方々に改めて深く御礼申し上げます。



日本ルワンダ学生会議 第 8 回本会議活動報告書

2012 年 10 月 26 日 第 2 版発行

発行元 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 公認
日本ルワンダ学生会議

編集 丸茂思織

連絡先 japan.rwanda@gmail.com